

簡易 PDF 版  
(51~70)

# 目次

51. 「二重反転」をやってみる .....	5
52. 「不動の自分」を掴む感覚 .....	9
■ 「自分が動いているのではなく、世界が動いている」動画 .....	9
■ 眉間鉛筆ワーク .....	10
53. 3次元球面について .....	12
■ 「2次元球面」とは何か? .....	12
■ 「3次元球面」とは何か? .....	14
■ 3次元球面をさらにつきつめる .....	15
54. $\psi 5$ の認識方法まとめ .....	18
■ これまでのおさらい .....	18
• ゴール .....	18
• 回転 .....	19
• 無数化 .....	21
• 裏返し（強引に反転させる） .....	23
• 不動の自分 .....	25
• 3次元球面について理解する .....	26
■ 「構造」と「カタチ」を理解することの意義 .....	26
55. 胡蝶の夢と東洋思想 .....	27
■ 荘子の胡蝶の夢 .....	27
■ 「老荘思想」について .....	29
■ 老子と対となる人物 .....	31
■ 二つの思想の流れ .....	32
56. 等化時の心理事情 .....	35
■ $\psi 5$ における心理事情 .....	36
■ 等化と統合の関係 .....	38
57. $\psi 5$ における「自己」 .....	41
■ ユングのセルフと、ヌーソロジーの自己 .....	42
■ スピリチュアルのハイヤーセルフと、ヌーソロジーの自己 .....	44
58. ユダヤ・カバラの神と、人類が見る神? .....	47
■ ユダヤ教とユダヤ教神秘主義（カバラ） .....	47
■ 「カバラの神」とは? .....	48
■ カバラとヌーソロジー .....	50
■ 「人類が神を見る日」の意味とは? .....	53
59. 「次元観察子 $\psi 6$ 」について .....	55
■ 「次元観察子 $\psi 6$ 」の基本 .....	55
■ 自己（ $\psi 5$ ）の反映としての他者（ $\psi 6$ ） .....	57
60. $\psi 6$ 側の「回転」と「無数化」 .....	59
■ 回転 .....	59
■ 無数化 .....	61

■ 主体の無数化に対する、客体の無数化 .....	63
61. 3D ゲーム内の身体 .....	66
■ 「火星」の付随イメージ .....	66
62. 「他者化」とは何か? .....	68
■ 他者化と4大欲求 .....	68
■ 他者化を判断するための指標となるもの .....	69
■ 他者化は悪いことなのか? .....	70
■ 画一化、他者化、他者の哲学 .....	71
63. プログラム4 次元観察子 $\psi_7 \sim \psi_8$ 位置の変換と転換 .....	73
■ 「位置の変換」というワード .....	74
■ 6500年周期と位置の変換 .....	75
■ 陽子は愛のようなもの? .....	76
■ 次元観察子 $\psi_7$ のゴール .....	78
64. $\psi_7$ を認識するために (前編) .....	81
■ 次元観察子 $\psi_5$ から前にある一本の線 .....	81
■ 背中合わせの自己と他者 .....	82
■ 繋がった所がゴール .....	83
65. $\psi_7$ を認識するために (後編) .....	85
■ 自己の無数化 .....	85
■ 自己球体の無数化 .....	87
■ 背中合わせの状態からの回転 .....	89
66. 木星の力と、グローバリズムを巡る人間のイデオロギー .....	95
■ 凝縮化の構造と上位次元 .....	95
■ グローバリズムと反グローバリズム .....	97
■ グローバリズムと反グローバリズムの争い .....	101
■ グローバリズムと反グローバリズムを等化するもの .....	103
■ 資本主義の終焉の時代と、人間と神の関係 .....	104
67. 「次元観察子 $\psi_8$ 」について .....	106
■ 自己と他者が共有している意識は何なのか? .....	106
■ 時空の意識と「中和」の力 .....	109
68. オンライン3Dゲームの構造 .....	111
■ ゲームと偶数系の元止揚 .....	111
• 2Dゲーム、3D静止画と $\psi_4$ .....	111
• 3Dゲームと $\psi_6$ .....	112
• オンライン3Dゲームと $\psi_8$ .....	112
• 人間の自我とオンライン3Dゲームの構造 .....	113
■ 人間関係・ビジネスと $\psi_8$ .....	114
69. 木星の「法」と土星の「法」 .....	117
■ 意識進化側の「法」 .....	117
■ 時空側の「法」 .....	118
■ 内にあるか? 外にあるか? .....	119

70. 人間の元止揚最終まとめ.....	121
■ 元止揚についてのおさらい .....	121
■ 位置と元止揚.....	122
■ モノとの関係と元止揚 .....	123
■ 惑星と元止揚.....	124
■ 元止揚の次にあるもの .....	126
■ 色々と膨大なヌーソロジー .....	128
Youtube 動画リンク集 (QR コード) .....	131

# 51. 「二重反転」をやってみる

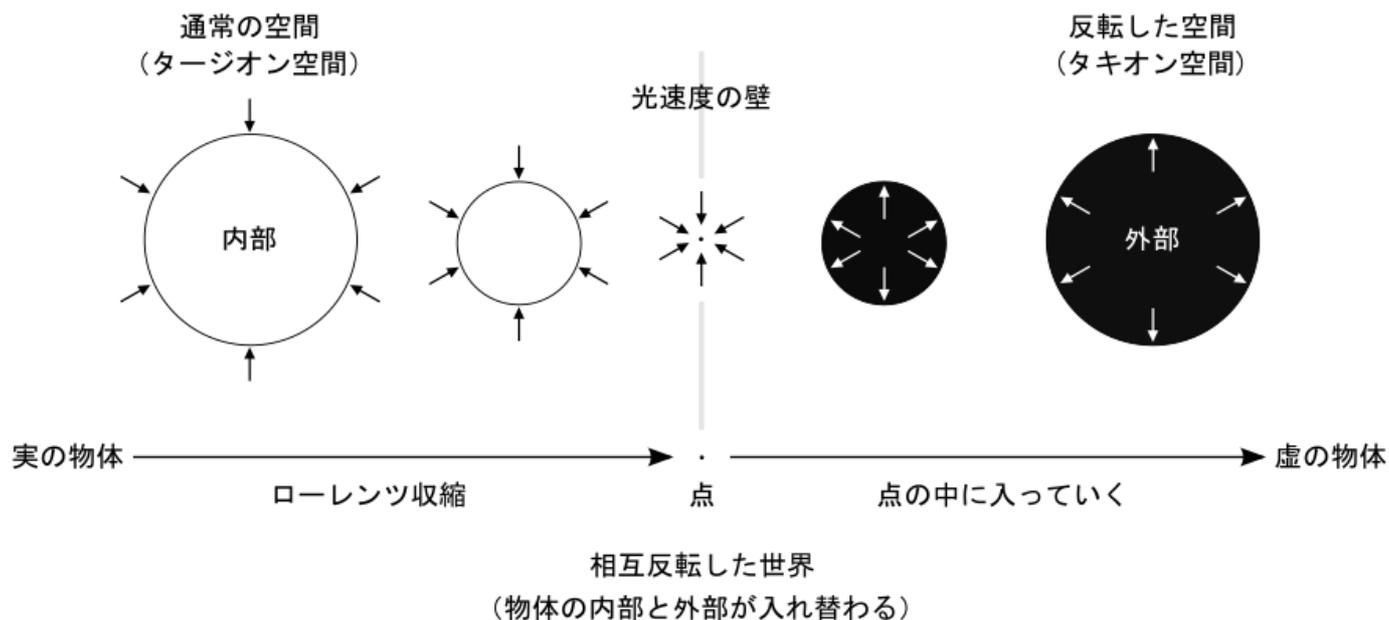
引き続き、『次元観察子ψ5』を理解するための話をしていこう。

今回のタイトルは「『二重反転』をやってみる」である。

・・・ということ・・・

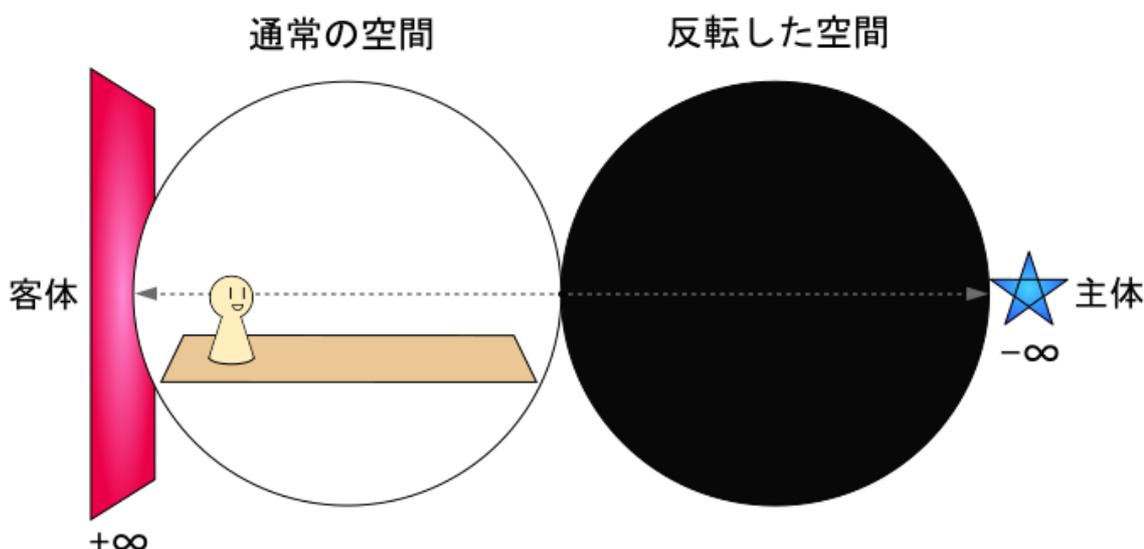
「反転」のイメージを工夫して『次元観察子ψ5』をイメージすることをやってみよう。

以前、『次元観察子ψ3』を理解する所で「光速度による反転」の話が出てきた。

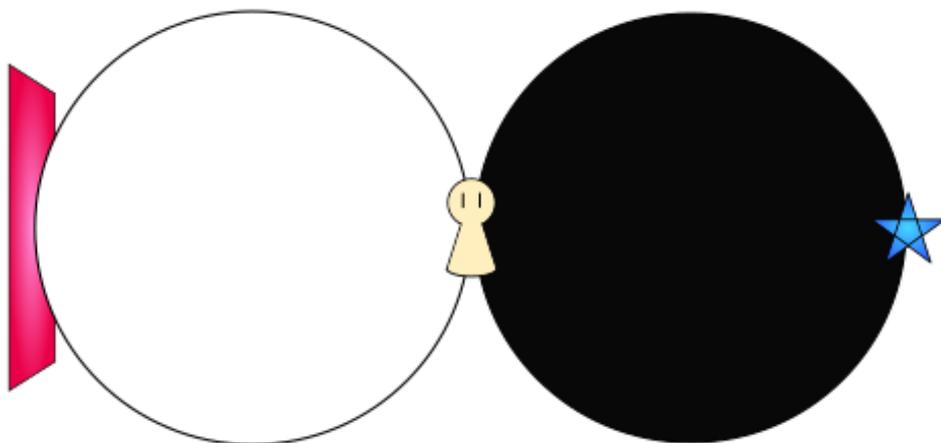
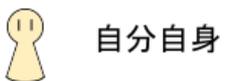
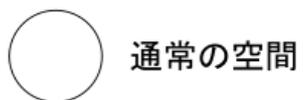


今回はこれを応用して「二重反転」みたいなことをやってみよう。

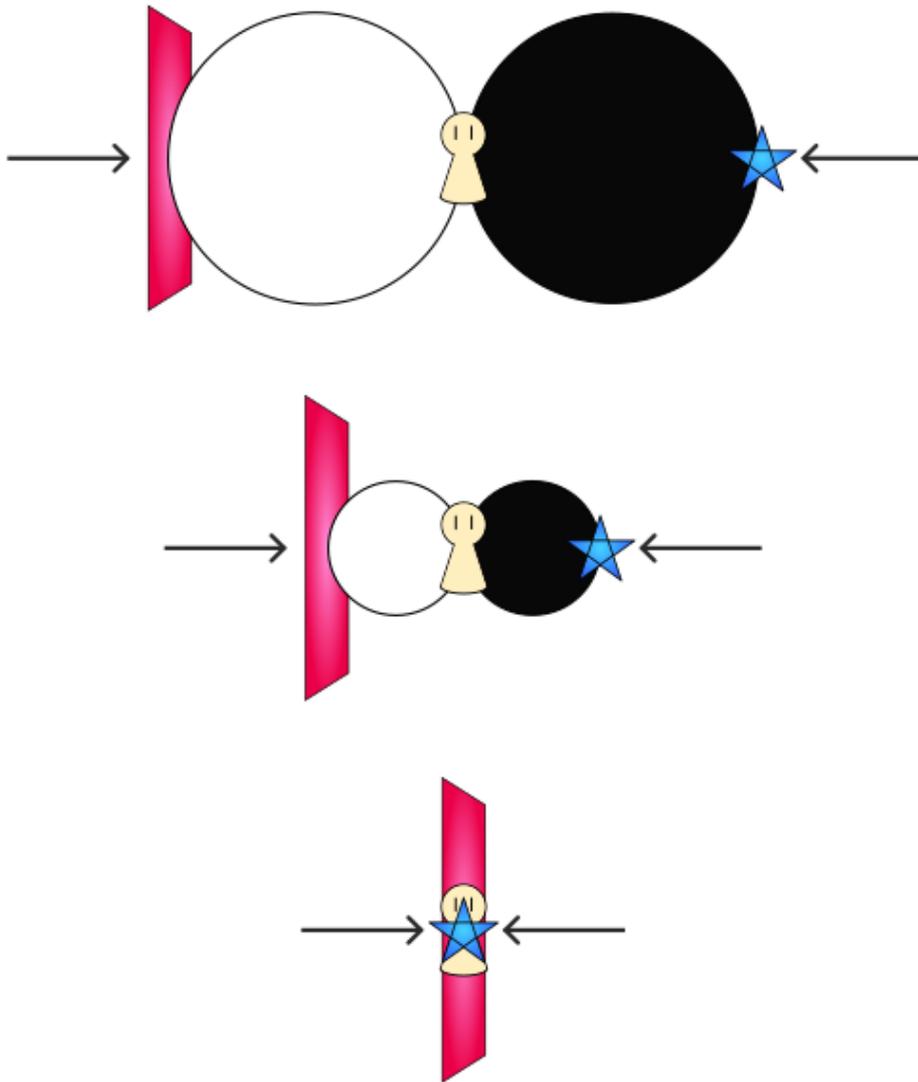
まず、以下のような構図が基本にあることを踏まえて・・・



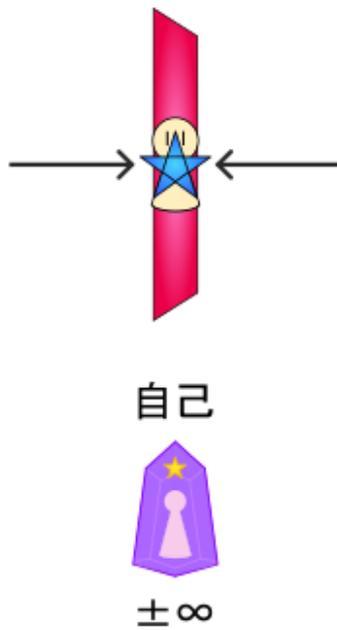
「通常の空間」と「反転した空間」と「主体」と「客体」と「自分自身」を以下のように配置してイメージしてみる。



そして、それらがミクロの大きさに畳み込まれていくイメージをしていこう。



それが一致した位置に「自己」があるわけである。



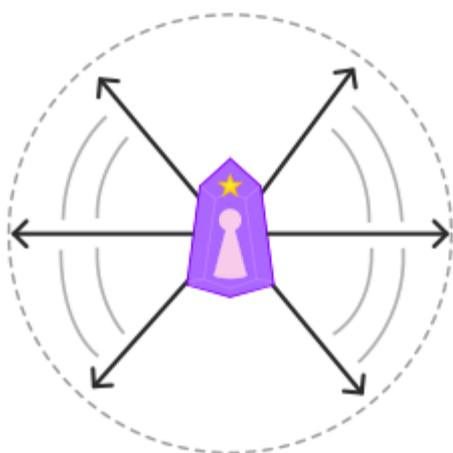
そして、このことは「通常の空間 ( $\psi_4$ )」と「反転した空間 ( $\psi_3$ )」の『等化』を意味していて、『次元観察子  $\psi_5$ 』のある位置にもなっている。

さらに、空間が光速によって裏返るように・・・

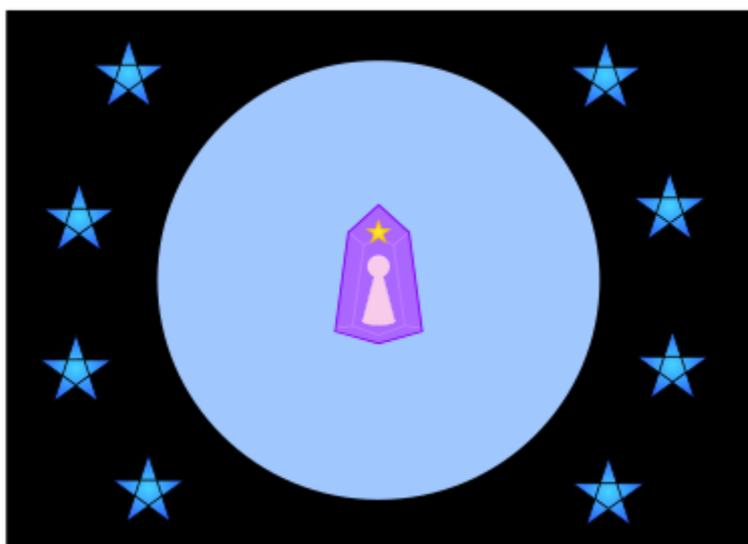
「通常の空間」と「反転した空間」の双方がさらに同時に裏返って、つきぬけてくとどうなるだろうか？



そうするとそこに「線」があるはずなので・・・それをあちこちの方向へ行くように回転させてみる。



すると・・・「主体」が周りに無数ある世界が定着するのではないだろうか？

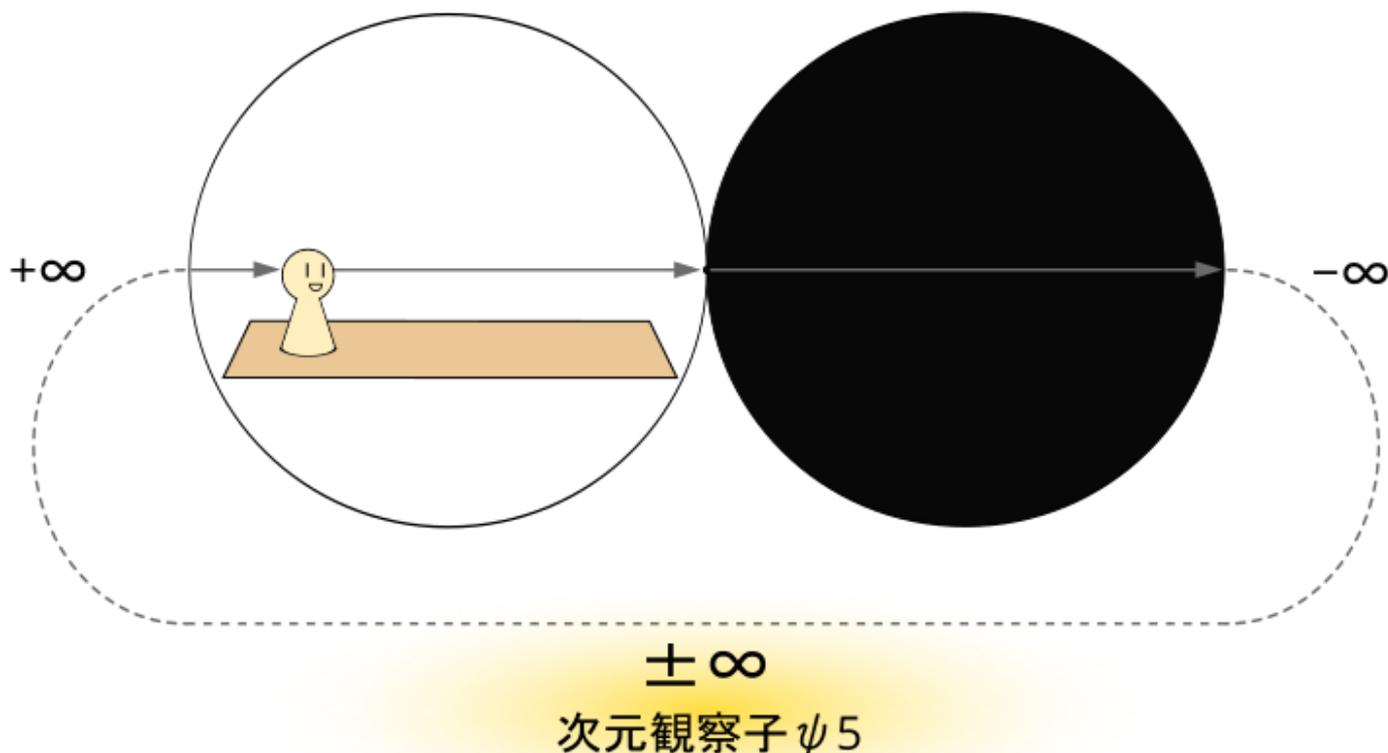


上記のようなイメージによってピンと来れば、『次元観察子  $\psi_5$ 』やニューソロジーの理解がさらに深まると思う。

## 52. 「不動の自分」を掴む感覚

引き続き、『次元観察子 $\psi 5$ 』についてである。

$\psi 5$  は以下のように、「前側の無限遠点」と「後ろ側の無限遠点」が「自分の身体」の所に繋がる位置にあるから、その発見が $\psi 5$  の発見のゴールになると以前に説明した。



これが分かると、「見ている光景」が自身の精神のように感じ取れる上に、自身が動き回った時に見える世界がすべて自分を中心に動いているように思えてくる。

『次元観察子 $\psi 5$ 』はそうした「不動の自分」が分かる位置でもあるため、それについて説明していこう。

### ■ 「自分が動いているのではなく、世界が動いている」動画

『次元観察子 $\psi 5$ 』を端的に理解するための面白い動画がある。

以下の動画を観てもらいたい。

[動画 : Willow - SweaterWillow - SweaterWillow - Sweater]

この動画は中央で男が歌っていて、景色が動いているようだが・・・

男が歩いているように見えて、実際は巧妙に作られた装置の上を歩いているだけで、その場から進んでい

ない。景色の方が動いている。

実に面白いアイデアから作られた動画である。

そして、この動画はヌーソロジーとも関係してくる。

『次元観察子ψ5』は「いつでもここ、どこでもここ」の感覚を持つ「不動の自分」になる位置にあるため、「自分が動いているのではなく、景色の方が動いている」という事象は『次元観察子ψ5』の位置を表すものでもある。

だから、「自分が動いているのではなく、世界が動いている」みたいな感覚は、『次元観察子ψ5』が分かった時の感覚と同様である。

上記の動画はそれを表現した面白い動画と思うので、ψ5をイメージするのにも使ってみよう。

## ■ 眉間鉛筆ワーク

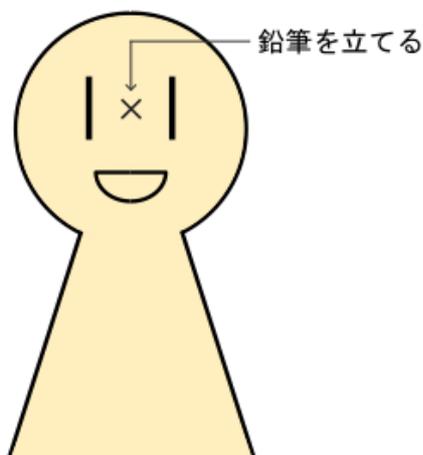
それから、ヌーソロジーで当初からあった「眉間鉛筆」と呼ばれるワークがある。

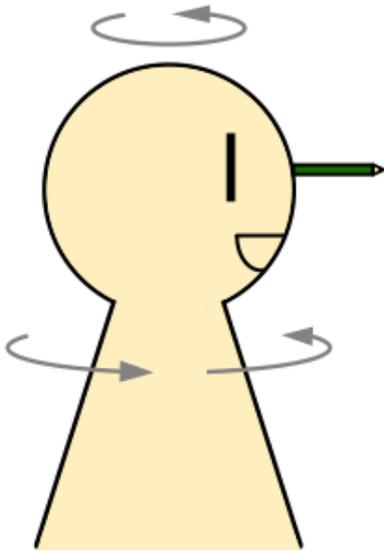
これについては『時間と別れるための50の方法』にも書かれている。

[リンク：時間と別れるための50の方法（35） - cave syndrome]

「眉間鉛筆」のやり方は簡単で、自分の額に鉛筆かボールペンのようなものをつけて周囲を見渡してみたり、動いてみたりすることである。

細長いものであれば箸でも良いしなんでも良い。





そうすると・・・額に付けた鉛筆はまったく動いていないが、鉛筆以外の世界が自分を中心に動いているように見えるのが分かるだろうか？

先の『時間と別れるための50の方法』では以下のように説明されている。

視野空間には鉛筆と室内の風景が映し出されます。鉛筆の背景となっている室内風景は次々とその見えを変化させていきますが、鉛筆の方は眉間に固定されているので、周囲の風景の動きに対して常に不動を保つこととなります。鉛筆が動いていないのであれば、眉間も動いてはおらず、眉間が動いていないのであれば、当然、身体も動いてはいない。つまり、「動いているのは世界の方であってわたしではない」という相対的な不動感覚が、この一本の鉛筆の見えによって認識に強調されてくるわけです。結果的に言えば、このときの鉛筆が次元観察子 $\psi_5$ に相当してくることになります。

上記にあるように、「眉間鉛筆ワーク」は『次元観察子 $\psi_5$ 』の理解に適したワークとされているので、その辺りが気になるならば積極的にやってみて、そこからイメージが掴めるようになると良いと思う。

## 53. 3次元球面について

引き続き、『次元観察子ψ5』に絡んだ話である。

今回はニューソロジーの基礎として重要な概念の一つである  
「3次元球面」についての説明をしていこうと思う。

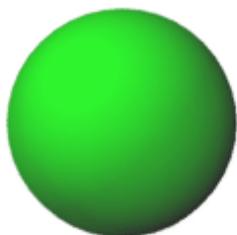
### ■ 「2次元球面」とは何か？

まず、早速「3次元球面とは何か？」を説明していきたい所だが・・・

それをいきなり説明しようとしても難しいので・・・

先に「2次元球面」の話をしてしようと思う。

2次元球面は単純なもので、基本的にごく普通の球をイメージしてもらえば良い。

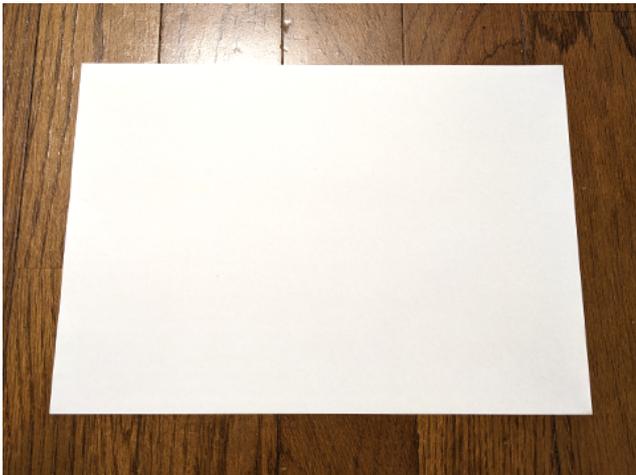


2次元球面は普通の球に近いものであるが・・・正確に言うと「球」ではなく、「球面」と書いてあるように、ごく普通の球の周りにある面のことを言う。

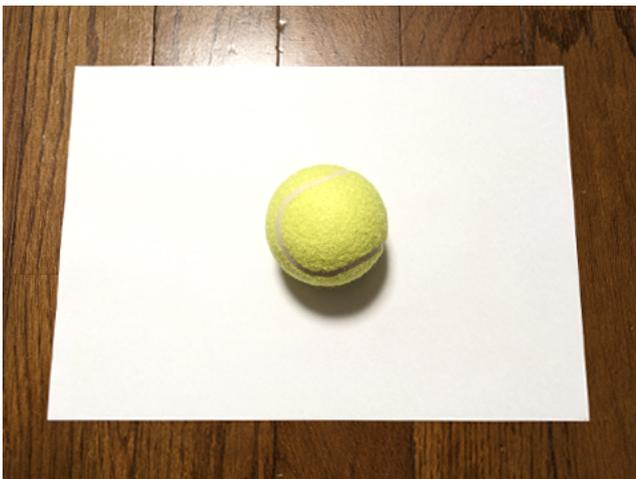
例えば、テニスボールをイメージすればそこに2次元球面があるし、地球儀をイメージすればそこにも2次元球面がある。



このように、2次元球面は2次元のものを球面にはりつけてできたものに該当する。  
これをもっと分かりやすく説明すると・・・例えば以下のように普通の「紙」があるでしょう。  
平たい紙は2次元の形をしている。



それをテニスボールに包んでみよう。



この時、テニスボールを包む形になった面が2次元球面になるわけである。  
そこまで難しい話ではないと思うので、分かっただろうか？

そして、2次元球面は3次元の球の形で存在しているので・・・

2次元球面は3次元空間に存在するものと言うことができるわけである。

つまり、 $n$ 次元球面は $(n+1)$ 次元空間に存在するという原理があることを、まずはよく覚えておこう。

### ■ 「3次元球面」とは何か？

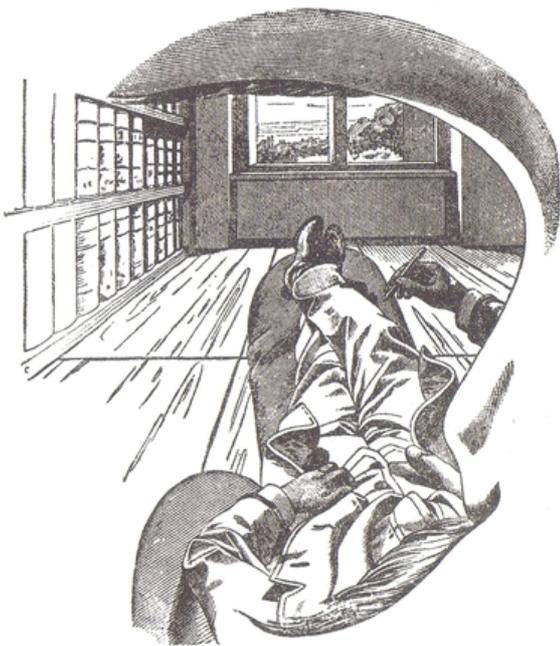
次に「3次元球面」についてである。

これを簡単に説明すると、2次元のものを丸めたのが2次元球面なので・・・

3次元のものを丸めたのが3次元球面ということになる。

それはどういうことか？を理解するのにまず必要なのは、『「知覚正面」を平面として空間を見る』の話である。

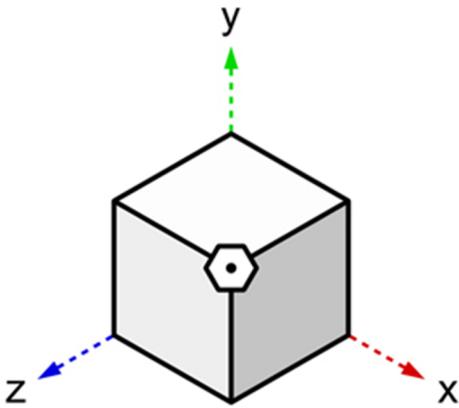
以下の「エルンスト・マッハが左目で観た視覚体験」のように、3次元空間を平面として捉えことをやってみよう。



そして、実体は3次元空間であるそれをもし球状にすることができれば・・・

「3次元のものを丸めた3次元球面」ができるわけである。

また、以下の「4次元を発見するための図」も同様である。



これも立方体を平面に落とし込むことを表現した図なので、それを球状にすれば3次元球面ができるはずである。

それから、2次元球面の所で説明した「 $n$ 次元球面は $(n+1)$ 次元空間に存在する」という原理を踏まえると・・・

3次元球面は4次元空間に存在するものということになる。

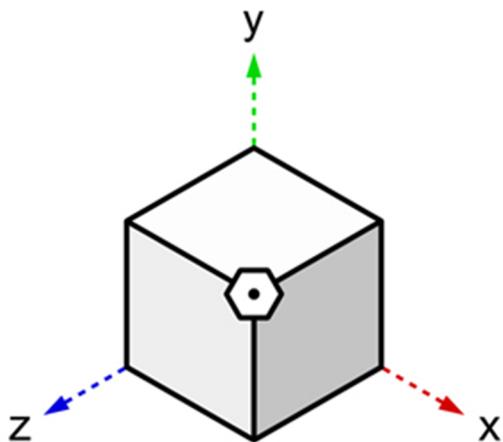
したがって、3次元球面を理解することは、4次元空間を理解することと同義である。

以上の説明で3次元球面についてが分かっただろうか？

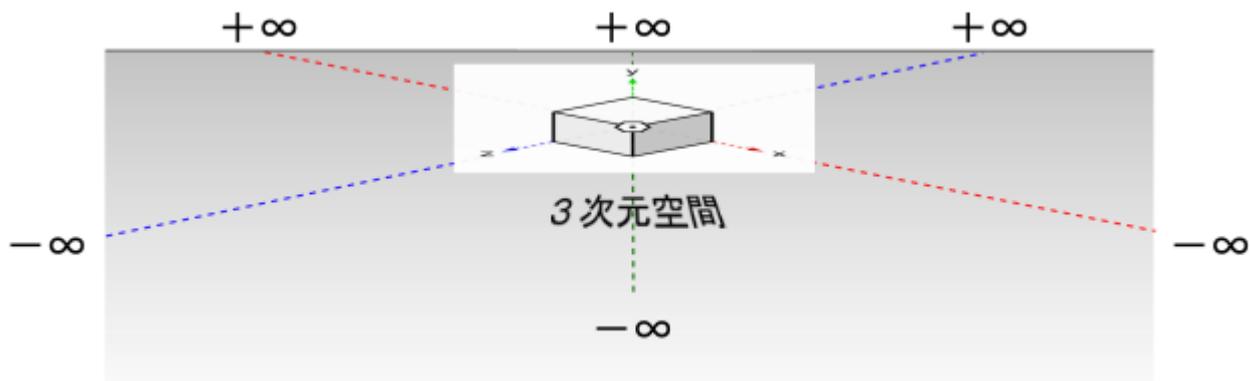
・・・いや、正確には分からないかもしれないが・・・理屈としてはそんな感じである。

### ■ 3次元球面をさらにつきつめる

3次元球面をもっと分かりやすくするために、以下の「4次元を発見するための図」をベースに考えていこう。

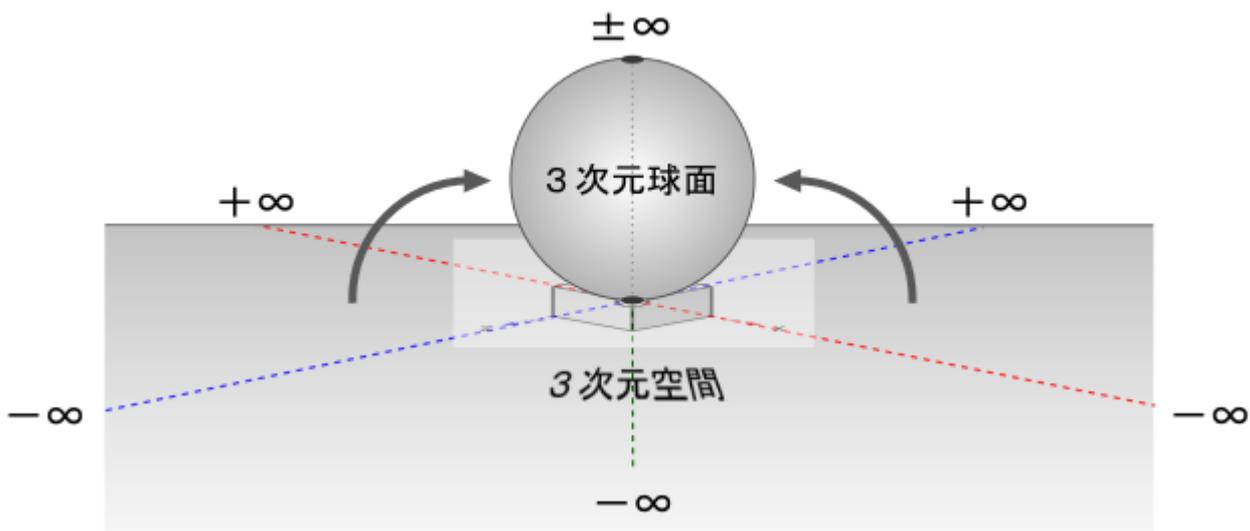


これを以下のようにぺたっと平面に張り付けてみよう。



上記で張り付いている所は図だと平面のように見えるが、 $x \cdot y \cdot z$ の軸を持った3次元空間である・・・  
ということ为前提として認識しよう。

そして・・・その空間を丸めてみよう。



すると、一番上の部分は、前側の無限遠点 ( $-\infty$ ) と後ろ側の無限遠点 ( $+\infty$ ) が繋がった  $\pm\infty$  の位置になる。

$\pm\infty$  の位置には『次元観察子 $\psi 5$ 』があり、これは『等化』を表すカタチでもある。

したがって、3次元球面が分かる位置が『次元観察子 $\psi 5$ 』の位置であるため、3次元球面は $\psi 5$ を理解するためのカギとなるわけである。

さて、ここで半田広宣さんの公式ブログの内容を参照してみよう。

以下の『4次元を認識するときの心得』という記事にも3次元球面についてが書かれている。

[リンク : 4次元を認識するときの心得 - cave syndrome]

自分を3次元から出す、つまり、3次元として見えている世界を視野空間の中に見るなら、それを見ている主体自身は3次元から出ることができているということだ。このとき3次元空間は3次元球面と化する。この3次元球面が見えたとき、私は絶対不動の私となる。不動明王のようなものである。

ここに出てきた「不動」というキーワードは、前回『52. 「不動の自分」を掴む感覚』の項で出てきた不動の意味と同義であり、『次元観察子 $\psi$ 5』とそれが関係しているわけである。

「3次元球面」が分かるとここに書いてあるテキストの意味も分かるはずなので・・・  
頑張って理解してみよう。

## 54. $\psi 5$ の認識方法まとめ

これまで『次元観察子 $\psi 5$ 』の認識方法について色々と説明してきたので・・・  
ここで、そのやり方のおさらいをしよう。

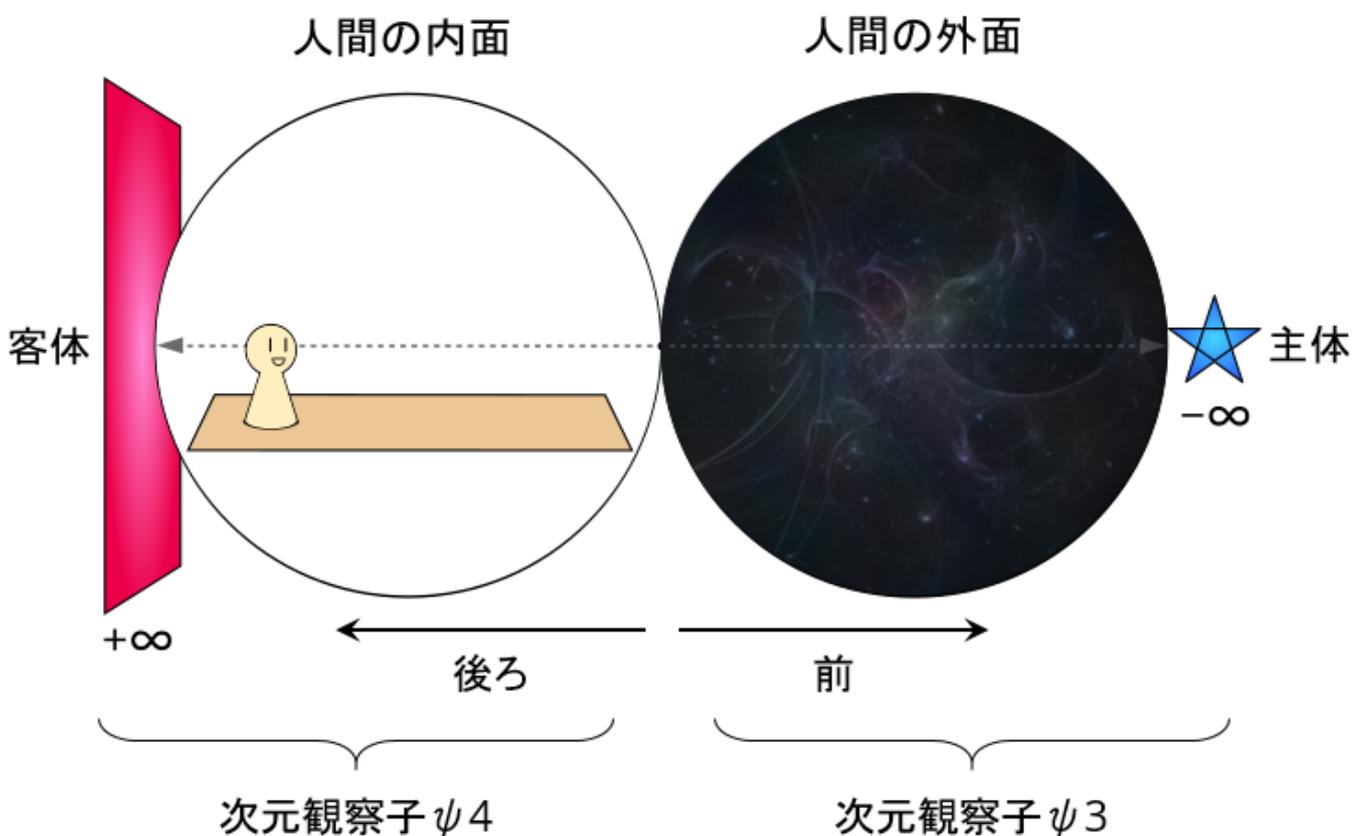
### ■ これまでのおさらい

#### ・ ゴール

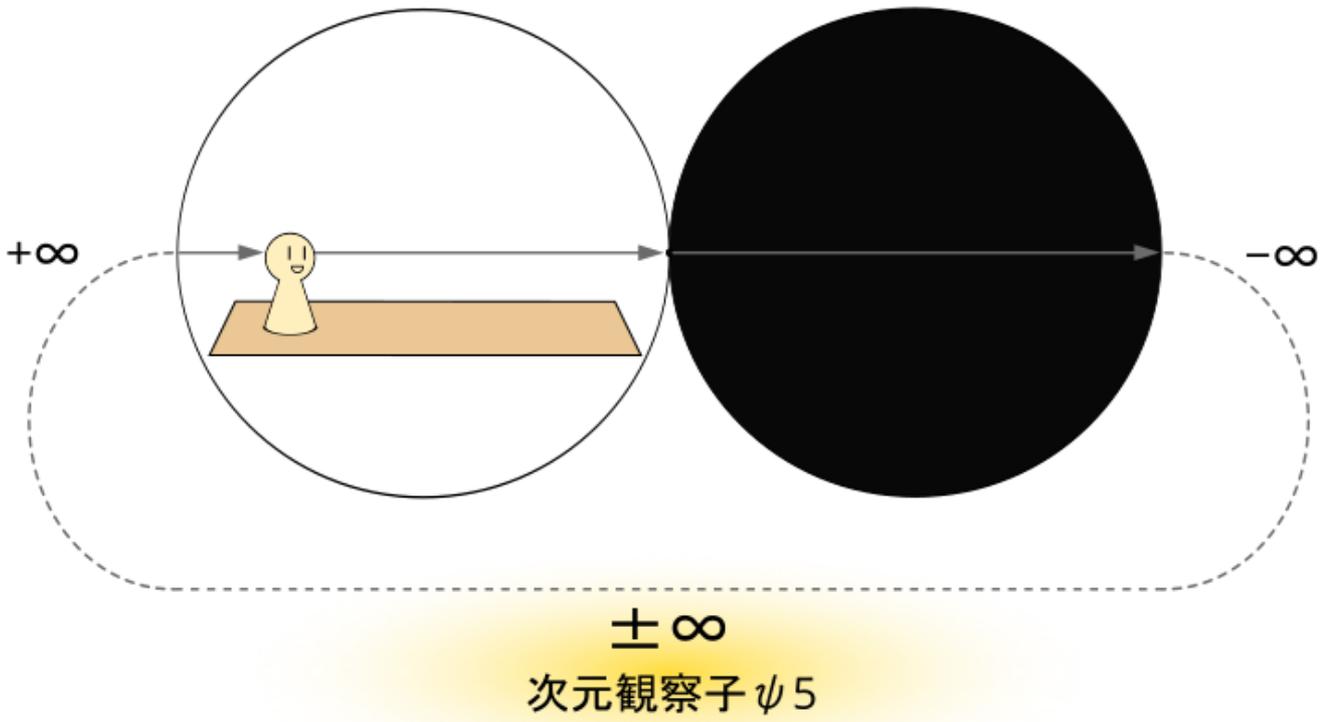
まずは、 $\psi 5$  を発見することのゴールについてである。

前提として、以下のように『人間の外面』と『人間の内面』があり…

前側の無限遠点 $[-\infty]$ と、後ろ側の無限遠点 $[\infty]$ がある。



そして、その前と後ろが繋がった場所に『次元観察子 $\psi 5$ 』がある。



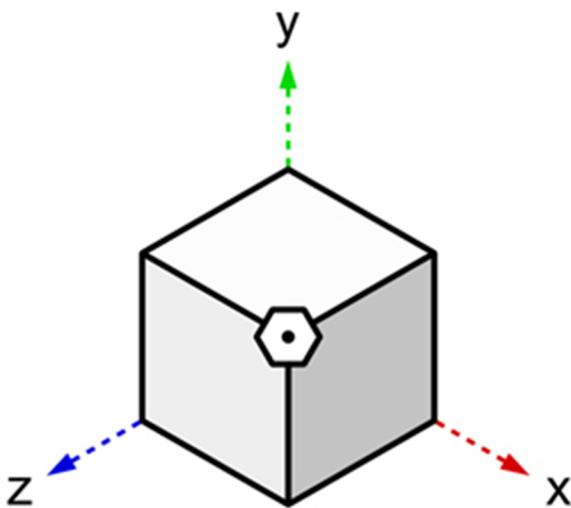
これが分かることにψ5のゴールがあるので、まずはそれを基本として忘れないようにしておこう。

- 回転

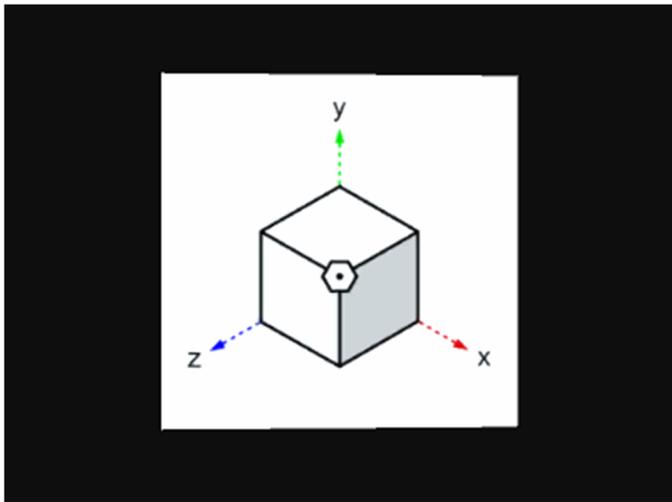
そして、そのための理解の秘訣の一つが「回転」である。

これを理解するために、まずは『垂子』を理解する必要がある。

『垂子』は『次元観察子ψ3』が分かった時に分かるもので、端的に言うとも以下の「4次元目の軸を発見するための図」の垂直方向にある線と思ってもらえれば良い。



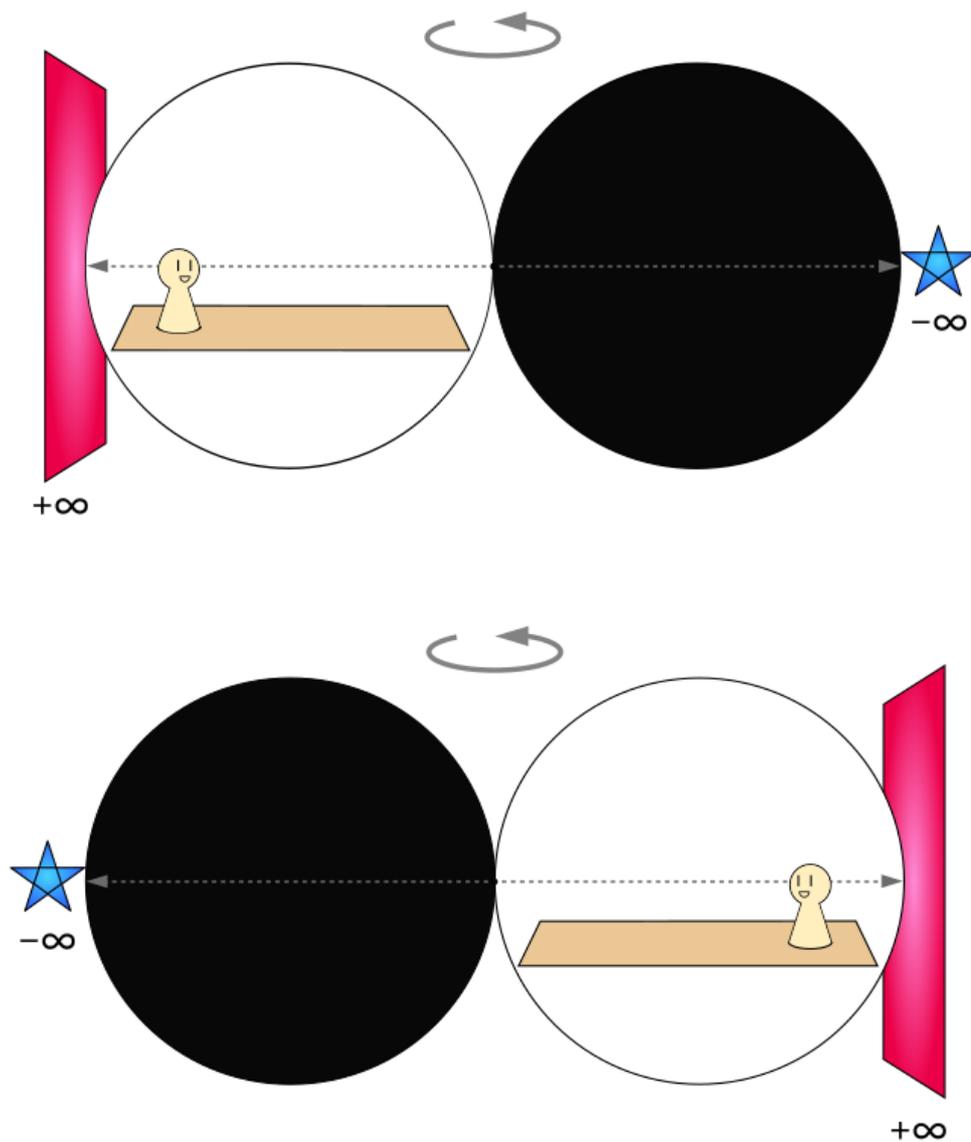
そして、4次元の感覚が掴めている状態のまま・・・これを回転させる。



[アニメーション：板状の図が y 軸を中心に回転している]

簡単に説明してみたが・・・どういう意味かをよく理解した上でこれをやってみよう。

それから、以下のように、回転のイメージを強引に作ってみたりするのも良いかもしれない。



さらに、この「回転」は KitCat 実験を意味するものでもあるため、それについても復習しよう。



〔アニメーション：自身が見ている缶の公転だが、缶が自転しているようにも見える〕

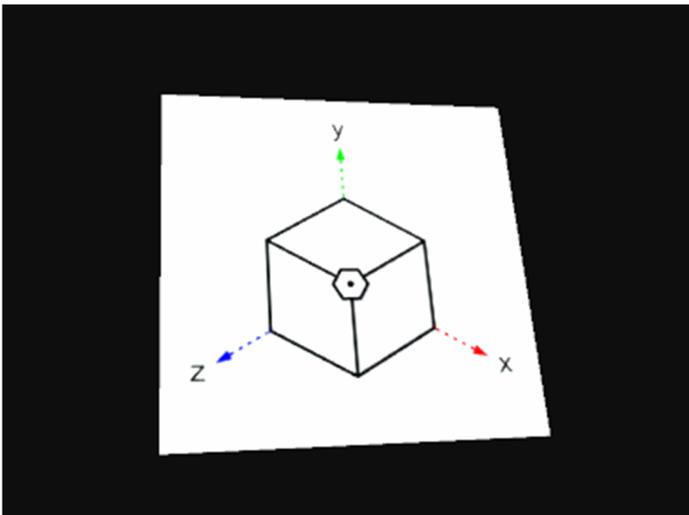
〔Youtube 動画：視点変換 3D ルームでの KitCat 缶回転 (KitCat 実験) 〕

- 無数化

次に重要な概念は「無数化」である。

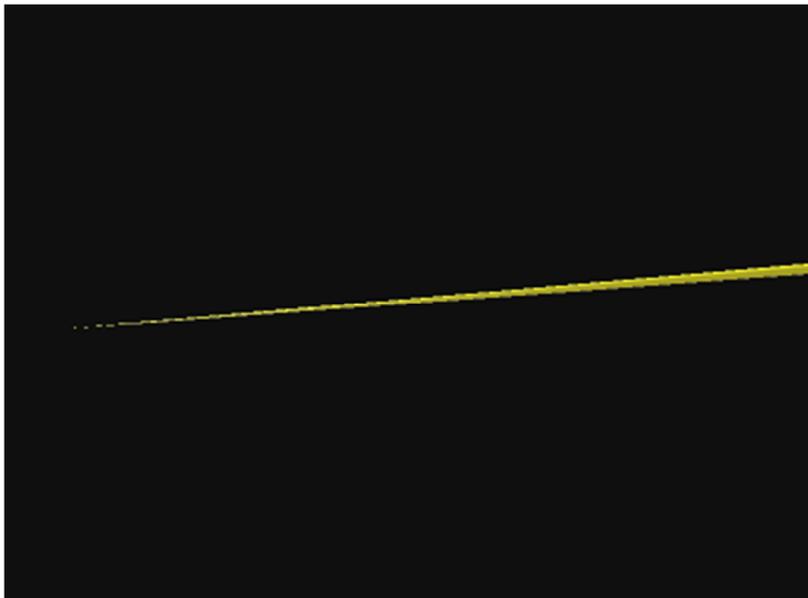
無数化は「数えきれないほどたくさんになる」みたいな意味だが・・・

これを  $\psi_5$  に適応した場合を分かりやすく説明すると、「4次元目を発見するための図」を無数の方向にするようなイメージになる。

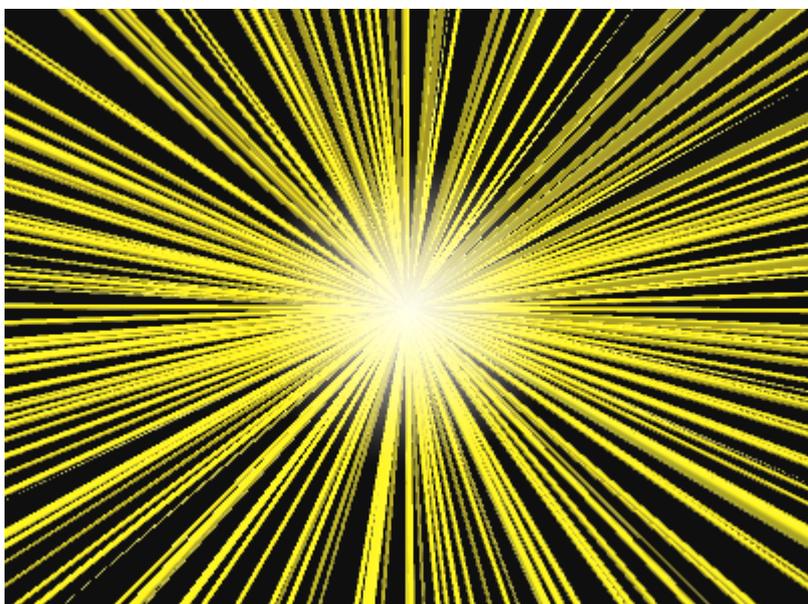


〔アニメーション：板状の図がランダムに色んな方へ向く〕

『垂子』を「光の線」のようにした場合は、以下のようなになる。



[アニメーション：黄色い線がランダムに色んな方へ向く]



「無数化」が成功すると、無数の主体に囲まれた所に $\psi_5$ があるイメージになる。



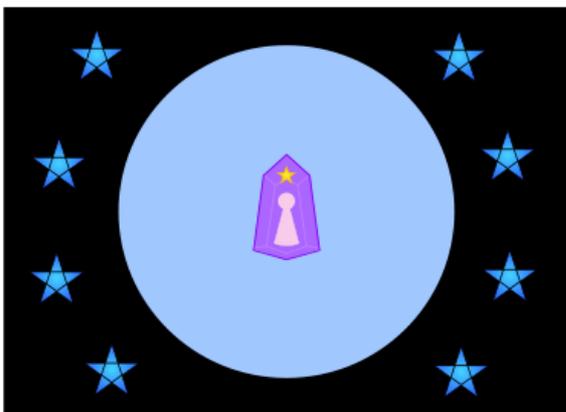
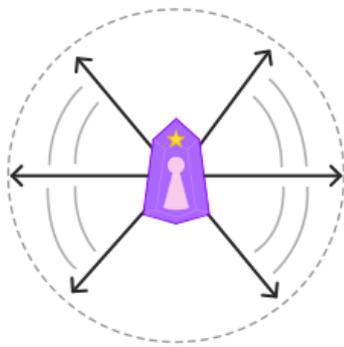
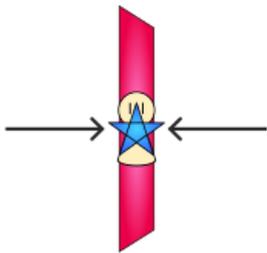
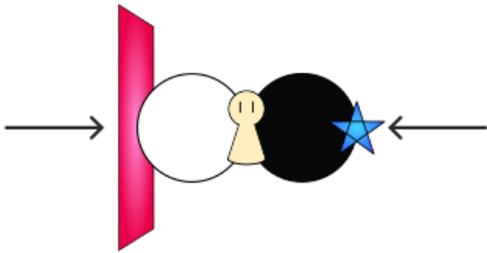
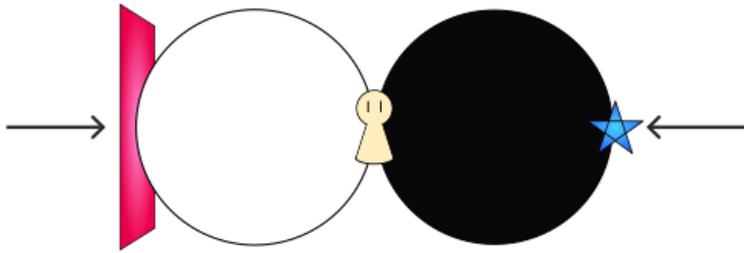
次元観察子 $\psi 5$   
 $\pm \infty$

以上のイメージが分かれば、『次元観察子 $\psi 5$ 』もなんとなく分かってくるだろうと思う。

- 裏返し（強引に反転させる）

次に『「二重反転」をやってみる』の項で説明した反転方法である。

こうして強引に反転させることを「裏返し」と呼び、二重の裏返しをやってみよう。

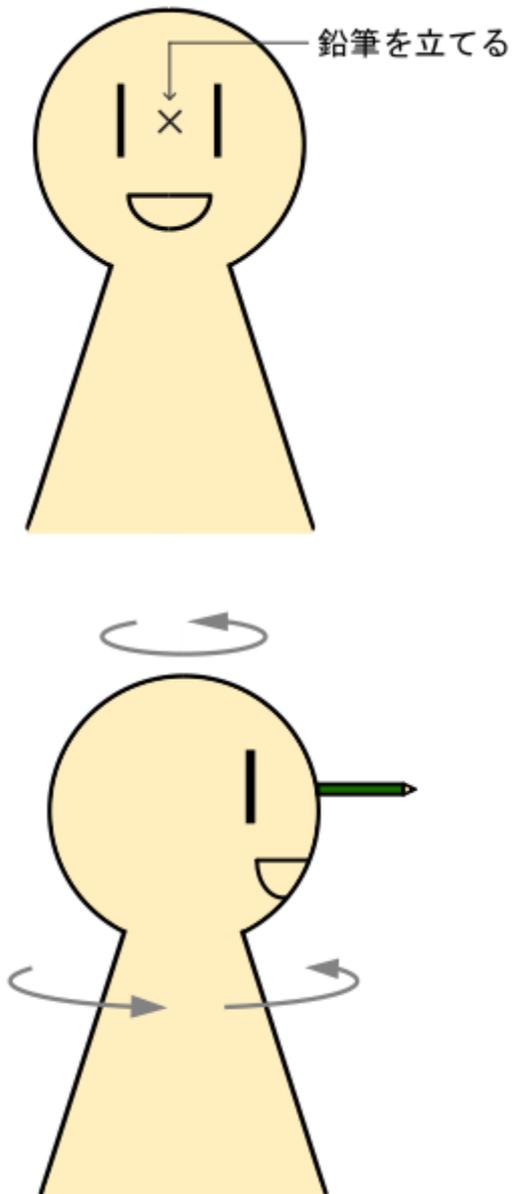


実は、筆者（Raimui）自身がこれを思いついた時、一番強烈な体感みたいなものがあった。  
他の人はどうなのだろうか？  
分かると強烈なのでやってみて欲しいものである。

- 不動の自分

『次元観察子 $\psi$ 5』は「不動の自分」が分かる位置であるため、それが分かるようなワークをしていくことも $\psi$ 5の認識方法になる。

以下のような「眉間鉛筆」のワークをやったりしてその感覚を掴んでいこう。



これは「 $\psi$ 5の認識方法」というより「 $\psi$ 5のゴール」の話に近いが・・・  
こうしたゴールがイメージできるようになることが認識方法にも繋がっている。

- **3次元球面について理解する**

最後に「3次元球面」の理解である。

これについては、前回の『53. 3次元球面について』項で説明した。

これをイメージすることは割と難易度が高いかもしれないが・・・

ヌーソロジーを本格的に理解するための概念としておさえておこう。

- **「構造」と「カタチ」を理解することの意義**

・・・以上。

これまで説明してきた「次元観察子 $\psi 5$ を構造的に理解するための話」に関しては上記の通りだったと思う。

ヌーソロジーで肝となるのはとにかく「構造を理解すること」であり、その構造は言い換えると「カタチ」とも言える。

それらを理解するための作業は地味かもしれないし、こうして説明する作業も地味かもしれないが・・・これが分かると強い「確信」と「体感」が生まれ、強く明確でスピリチュアルな（精神的な）力になる。また、その道を進んでいくとただの感覚的なスピリチュアルの力だけでなく、知性的な力も同時に身につき、地に足の着いた思考もできる。

そして、その構造が理解できたら、今度はそこから派生してもっと色々なことが分かるかもしれない。社会の話、エンタメの話、芸術の話、文明の話、宗教の話、心理の話・・・それらはつきつめるとすべて「自己」の話にも繋がるし、「他者」の話にも繋がる。

「 $\psi 5$ の構造」の話をしっかりと踏まえると、「自己」について掘り下げていくこともやりやすくなるため、自己探求のためにヌーソロジーを学ぶ意義は大きい。

そのため、そうした話を深めるために、ここではあえて構造の話を徹底しておくのがこのシリーズのコンセプトである。

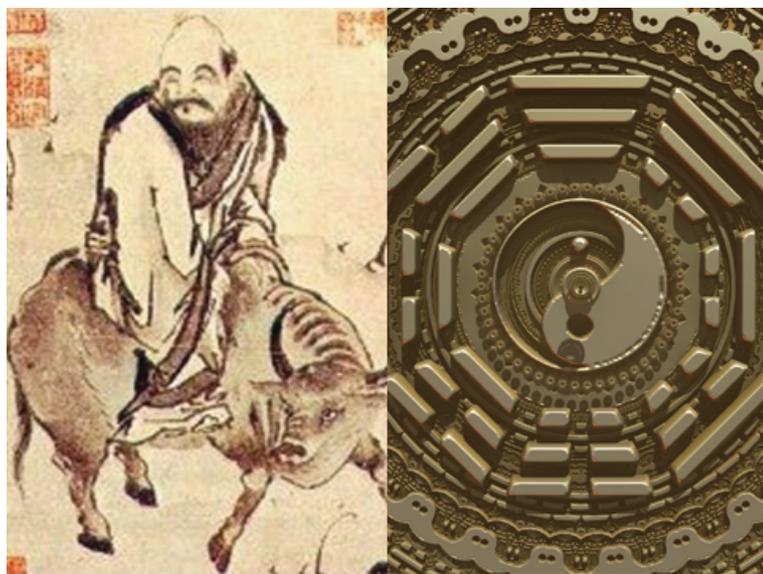
以上を踏まえて、『次元観察子 $\psi 5$ 』の話とそれに絡んだ話をもう少し続けていこう。

## 55. 胡蝶の夢と東洋思想

これまで、『次元観察子ψ5』の話を一通りしてきた。

構造の話ばかりな内容になっていたが・・・

今回はそれを踏まえた東洋思想の話をする。



特に、莊子による有名な「胡蝶の夢」という説話では『次元観察子ψ5』の境地が表れているので、それについて説明しようと思う。

### ■ 莊子の胡蝶の夢

まず、莊子は紀元前 300 年～200 年頃の中国にいたとされる人物であり…

老子とならんで有名な中国の思想家である。

その中にある「胡蝶の夢」という説話が有名であり、それは以下のような原文が残っている。

昔者、莊周夢に胡蝶と為る。栩栩然として胡蝶なり。自ら楽しみて志に適えり。周なるを知らざるなり。俄然として覚むれば、則ち遽遽然として周なり。周の夢に胡蝶と為れるか、胡蝶の夢に周と為れるか。周と胡蝶とは必ず分かるるなり。此れを之れ物化と謂う。

これを訳すと、以下のような意味になる。

(「莊子—中国の思想 (徳間文庫)」より引用)

いつだったか、わたし莊周は、夢で胡蝶となった。ひらひらと舞う胡蝶だった。  
心ゆくまで空に遊んで、もはや莊周であることなど忘れはてていた。  
ところがふと目覚めてみれば、まぎれもなく人間莊周である。  
はて、莊周が夢で胡蝶となったのであろうか。それとも、胡蝶が夢で莊周となったのだろうか。  
莊周と胡蝶はたしかに別の存在とされる。  
だが、莊周は胡蝶となって空を舞う。これを「物化」という。

これが有名な説話となっているわけだが、はたしてどういう意味なのだろうか？

その意味については古典的にずっと研究されてきたものなため、調べれば色んなことを知ることができるだろう。

[リンク : 「胡蝶の夢」ってどういう意味？語源や使い方、関連語を解説 | Domani]

ここではニューロジ的な意味でそれを捉えることにすると・・・

その重要箇所は以下のように解釈することができる。

胡蝶の見たる夢

⇒『人間の外面 (次元観察子 $\psi$ 3) 』

莊周のいる空間

⇒『人間の内面 (次元観察子 $\psi$ 4) 』

莊周と胡蝶は別の存在とされるが、

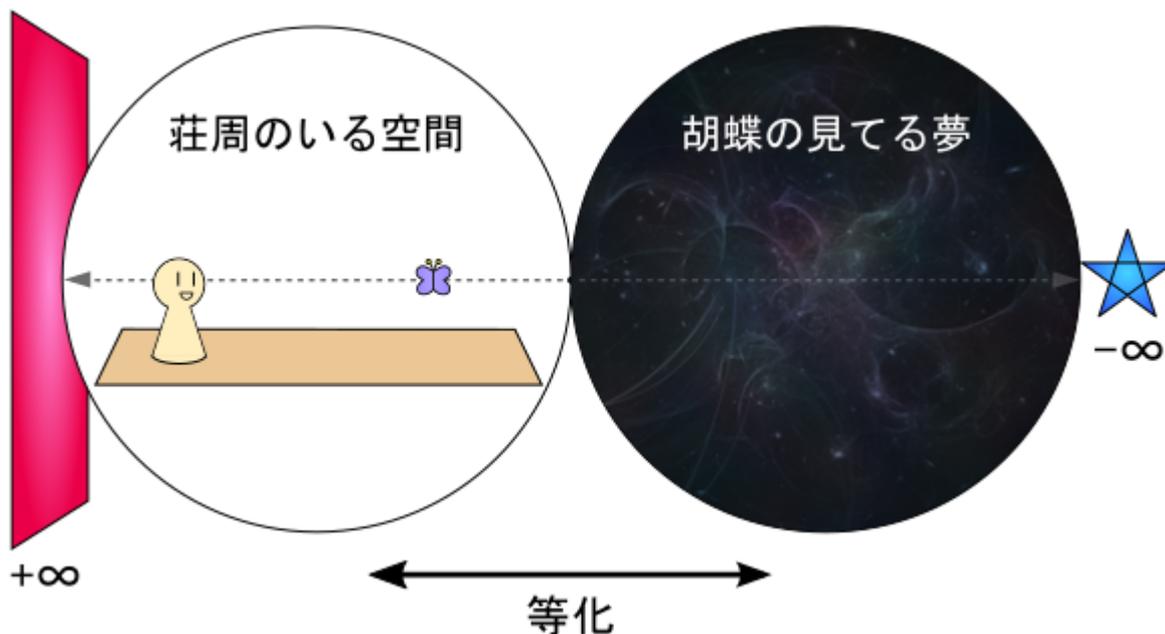
莊周は胡蝶となって空を舞う

⇒『 $\psi$ 3 と  $\psi$ 4 の等化 (次元観察子5) 』

そう・・・上記のように「胡蝶の夢」は、『次元観察子5』のイメージを表した説話でもある。

ここで「胡蝶＝モノ」として、図で整理すると以下のようなになる。

## 🦋 胡蝶＝モノ



上記の構造と「胡蝶の夢」の説話を結び付けてイメージすると、ニューソロジーの理解が深まるかもしれない。

実は、東洋のこの辺りが目指す境地とニューソロジーが目指す境地はどこか近いような所がある。やはり、古代の思想家の中にはすでにニューソロジーに近い発想を持っていた者がいたのだろうか？

そのため、東洋の思想を学びつつ、ニューソロジーの構造の話をイメージで捉えると、いくらか楽しくニューソロジーを理解できるようになるので良いと思う。

### ■ 「老荘思想」について

東洋思想の中でも老子の思想と荘子の思想は非常に近く、合わせて扱われることが多いので「老荘思想」と括られて呼ばれる。



「胡蝶の夢」は莊子の思想の代表作みたいなものであり、莊子の思想を象徴しているものでありながら、老子の思想もそこに通じている。

端的に言うと、「胡蝶の夢」で表現されているのは、自身と蝶とを「分けない」ような世界観であり・・・そしてそれは善悪を分けない、強弱を分けない、正誤を分けない・・・みたいな精神にも繋がっている。

そもそも、老荘思想は一貫して、物事を「分けない」で捉えることを重要視する思想である。

もし、自分自身がダメ人間だと思って落ち込んだ場合も、それは他者との比較をしながら社会で決められた「良い/悪い」の基準からそう認識していることが多く、物事を「良い/悪い」に分ける価値観をとっぱらって考えると、自分自身の本当のあるべき姿が見えてくる。

あるいは、とある事件を起こした人がいて、みんなが「これは悪い」と言っていたとしても、一旦「良い/悪い」を分けて認識することを保留して、対象を包み込むように捉えてみる。そうすると、それに対してやるべきことが見えてくるかもしれない。

社会問題においては「社会的な善」と「社会的な悪」を「分けない」みたいな話になってくるが・・・こうして「分けない」ことをつきつめると・・・さらには「胡蝶の夢」にあるように、蝶と自身をも「分けない」境地に繋がってくるのである。

老荘思想のそうした世界観は、以下の太極図にも表れている。



これは物事を「陽/陰」に単純に分けるのではなく、陽の中に陰があり、陰の中に陽があり、それらは循環して変化していく・・・みたいな世界観を表している。

そうした世界観においては「陽：良い」「陰：悪い」のように単純に「分ける」捉え方はしない。

そして、こうした「分けない」の精神がニューソロジーと相性が良いのである。

ヌーソロジーにおける『等化』とは、「分けない」の精神のこと・・・  
・・・とは厳密には言えないのだが・・・  
こうした東洋思想の発想が『等化』のカギを握っているのは確かである。

ヌーソロジーは非世間的な思想であるため、一般的な思考で理解に至ることは難しいが・・・  
老荘思想の延長で捉えていくと理解しやすい所がある。

## ■ 老子と対となる人物

そんな老子や荘子と対になるような、中国の有名人物がいる。  
それは、孔子である。



孔子のすごさは言うまでもないぐらいすごい。

世界で「四聖」と呼ばれる人物に、ブッダ、ソクラテス、キリスト、孔子の4人がいるのだが・・・  
孔子はその世界的に偉大な4人にカウントされるほど有名な人物であり、儒教の創始者とされる。  
儒教は中国の三大宗教の一つであり、日本にも伝わって高い影響力を持つものである。

孔子の思想の内容と儒教の歴史は、量にすると膨大である。

その詳細を書いていったらとてつもなく長い話になってしまうが・・・

孔子の思想とその目的を簡潔に説明するなら・・・それは「仁（思いやりの心）を持った者が賢いリーダーになったら良い」みたいな思想である。

人間社会では、よく人格的にダメな心を持った政治家や総理大臣しかいないと言われたり、会社でも偉い人がダメなことをしてるのを見ると非常に嫌な気分になるだろう。

それから、仕事ができ優秀な人ほど、他者や弱者の気持ちが分かることがなく、力任せに雑なことをするから、世の中が悪くなるように思うこともあるだろう。

しかし、もしも優しくて頼れる強い人がリーダーになったり、偉い政治家になったり王様になったりしたら・・・。権威を持って賢くて強い人が、思いやりの心を持って弱い人を助けてくれたりしたらどんなに良いか・・・そんな当たり前なことを紀元前500年ぐらいの時代に言い続けたのが孔子である。

そして、その思想は中国でも当初から賛否両論があった。

庶民にとっては聞こえが良い思想だが、権力者にとっては支持する者もいれば支持しない者もいた。

そうして長い歴史を経て紆余屈折がありながらも・・・儒教は中国の三大宗教の一つになり、中国政治に

においても重要な主柱の一つになっている。

## ■ 二つの思想の流れ

さて、孔子についてここで端的に重要なことは・・・その思想は「他力救済」の道なことである。

「思いやりの心を持ったリーダー」を目指す思想は、実際にそのようになった人物が社会を変えていき、他者を救済することにも繋がっていくし、他者に救済されることにも繋がっていく。

その一方で、老子は「自力救済」の道である。

その思想は社会を変えるとかはそこまで考えないし、偉くなろうとはしない。しかし、世の中に対する認識を変えていくことで、自身を自力で救済することができれば良いみたいな思想である。

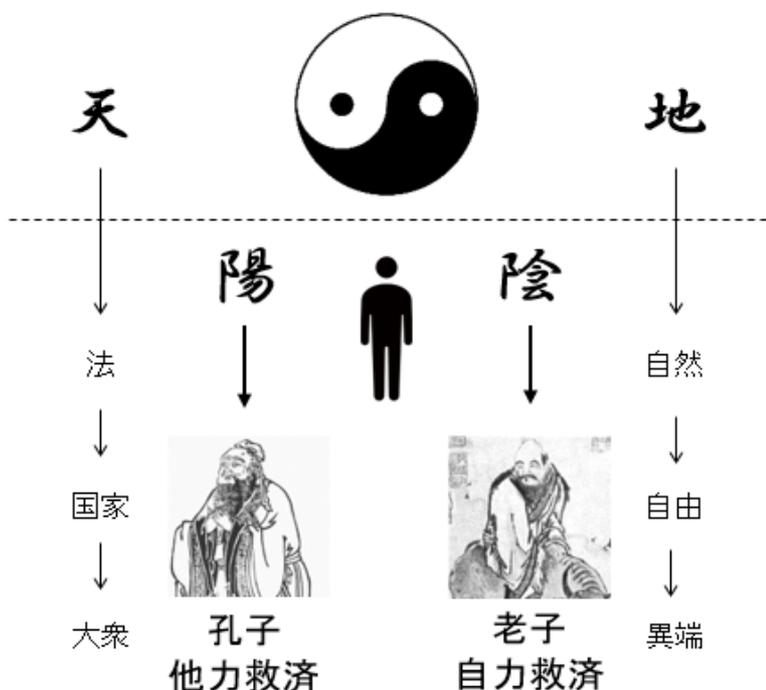
そして、ヌーソロジーは老子側の思想に該当する。

社会を変えるとか偉くなるみたいなことは考えないが、認識を変えて世の中を超越するようなことを考えるし、とにかく「自己」をつきつめていく思想なため、ヌーソロジーと老子の思想はとても親和性がある。

また、その逆が孔子側の思想に該当する。

社会についてを現実的に捉えて物事を考えていくものなため、それがヌーソロジーと違うのは言うまでもないだろう。

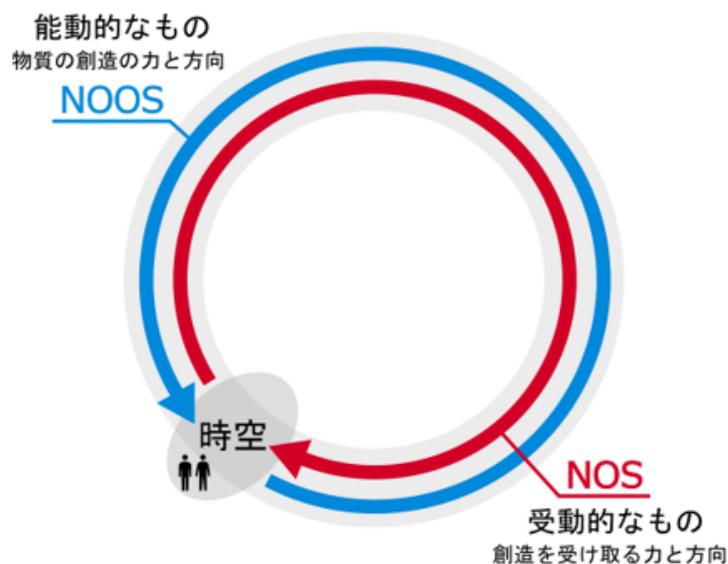
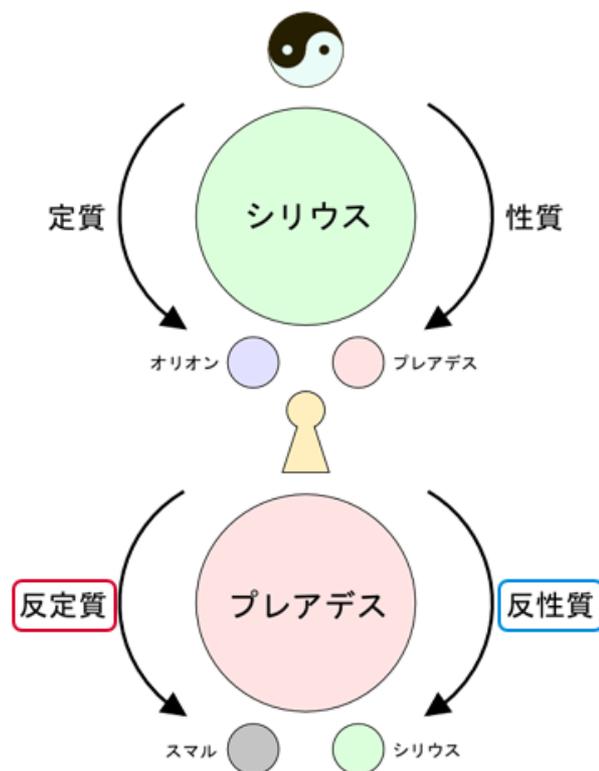
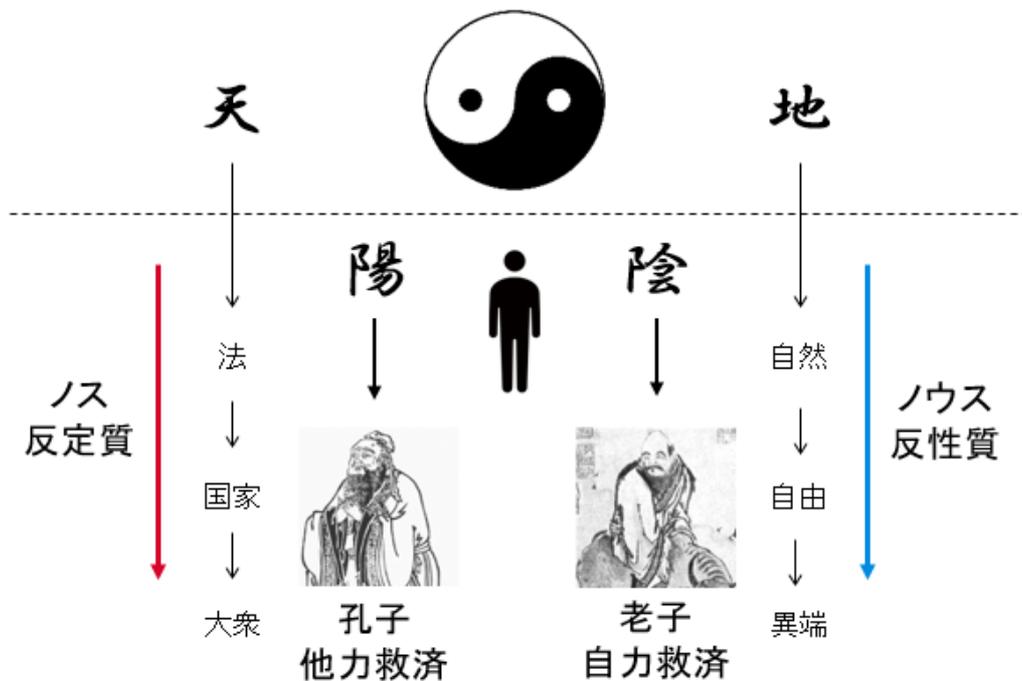
そうした二つの思想がある中で、孔子側の思想を「陽」と捉え、老子側の思想を「陰」と捉えると・・・以下のような「陽と陰」の二つの流れがあることが分かる。



それから、上記の二つの思想はヌーソロジーの概念だと…

老子の方向にあるものはヌーソロジーだと『ノウス (NOOS)』や『反性質』に該当し…

孔子の方向にあるものはヌーソロジーだと『ノス (NOS)』や『反定質』に該当する。



老子の思想は『ノウス (NOOS)』や『反性質』側に該当するので、基本的にはそちら側の感覚をつかむことがニューソロジーの目的であるし、『変換人型ゲシュタルト』を理解する道もそれと同様である。

一方で、孔子の思想は『ノス (NOS)』や『反定質』側に該当するわけだが・・・

それらは一概に「悪いもの」みたいなイメージは正しくなく、むしろ人間にとって必要なものであることを理解していった方が良い。

それから、これまで『次元観察子ψ5』の説明をしてきたので…

『反性質』の中心に『次元観察子ψ5』と「自己」があると思ってもらえれば良い。

また、逆に『反定質』の中心に『次元観察子ψ6』と「他者」があるので、それを念頭に置いておこう。

このように、東洋にある二つの思想を整理しながら学んでいくと、双方の理解が深まるようになると思う。

孔子の思想と老子の思想、それらとニューソロジーとの関係については、以下の『陰陽哲学基本概要』でも説明したので、詳しくはそちらを読んでもらいたい。

[リンク：■陰陽哲学基本概要(13) ～陽を建前とする儒教と、陰を建前とする老荘～]

## 56. 等化時の心理事情

これまで、『次元観察子ψ5』を説明するために**構造的**の話を中心にしてきたが・・・  
今回は**心理的**な話もしていこう。

まず、人間の意識には、以下のように**構造の領域**と、**肉体・心理の領域**があると捉えると分かりやすい。

構造の領域



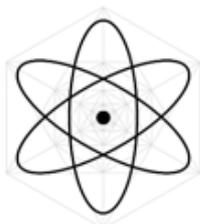
肉体・心理の領域



そして、その二つは**相互作用**が起きるような関係になっている。

構造の領域で何かを理解した場合は肉体・心理に作用し、一方で肉体・心理の領域で何か起きた場合は構造の領域にも何か作用する。

構造の領域



相互作用

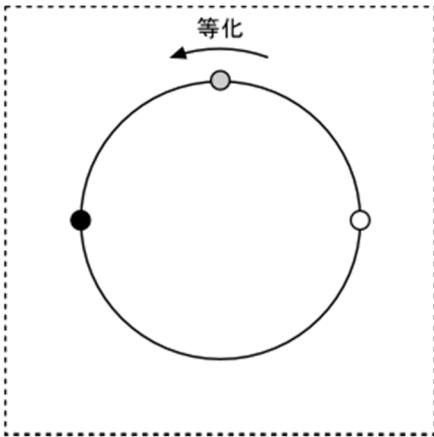
肉体・心理の領域



そして、ヌーソロジーの『次元観察子』は構造の領域にあるものであり、それを理解すると肉体や心理にも何かの作用が起きる可能性があるわけである。

また、逆に肉体や心理を整えることで、『次元観察子』のように難しい構造の理解へと作用することもある。

ヌーソロジーの『等化』を理解する際もこの原理は重要である。



『等化』は「背反するものを統合するような回転の作用、または、対象性を見出す作用」というように説明した。

「対称性を見出す」とは、「対称性の構造が見えるようになる」ということであり、構造の領域の話になるわけだが・・・

実際にそれができると心理的ものに影響が生じるのである。

また、逆に心理的なものをクリアにした方が、『等化』の理解がしやすいこともあるだろう。

このように、ヌーソロジーの構造や『等化』を理解するには、心理的なものも重要になってくるはずである。

### ■ $\psi 5$ における心理事情

何度も説明しているが、『次元観察子 $\psi 5$ 』は『次元観察子 $\psi 3$ 』と『次元観察子 $\psi 4$ 』の『等化』によって分かるものである。

それから、 $\psi 3$ は「知性」、 $\psi 4$ は「情動」が関係していることを以前に説明した。

そして、それぞれ「水星」と「金星」がその象徴にあるとした。



厳密につきつめると、 $\psi 3$  と知性、 $\psi 4$  と情動の関係は少し複雑で・・・それは背後で動く  $\Omega 3$  と  $\Omega 4$  が知性と情動を生み出すものになってると解釈できるものなのだが・・・

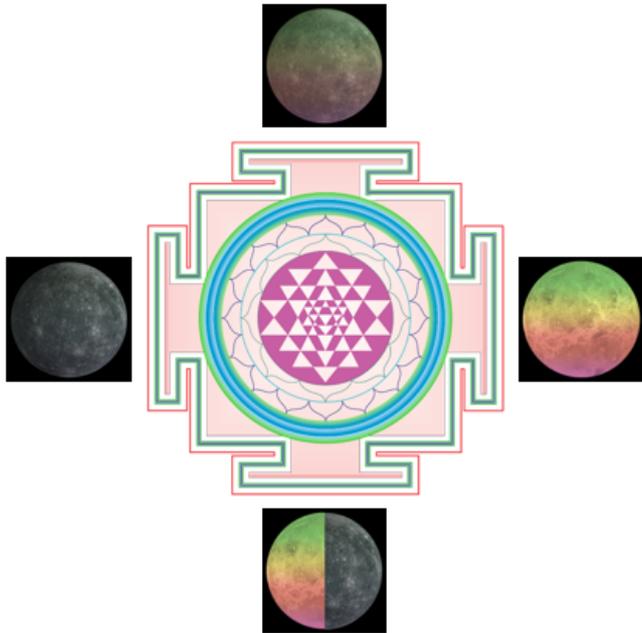
なにせよ、 $\psi 3$  と  $\psi 4$  の理解に取り組んでると、**知性と情動の関係**が気になってくるだろう。

そして、 $\psi 3$  と  $\psi 4$  を『等化』していない段階だと・・・いわば、**知性と情動の二つを上手く扱えてない状態**になっているかもしれない。

あるいは、どちらかに全く関心が向かないか、両方持ってたとしても葛藤みたいなのがあって上手く扱うことができないかもしれない。

これは、**精神分析的には「統合」**ができていないということである。

ユングの精神分析だと、無意識にある背反するものはマンダラのように配置することができて、それらを統合していくことが人生の目的になってくる。



そして、もしそれらが統合できていた場合・・・

ψ3とψ4の『等化』によって『次元観察子ψ5』が分かるようになっていくだけでなく・・・

右手に水星（知性）、左手に金星（情動）を持っているように、それらを自在に扱えるような「自己」になっているのではないだろうか？



※普通の画像じゃ味気ないため、[こちらの](#)画像をお借りしました

以上のような原理が、より確かな「自己」を理解するためのカギになっているだろう。

### ■ 等化と統合の関係

さて、そもそもニューソロジーにおける『等化』と、精神分析における「統合」の違いは何なのか？  
もちろんこの二つは別の概念ではあるが、非常に近い概念なのではないか？と思う。

冥王星のオコツトも以下のように言っていた。

次元観察子 $\psi 5$ とは自己が形成されている空間領域のことです。 $\psi 5$ は位置の等化によって顕在化を起  
こし、人間の内面と外面を統合します——シリウスファイル：19920204

これについて改めて考えると・・・『等化』によって人間の内面と外面を統合するとあるので・・・  
やはり、『等化』によって統合が起きることになるのではないだろうか？

『等化』については、『変換人型ゲシュタルト論』の番外編として以下の記事でも詳しく説明した。

[リンク：「次元上昇による意識の統合」とは何なのか？ ニューソロジーの「等化」と「中和」についてち  
ゃんと説明する（前編） - 哲学思考のなれの果て]



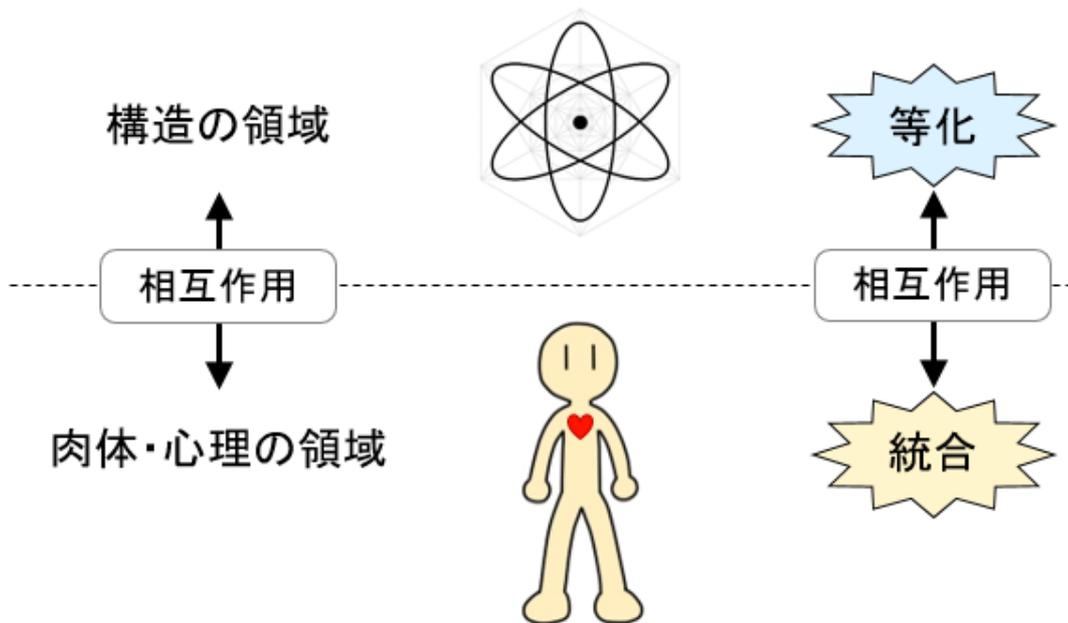
端的に言うと、『等化』とは相反する二つのものが表と裏であるかのような関係が見えるようになること  
であり、これができるということは次元上昇が起きているとも言えるわけである。

そして、実際にこれをやると、心理的には低次の意識が統合されていくような感覚が起きる。

また、心理の領域で統合が起きると、その背景では『等化』みたいなことが起きていることもある。

このように、「統合」と『等化』は近い作用を持っているため・・・『等化』とは、「統合」をより数学  
的に、理論的に定義できるようにした概念のようなものなのではないだろうか？

この両者の相互作用を、先ほどの「構造の領域と肉体・心理の領域」の図で表すと次のようになる。



このように、心理的な領域を掘り下げる話は、半田広宣さん自身の展開するニューソロジー本編ではあまりされておらず、心理に踏み込んだ者による解釈の話になってくるが・・・そうした解釈を深めてニューソロジーを理解していても良いと思う。

## 57. $\psi$ 5 における「自己」

これまで、長く難しい哲学の話をするようにヌーソロジーの話をしてきたが・・・

なんのためにそれをやってきたのだろうか？

ヌーソロジーを理解する目的の話になると、これまた混み入った話になってしまうが・・・

そもそも、ヌーソロジーを学ぶ目的に「自己を見つける」ということもあった。

ここで言う「自己」とは、単純に「自分が自分と認識している自己」という話ではない。

普段の我々は意識は、基本的に他者の影響を受けることが多いという原理や、我々は幼児の段階で「他者からの視線」をベースに「他者にとっての自分がこうだろう」というイメージから「自分はこうだろう」という意識を確立していくことは、以前にも説明した。

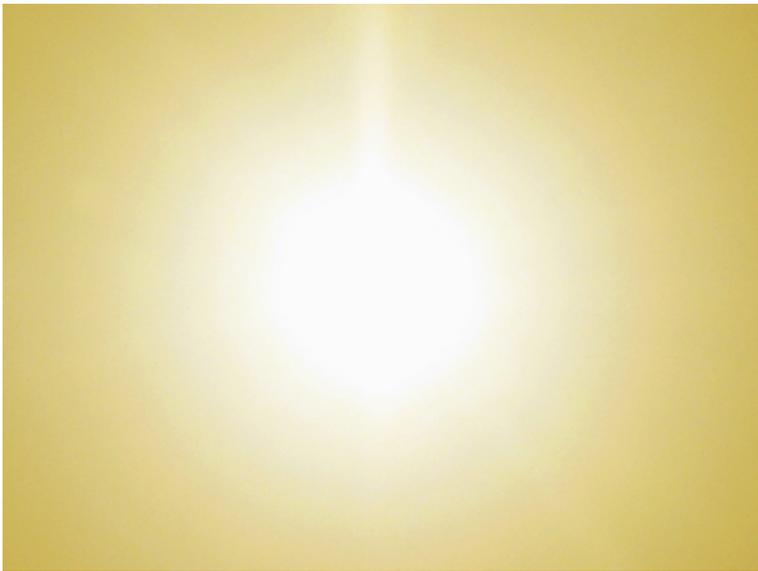
また、通常我々が認識できる「自己」は、科学的に説明できる空間があって、その中に肉体があって、肉体の中に精神がやどっている・・・みたいに、科学で説明できる世界観に基づいている。



そうした科学的世界観をヌーソロジーでは『人間型ゲシュタルト』と呼び、そこには意識の本質はないとする。

そのため、本質的な自己を知るためには「科学の枠」を越えないといけない。

したがって、ヌーソロジーにおける自己探求に必ず必要なのは科学の枠外にある「自己」を探ることであり、そうした科学の枠外にある「自己」のことをここでは「Spirit Self」と仮に呼ぶことにした。



それは西洋占星術的な太陽とも関係しているのだろうか？

太陽は西洋占星術では「魂の目的、人生の中心テーマ、自己表現、活力、生命力」などの意味を持つ。

そして、冥王星のオコットが言っていたことを改めて確認すると…

「自己」については以下のように言っていた。

次元観察子 $\psi 5$ とは自己が形成されている空間領域のことです。 $\psi 5$ は位置の等化によって顕在化を起こし、人間の内面と外面を統合します—シリウスファイル: 19920204

ここで、『次元観察子 $\psi 5$ 』の位置にあるとされる「自己」とは何なのか？を改めて考えてみよう。

### ■ ユングのセルフと、ヌーソロジーの自己

まず、自己といったらユングが提唱した「セルフ(self)」がある。

これは辞書的にも「自己」と訳される言葉だが、ユングが扱うそれには特別な意味がある。

ユングの言う自己(self)は、意識の中心にある自我(ego)に対して無意識化にあるものであり、以下のように説明されている。

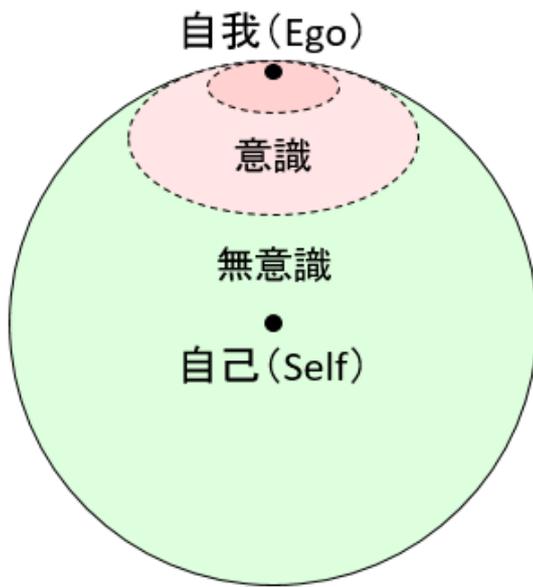
(河合隼雄著『ユング心理学入門』より引用)

意識の状態は一応安定しており、なんら自我の力によって変更する必要が認められないからである。

<中略>

その意識を超えた働きの中心として、ユングは自己なるものを考えたのである。自我が意識の中心であるのに対して、自己は意識と無意識とを含んだ心の全体性の中心であると考えた。自己は意識と無意識の統合の機能の中心であり、そのほか、人間の心に存在する対立的な要素、男性的なもの、女性的なもの、思考と感情などを統合する中心とも考えられる。

つまり、ユングの言う自己 (self) は以下のように、意識と無意識とを含んだ全体の中心にあるものに該当し、意識と無意識の統合の役割を果たす中心的なものにもなっているらしい。



それから、ニューソロジーの『次元観察子ψ5』も全体の中心みたいな位置にある。

分かりやすく表現すると下記のように上から3番目ぐらいに該当するわけだが・・・この位置は浅すぎず深すぎずな位置であり・・・第五層から先はまた深さが一変し、第七層は深すぎるから第六層までを捉えた方がよい。また、第四層で区切った方がよい・・・といったことを踏まえると、第三層あたりが全体の中心として要になっていることが分かってくる。

	ψ1～ψ2	第一層
	ψ3～ψ4	第二層
	ψ5～ψ6	第三層
	ψ7～ψ8	第四層
	ψ9～ψ10	第五層
	ψ11～ψ12	第六層
	ψ13～ψ14	第七層

したがって、ψ5にあるとされる自己も、ユングの自己 (self) に近いと捉えて良いと思う。

そして、ユングの言う自己 (self) が顕現しつつ、自身の自我がより高次の全体性へ向かうことを、ユングの用語で「個性化」という。それは以下のように説明されている。

(河合隼雄著『ユング心理学入門』より引用)

個人に内在する可能性を実現し、その自我を高次の全体性へと志向せしめる努力の課程を、ユングは**個性化の課程** (individuation process)、あるいは**自己実現** (self-realization) の課程と呼び、人生の究極の目的と考えた。

「個性化」について詳しくは以下の記事でも説明した。

[リンク：■河合隼雄を読み直す(2) ～「個性化」について～ - 哲学思考のなれの果て]

そこに至るためには、ヌーソロジーで説明されている難しい構造を理解していく構造的な課題があるというより、**心理的な課題**をクリアしなければならない。

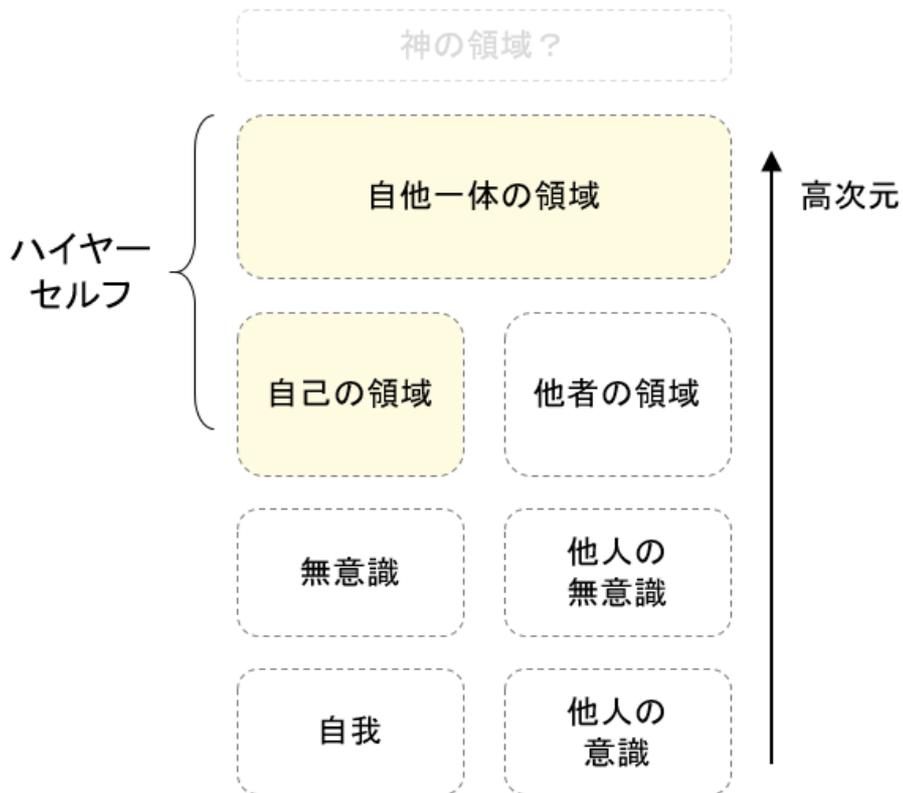
その辺りの話は前回の『**等化時の心理事情**』の項で説明した通りである。

### ■ スピリチュアルのハイヤーセルフと、ヌーソロジーの自己

それから、ユングの「セルフ」と近い言葉に、スピリチュアルにおける「ハイヤーセルフ」というものがある。

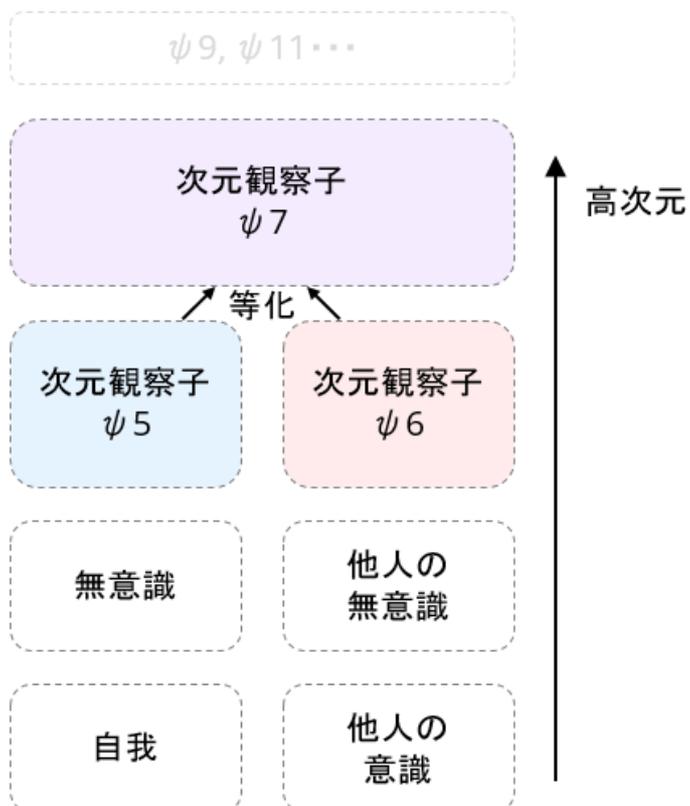
ハイヤーセルフは直訳すると「高次の自己」のような意味で、スピリチュアル界隈の色々な場所で使われている言葉なため、言葉を発した者が何をイメージしているかによってその明確な意味は異なるかもしれない。

そのため、単にハイヤーセルフと言っても定義があいまいな概念になっているが・・・それは**自他一体の領域にあるものも含む**ことがあるらしい。



そうすると、ニューソロジーにおける「自己」とそれとはちょっと違うかもしれない。

ニューソロジー的に自己と他者が一体となる領域（※厳密にいうと一体になるというより『等化』が起きる領域）は、『次元観察子 $\psi 5$ （自己）』と『次元観察子 $\psi 6$ （他者）』が『等化』する『次元観察子 $\psi 7$ 』からである。



しかしながら、『次元観察子ψ5』における「自己」はそうではない。

自我よりは高次元の領域にあるのは確かだが、自他一体の領域よりは前である。

そのため、「自他分離状態における最高位の自己」に該当するものが、『次元観察子ψ5』における「自己」ということになる。

そこは個性が発揮される領域のものであり、自他一体の領域よりも自立した意識のある場所である。立場的に多神教的な神の領域に近いのではないだろうか？

さて、「自己」についての説明を色々としてきたが・・・

要するに、これまでの説明をまとめると、以下のようになる。

- ユングの自己(self)のように全体の真ん中くらいに位置する
- 意識と無意識を統合するための中心的なものである
- 自他分離状態における最高位の存在である

こうした特徴を持つものが、『次元観察子ψ5』によって分かる「自己」ということになるのではないか？  
と思う。

## 58. ユダヤ・カバラの神と、人類が見る神？

今回は、「カバラ」や「生命の樹」の話をしていく。

古代思想が元になっているそうしたものとニューソロジーと絡めつつ・・・「自己」や「神」という概念についてを考えていこう。

「カバラ」や「生命の樹」について知っていくためには、ユダヤ教やユダヤ教神秘主義に関することからちゃんと説明していく必要があるため、その話から始めていく。



### ■ ユダヤ教とユダヤ教神秘主義（カバラ）

まず、「ユダヤ教」とは何か？

あまり説明はいらないかもしれないが・・・ユダヤ教はユダヤ人が信じる宗教であり、**世界最古の一神教**という説明が妥当なものである。

また、イエス・キリストがユダヤ人であったことが有名な話であり、ユダヤ教から派生してできたものがキリスト教である。

アダムやイブが出てくる有名なストーリーは「旧訳聖書」に書かれているものであり、これはユダヤ教の聖書になっている。

こうした聖書に基づく一神教として、「唯一なる神は恐れ多い存在であり、神を信じることが正しい」みたいな強い信仰心を基本としている宗教がユダヤ教である。

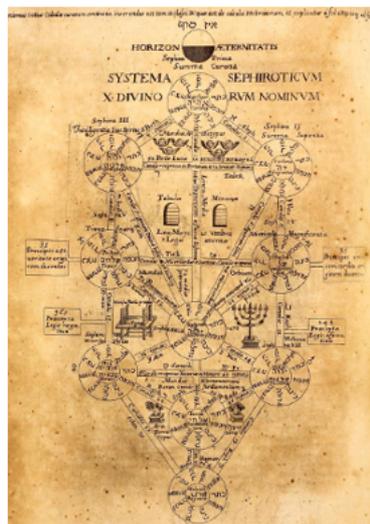
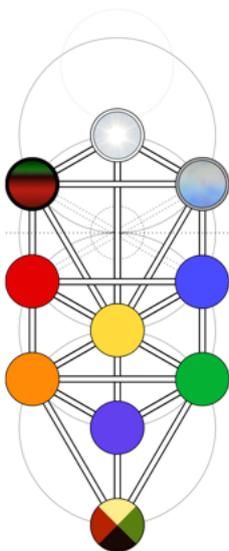
それから、ユダヤ人はユダヤ教を信じているわけだが・・・現代においては特定の血筋を持つ民族がユダヤ人というよりかは、むしろ、**ユダヤ教を信じる人間がユダヤ人**だと定義づけられているのが一般的になっている。

次に、「カバラ」とは何か？

これは「**生命の樹（セフィロト）**」が有名であるため、「生命の樹が出てくる神秘思想」みたいなイメー

ジで認識している人が多いかもしれない。

カバラは以下のような図で表されたシステムを扱う秘教的な神秘思想という面も持っているものである。



しかし、その別称は「ユダヤ教神秘主義」であり、ユダヤ人のユダヤ人によるユダヤ人のための神秘主義として出来たものがカバラである。

元々は口伝で秘かに伝えられていたものなため、その正確な発祥時期を追うのは難しいが・・・だいたい13世紀ぐらいに有名なカバラの文献『ゾーハル（光輝の書）』が明らかになっていって、そこから発展していったものである。

カバラは「宗教」ではなく「神秘主義」なため、その内容はユダヤ教とは違う。

ユダヤ教の基本スタンスは「神は人間とは比べ物にならないぐらい超越的な存在である」という神に対する認識があり、それから「神を信じるのが正しい」とする信仰心を持つことである。

しかし、時に「神とは何か？」を問いたがるユダヤ人もいる。そうした懐疑派のユダヤ人が作った思想がカバラなのか、カバラは「神とは何か？」を問うようなスタンスがあり、神の捉え方もユダヤ教とは異なる。

また、「カバラの神」はユダヤ教の神のように恐れ多いものではなく、ただ下僕のように信じれば良いものではない。哲学的な思索の中で見出すことができるものであるし、人間も神のような性質を持つことができる」とされている所が、ユダヤ教と比べると革新的なものになっている。

## ■ 「カバラの神」とは？

そんな「カバラの神」はどんなものなのか？

簡潔に説明すると「分かち合う精神を持った存在」である。

それはまるで「創造主の光」という言葉で表現できるものであり、エネルギーが満ち足りていて、それを分かち合うように与えることができる存在である。

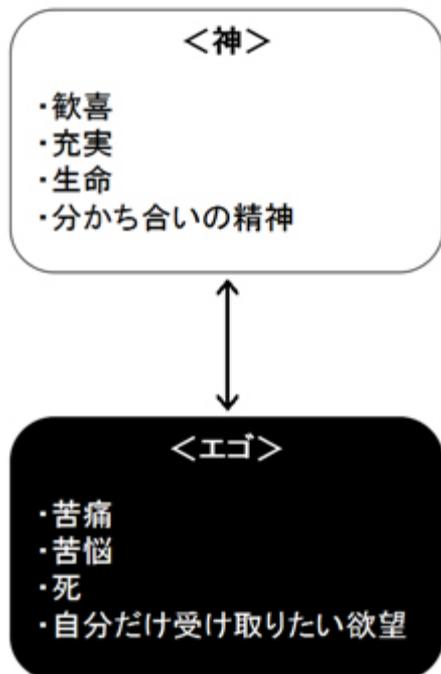
それは「歓喜」「充実」「生命」のエネルギーを持っているものだと説明されていて、そうした力を分かち合うことができる分かち合いの精神を持ったものが、カバラにおける神の在り方である。

これに対するものは、人間の持っている「エゴ」であり、これは「自分だけ受け取りたい欲望」を持っているとされる。

カバラの神に反して、人間のエゴは「分かち合いの精神」に反するものを持っていて、加えて「苦痛」「苦悩」「死」の性質を持っているものである。

それらの苦悩と共に自分だけ受け取りたい欲望を持つてしまうのが、カバラにおける人間のエゴの在り方である。

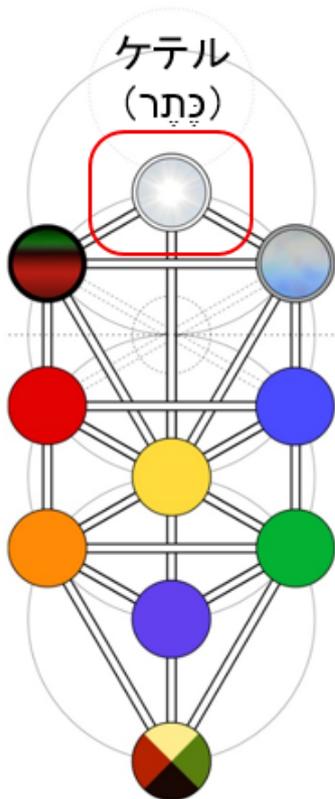
したがって、そうした「エゴ」から「神」の性質に近づくことで「神のようになる」ことができる・・・というのが、大まかなカバラの教えである。



・・・みたいなことが、以下の『神のようになる』という書籍に書かれている。

〔書籍：マイケル バーグ『神のようになる：神のようになる：カバラと人生の窮極目的』（2011）イシス〕

こうしたカバラの神は「生命の樹」だと一番上の「ケテル」という場所に存在するものに該当する・・・とも解釈することができる。

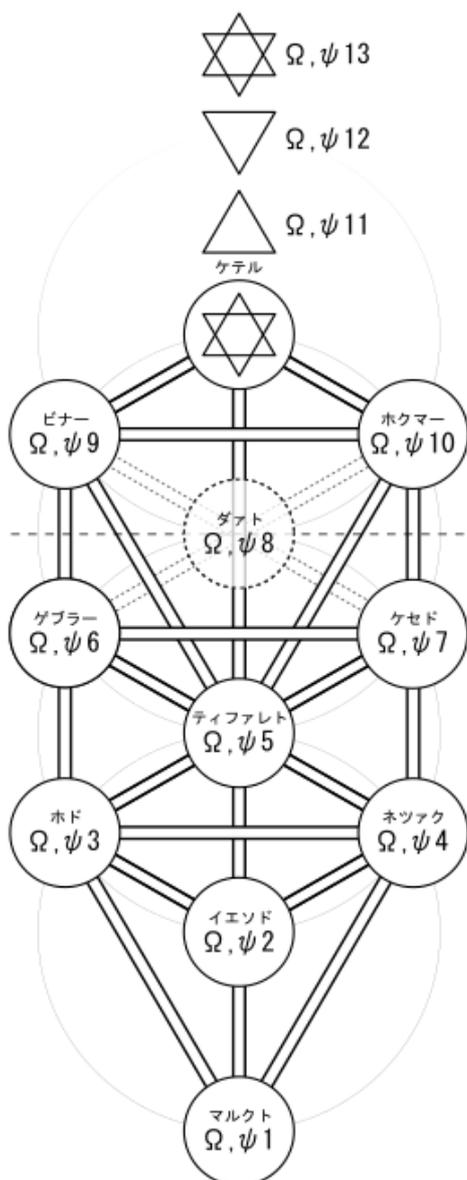


以上は、膨大とも言えるカバラの教えの一つだが・・・とても重要な核心に該当する所である。  
 ここで軽く説明した内容は、先に紹介した『神のようになる』という本に書かれていることを踏襲している。そして、この本はただの本ではないと言っても過言ではない。  
 カバラの代表的な聖典である『ゾーハル（光輝の書）』を全 23 巻すべて英訳したマイケル・バーグが、その教えをさらに簡潔にまとめて書いたものがこの本であるため、その内容はカバラの核心にも非常に近い内容なわけである。

### ■ カバラとニューソロジー

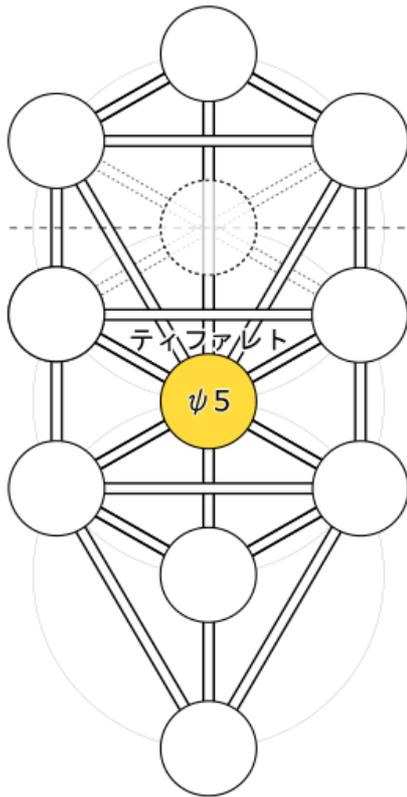
ニューソロジーもカバラと同様に「ユダヤ教のような一神教に対抗するもの」として、比較して語られることがある。

また、ニューソロジーでは、『次元観察子』と「生命の樹」の関係が考察されることがある。  
 例えば、「生命の樹」にあるそれぞれのセフィラーに対して、以下のように『次元観察子』と『大系観察子』を対応させることができる。



このように、ヌーソロジーの概念を「生命の樹」への対応させるやり方には諸説あるが・・・

『次元観察子ψ5』を以下のような「生命の樹」の当てた場合、「ティファレト」と呼ばれる場所に位置するため、「ティファレト⇒ψ5」の当て方はとてもしっくり来る。



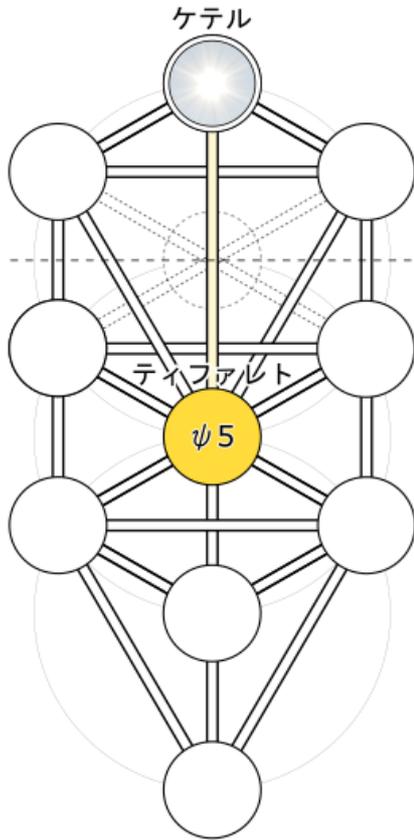
これが**全体の真ん中にある**ことも重要と言って良いだろう。

ユングの提唱した「自己(Self)」と同様で、「全体の真ん中にある自己⇒ティファレト」のように位置づけることもできるわけである。

そして、カバラの「ティファレト」は、一番上の「ケテル」と呼ばれている究極的なものに繋がっている。

一説によると、「ティファレト」は「ケテル」にとって「子」にあたる存在とされ、その原初の霊的エネルギーの変圧器・配電器としても働く。

加えて、「ケテル」はユダヤ・カバラにおける「神」が存在する場所に該当するわけである。



そのため、この話で重要なのは・・・「ティファレト」に位置する「自己」は、「ケテル」に位置する「神」の力の片鱗をいくらか持っていることである。

したがって、「ティファレト」や「ψ5」に該当する「自己」は「分かち合う精神」のような創造的な力を持っている存在であり・・・

そうした創造する力を持った「超人」みたいなものだとも言えるだろう。

### ■ 「人類が神を見る日」の意味とは？

さて、ニューソロジーにおいて始めて出版された書籍の名前は『2013：人類が神を見る日』である。



ヌーソロジーを学ぶ目的には「神とは何か？」を明らかにすることもあった。

ここで言う「神」とは、ユダヤ・カバラにおける「カバラの神」のような存在なのだろうか？

いや、そうした既存の神ではないかもしれないが・・・

『次元観察子ψ5』によって分かる「神」に関して言うならば、その領域は「自他分離状態の最高位の存在」のように解釈できるため、いくらか個性の強い多神教的な神に近いのだろうか？

なにせよ、『次元観察子ψ5』まで理解すれば、人間の内なる「自己」から見出した、神性の片鱗のようなものが分かるようになるだろう。

そして、そうした認識から「神」を知っていくことが大事なわけである。

このように、神のような存在に対する「認識」と「知識」が一体となっている「グノーシス(gnosis)」という言葉が古代からあった。

グノーシスを追求する立場の思想はグノーシス思想またはグノーシス主義と呼ばれる。

古代ギリシャで「神的知性」を意味する「ヌース(nous)」という言葉の語源はこの「グノーシス(gnosis)」にある。

ヘルメス主義に代表される西洋の様々な秘教的な思想・・・西洋魔術、占星術、錬金術、数秘術、カバラなどの立場の思想はどれもグノーシス思想に通じている所がある。

[リンク：ヘルメス主義 - Wikipedia]



そして、ヌーソロジーもまた、全く新しいやり方を試みるグノーシス思想と言えるものなのである。

ヌーソロジーを学んでいくなら、古代からグノーシスを追求していた人達のように・・・

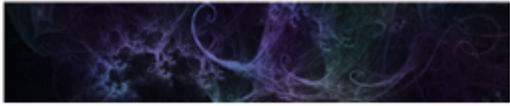
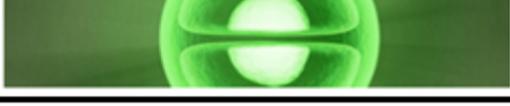
古代の神々へと思考を巡らせながらやっていくと良いと思う。

## 59. 「次元観察子 $\psi 6$ 」について

前回までは主に『次元観察子  $\psi 5$ 』について扱ってきた。

今回からは新規一転して『次元観察子  $\psi 6$ 』についてである。

『次元観察子  $\psi 6$ 』は、『次元観察子  $\psi 5$ 』の階層にあるもう片方の概念であり、この二つはセットになっているため合わせて理解していこう。

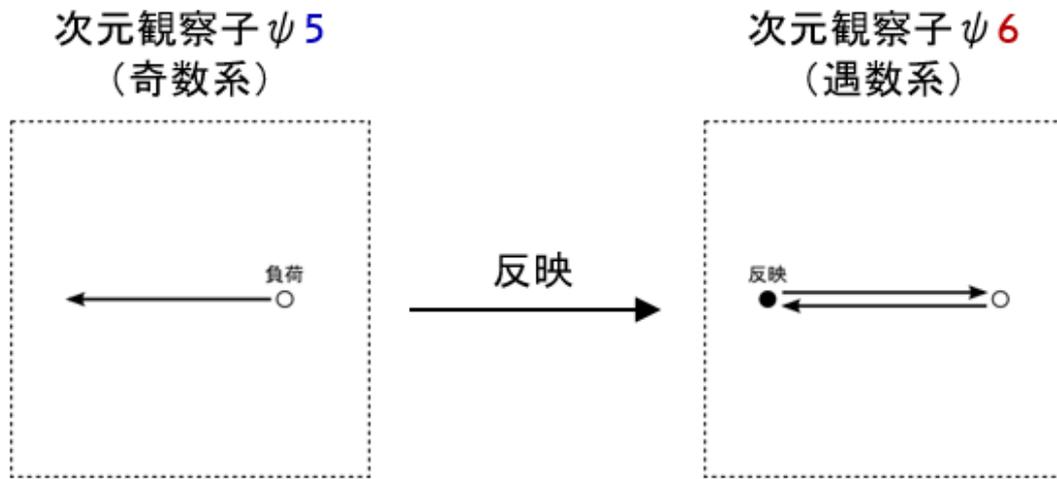
	$\psi 1 \sim \psi 2$	第一層	
	$\psi 3 \sim \psi 4$	第二層	
	$\psi 5 \sim \psi 6$	第三層	←
	$\psi 7 \sim \psi 8$	第四層	
	$\psi 9 \sim \psi 10$	第五層	
	$\psi 11 \sim \psi 12$	第六層	
	$\psi 13 \sim \psi 14$	第七層	

### ■ 「次元観察子 $\psi 6$ 」の基本

まず、『次元観察子  $\psi 6$ 』の基本となるのは「『次元観察子  $\psi 5$ 』の反映」なことである。

ヌーソロジーは「負荷と反映」という原理が基本にあるため、奇数系の  $\psi 5$  を『負荷』としたら、その『反映』にあるのが偶数系の  $\psi 6$  になるわけである。

これは  $\psi 3$  に対して  $\psi 4$  があるのも同様であった。



また、『次元観察子 $\psi 5$ 』は『位置の等化』と言われているのに対して、『次元観察子 $\psi 6$ 』には『位置の中和』というワードがついているため、『等化』と『中和』にもそれらは関係している。

(以下、『2013:人類が神を見る日 アドバンスト・エディション』より引用)

位置の変換とは、**位置の等化 (次元観察子 $\psi 5$ )**と**位置の中和 ( $\psi 6$ )**を行った後に生まれるシリウスの調整作用です。空間の曲率が完全に自己の質点側に反転してしまうことを意味しています。

それから、 $\psi 5$ を「自己が形成されている空間領域」とするなら、 $\psi 6$ は「他者が形成されている空間領域」ということになるため、「他者」がキーワードとなってくる。

書籍『2013:人類が神を見る日』や『2013:シリウス革命』でもそのように説明されているため、ここでもその言葉で説明していく。

(以下、『2013:人類が神を見る日 アドバンスト・エディション』より引用)

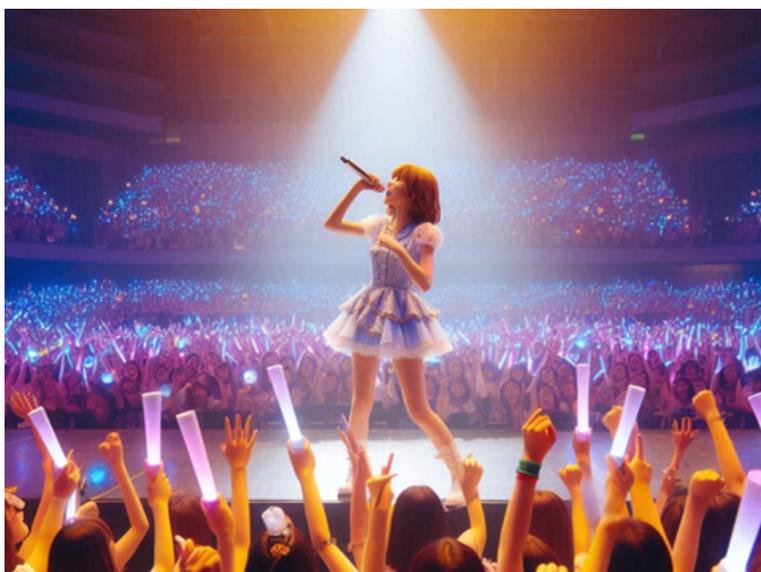
次元観察子 $\psi 5$ とは自己が形成されている空間領域のことです。 $\psi 5$ は位置の等化によって顕在化を起こし、人間の内面と外面を統合します——シリウスファイル: 19920204  
 次元観察子 $\psi 6$ とは、 $\psi 5$ の裏側に見えてくる空間領域のことです。 $\psi 5$ と $\psi 6$ は変換人の内面の対化に相当しています。変換人の内面の対化とは人間が自己と他者と呼んでいるものの関係と同じです——シリウスファイル: 19920220

しかし、最近のニューソロジー本論だと、 $\psi 6$ は「自我」というワードで説明されることもある。

従来通り「他者」というワードで説明しても良いのだが、ニューソロジーで言う「他者」はつきつめると「他人」とは別の意味なため、説明が少し難しい・・・

それは自分自身も持っているような「他者」の意識であるため、「自我」のような言葉でも $\psi 6$ を説明することができる。

そうした「他者」を「色んな他者の意識の集合体」みたいなイメージで理解しても良いと思う。



有名アイドルに熱狂している人達がいたら、その意識の集合体も「他者」であるし、逆にあらゆるメディアが嫌っているような人物がいてみんながそれを叩いていたら、その意識の集合体も「他者」である。

そして、自身もそうした「色んな他者の意識の集合体」みたいな意識を持っているものだと捉えると良い。

それがψ6で言われている「他者」である。

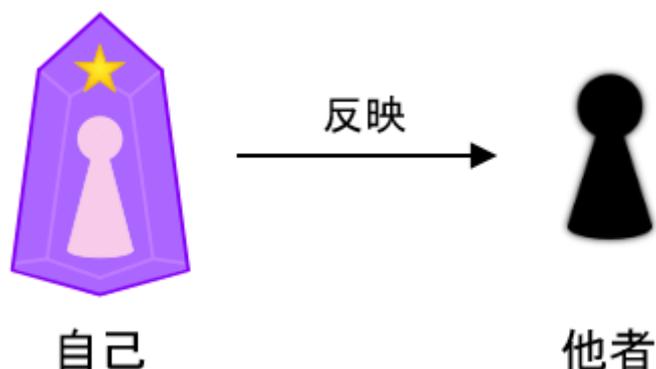
有名アイドルに熱狂している自分がいたら、それも自身の意識だし、あらゆるメディアが嫌っているような人物がいて自分もそれを叩いていたら、それも自身の意識になるわけである。

『次元観察子ψ6』の「他者」は当たり前のようにそこら中にあるものなので、我々の普段の生活の中でよく分かっているはずのものである。

しかし、実はその本質まではよく分かっていないかもしれない・・・

### ■ 自己（ψ5）の反映としての他者（ψ6）

『次元観察子ψ5』の「自己」が顕在化すると、ψ5の『反映』としてのψ6が分かるようになってくる。要するに、ψ5の「自己」に対して存在するのがψ6の「他者」と理解すれば良いわけである。



そんな『次元観察子ψ6』だが、『次元観察子ψ5』を説明してた時ほど抽象的な話にはならないだろう。

ψ5は世間であまり役に立たない哲学の延長にある話とすれば、ψ6は他者のために役立つビジネスの延長にあるようなものである。

例えば、アイドルを有名にして色々な人に熱狂させる方法が分かれば、それはビジネスの役に立つし、特定の人をあらゆるメディアが叩くように仕向けるための仕組みが分かれば、それもビジネスの役に立ったりする。

ψ6は「他者」の意識にアクセスする概念であるため、それを理解していくとビジネスでの成功にも明らかに繋がっていく。

ψ5を得た者の強さは、一見すると強いかどうかは分からないが・・・

ψ6を得た者の強さは、とても分かりやすく強いように見える。



そんなψ6について、これからじっくりと説明していこうと思う。

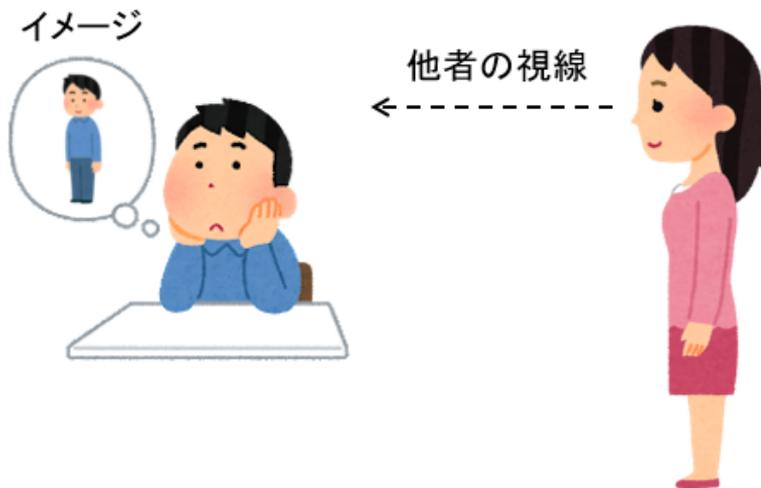
## 60. $\psi$ 6 側の「回転」と「無数化」

前回到引き続き、『次元観察子 $\psi$ 6』の説明を詳しくやっていこうと思う。

・・・とはいえ、これは『次元観察子 $\psi$ 5』ほど抽象的な話にはならない。

例えば、我々が普通に他者の視線を意識したとしよう。

あるいは、他者のことを考えて、それらがどのように世界を見てるかをイメージするとしよう。



それによって、自身が他者のことを考えた行動をすることができたり、自身が他者のためになるアイデンティティを形成することができる。

そうした意識形成の先に $\psi$ 6がある感じである。

また、 $\psi$ 5を理解するための鍵となる概念は「回転」と「無数化」だった。

そして、 $\psi$ 6を理解するための鍵となる概念も「回転」と「無数化」なのであるが・・・それは $\psi$ 5ほどイメージの難しいものではない。

ごく普通に回転をイメージしたり、ごく普通に無数化をイメージしたりすれば良い。

そんなわけで、 $\psi$ 6における「回転」と「無数化」について説明しよう。

### ■ 回転

まず、とある物体があったとしよう。



その物体は一面だけではどうなっているか分からない。2D (2次元) である。  
そのため、全貌がどうなっているかを把握するには回転させる必要がある。  
そうすると、3D (3次元) としてそれを正確に認識することができる。



(回転すると実は円柱であることが分かる図)

また、あらゆるものに対してこれを行うことで、3D として世界を認識することが定着する。  
自身が動いて世界を見渡したり、物を手にとって操作したりすると、色んな物の色んな面を見ることが  
できる。  
これは「物を回転させて、その物を 3D として認識する」ことと同義であり、世界を 3D として認識するこ  
ととも同義である。

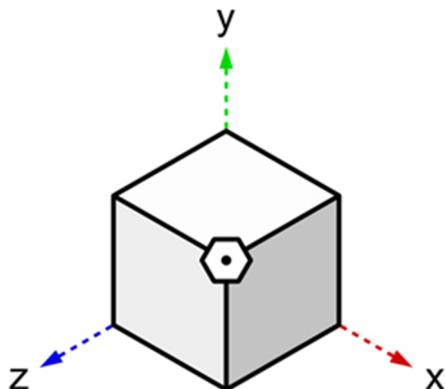
以下の『視点変換 3D ルーム』でも、部屋を動き回ること、世界や物の色んな面をみることが分かるだろ  
うか？

これは「回転」によって世界の全貌を 3D として把握していることと同義である。

[リンク：視点変換 3D ルーム]

このように、 $\psi_6$  の回転は、本当にただ物を回して、3D としてそのものを把握するだけである。

一方、 $\psi_5$  の場合は例えば以下の図を使って「4次元空間」を発見して、知覚正面を認知して、それを回すみたいなことをしていたが・・・



$\psi_6$  の場合はそこまで考えなくて良い。

普通に物が回っていて、自身の視線とその物の間には、ちゃんと「距離」があることが分かっているだけで良い。

簡単な話であるが、分かっただろうか？

### ■ 無数化

次に、「無数化」についてである。

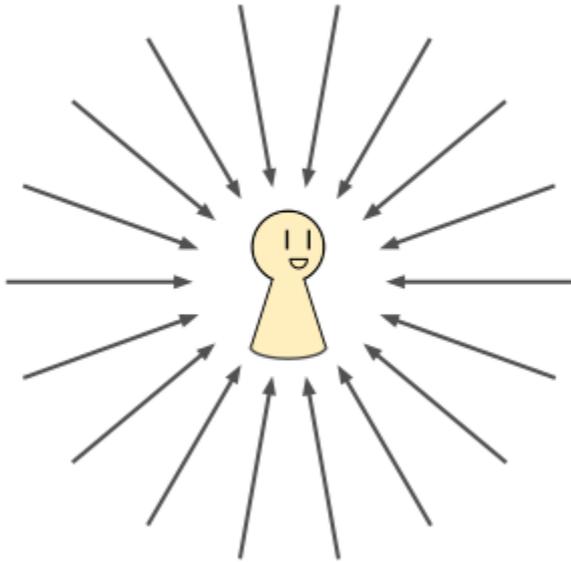
これもただ「数え切れないほど増やすだけ」のイメージで大体正しい。

まず、『次元観察子 $\psi_6$ 』より一つ次元を落として・・・

『次元観察子 $\psi_4$ 』の場合は、他者の視線を1本だけ意識するだけであった。



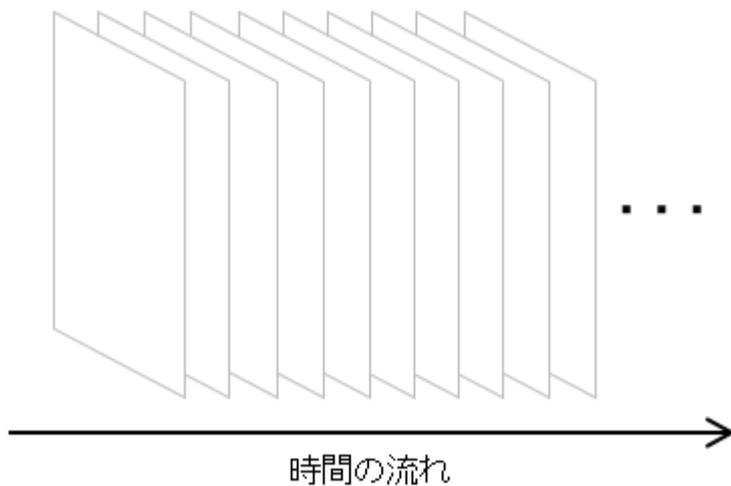
そして、『次元観察子 $\psi_6$ 』の場合は、他者の視線をたくさん（無数の数）意識する。



大体それがイメージできればOKである。

また、この時、視線の数だけでなく、時間軸においても「無数化」が行われていることが重要である。自身の肉体が動いている時、それは直線的な時間の中で動くアニメーションのように捉えることができるの分かるだろうか？

### ～直線的な時間～



アニメーションの中にある1枚1枚の絵はそれぞれ単一のイメージに過ぎないが、時間軸にそってそれを無数に増やすことで、無数のイメージから自身の肉体の動きを捉えることができるわけである。

また、自身が回転しているアニメーションによって、自身の身体的全貌を認識している時も、それと同様のことが起きている。



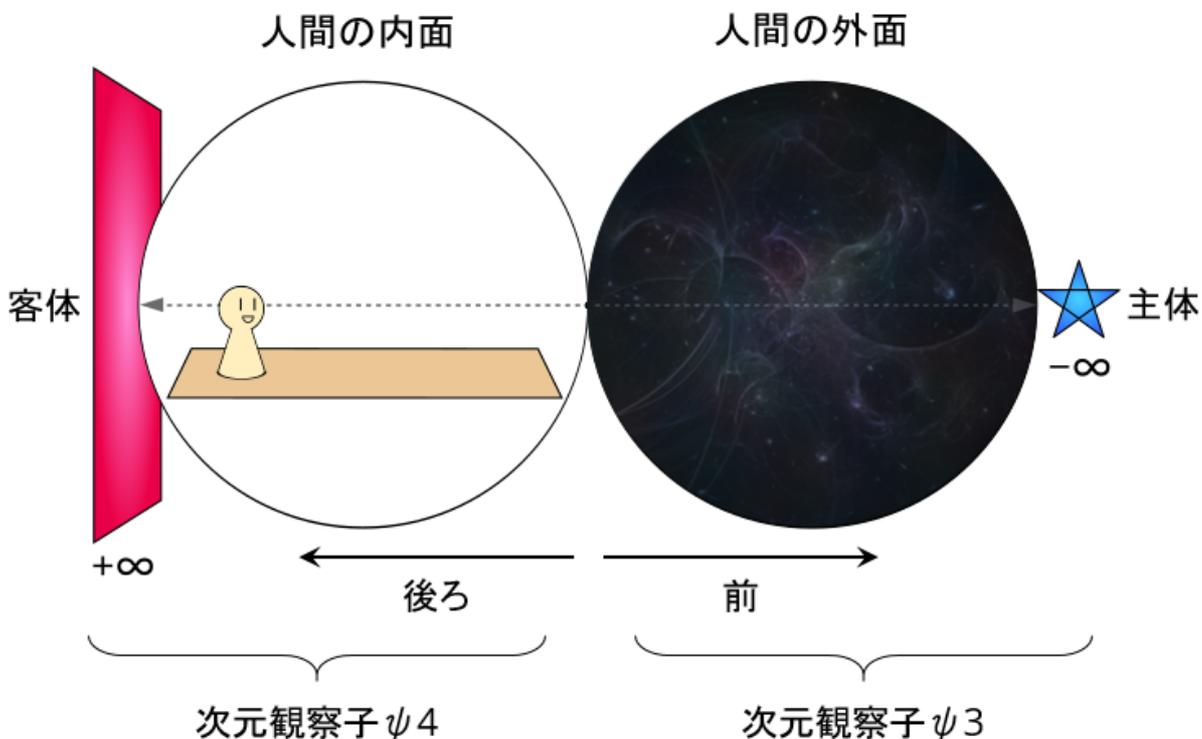
[アニメーション：人の形をしたものがy軸を中心に回転している]

以上のように、通常の時空における「回転」と「無数化」が理解できれば、 $\psi 6$ における回転と無数化の理解は大体OKである。

### ■ 主体の無数化に対する、客体の無数化

さらに、「無数化」ということで、『次元観察子 $\psi 6$ 』の場合は「客体の無数化」が起きていると考えれば良い。

『次元観察子 $\psi 3$ 』と『次元観察子 $\psi 4$ 』では以下のように「主体」と「客体」があった。

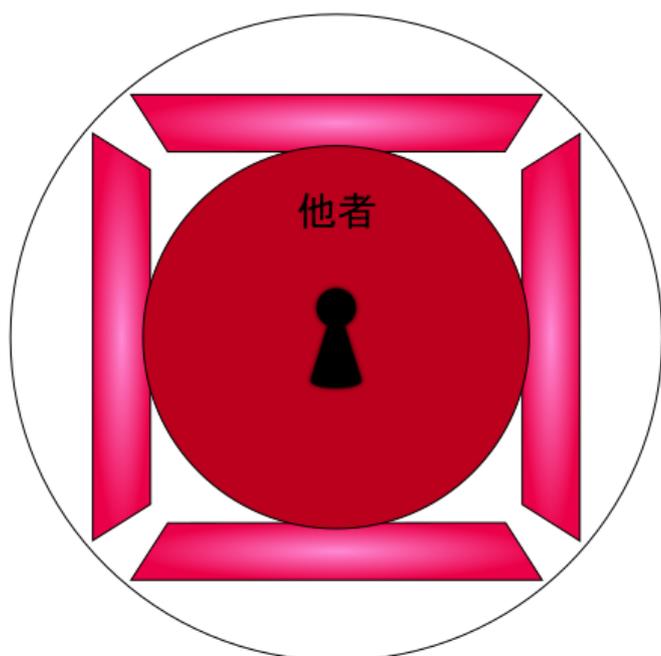


『次元観察子 $\psi 5$ 』の場合は「見ること」を主とする「主体」が無数になるので、以下のようなイメージになるとした。



次元観察子 $\psi 5$   
 $\pm \infty$

それと同様のイメージでいくと・・・『次元観察子 $\psi 6$ 』は「見られること」を主とする「客体」が無数になるので、以下のようになる。



次元観察子 $\psi 6$   
 $\mp \infty$

これは $\psi_5$ と比較するための簡易的なイメージだが・・・分かったらどうか？

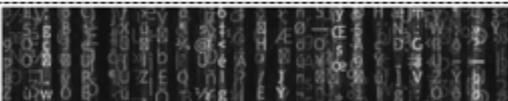
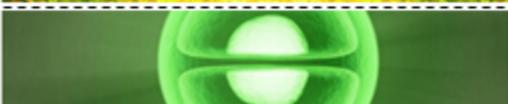
以上で説明したように、 $\psi_6$ に関しては、物が回転するアニメーションのイメージや、無数の視線があるイメージが分かれば基本はOKである。

## 61. 3D ゲーム内の身体

前回、「回転」や「無数化」についてを説明した。

『次元観察子 $\psi 6$ 』においてのそれは、3D やアニメーションの仕組みが密接に関係していることも分かっただろう。

また、 $\psi 5$  と  $\psi 6$  は共に「**身体の次元**」と言えるものに該当する。

	$\psi 1 \sim \psi 2$ 普通の時空の次元
	$\psi 3 \sim \psi 4$ 一つのモノの次元
	$\psi 5 \sim \psi 6$ 身体の次元
	$\psi 7 \sim \psi 8$
	$\psi 9 \sim \psi 10$
	$\psi 11 \sim \psi 12$
	$\psi 13 \sim \psi 14$

そのため、「3D ゲームの中にある身体」を理解することは、ほとんど $\psi 6$ を理解することと同義である。何か適当な3Dゲームをピックアップして、その中にいる主人公が自分自身であることをイメージしてみると良い。

このように、3Dゲームで $\psi 6$ を理解していくと、分かりやすいので良いと思う。

### ■ 「火星」の付随イメージ

さて、イメージの話をもう少しくきつめていこう。

これまで『次元観察子』と「惑星」を対応させていったように、 $\psi 3$ は「水星」、 $\psi 4$ は「金星」、 $\psi 5$ は「太陽」・・・と対応させていった場合、 $\psi 6$ には「火星」が対応する。

(厳密に言うと、「水星」「金星」「太陽」はそれぞれ『大系観察子』の $\Omega 3$ 、 $\Omega 4$ 、 $\Omega 5$ が対応するため、これも厳密に言うと $\Omega 6$ に対応する)



火星は西洋占星術やギリシャ神話において「戦いの星」のような存在であり、占星術的な意味だと「闘争心」「情熱」「行動力」「欲望」「性的エネルギー」などが挙げられる。

これらはどれも「他者」に絡んだものとして相応しいとも言えるだろう。

無数の他者に対して勝ち抜いていくための戦いの意識や、他者に対してのアウトプットなどが火星の意味になるわけである。

ψ5は魂や精神を強化していく感じとするならば、それに対してψ6は鎧を強化する感じや、鎧を着る肉体を鍛える感じになるだろう。



これと、「3Dゲームの中にある身体」もまたイメージがマッチする。

ψ6の世界観は、3Dゲームような世界を勝ち抜くために、自身を鍛えていくような世界観である。

『次元観察子ψ6』についてが大体分かって来ただろうか？

## 62. 「他者化」とは何か？

『次元観察子ψ6』については今回で最後にしよう。

最後は「他者化」についてである。

「他者化」については、このシリーズの『「自己」を見つけるために』の項でも説明した。

[リンク：■変換人型ゲシュタルト論(3)～「自己」を見つけるために～ - 哲学思考のなれの果て]

「他者化」とは、端的に説明するならば・・・

「完全に他者になりきるように、他者みたいな存在と自分が同一化すること」みたいな意味である。

例えば、自身が警察官のような仕事をしていたとしよう。その仕事が本当に自分自身で選んだものであるならば良いかもしれないが、親の意見に従ったからそうなったとか、公務員として安定しているからその仕事を選んだとか、親や社会の言葉の影響が強かった場合はどうなるのだろうか？

そうすると、自己が本当に警察官を望んでいるわけでもないのに、警察官としての「他者」になりきらなければいけなくなってしまう。「警察官」という存在と同一化することで、本来の自己から離れるようになってしまう。

そのような同一化現象が「他者化」である。

こうした例は、一般的な会社員でも当てはまるし、専業主婦でも当てはまる。

人は自分自身の意識で人生を選んでいるようであるが、その意識は「他者」の影響を受けることが多い。だから、普通に生きているつもりでも、うっすらと「他者化」をして生きているかもしれない。

そして、そうした「他者化」が意味する「他者」は『次元観察子ψ6』にある「他者」とほとんど同義である。

自己探求の道の中心には『次元観察子ψ5』があるように、他者探究の道の中心には『次元観察子ψ6』がある。

ヌーソロジーはそうした「他者化」と逆の方向を目指すため、それを理解することがヌーソロジーを学ぶ前提として重要である。

### ■ 他者化と4大欲求

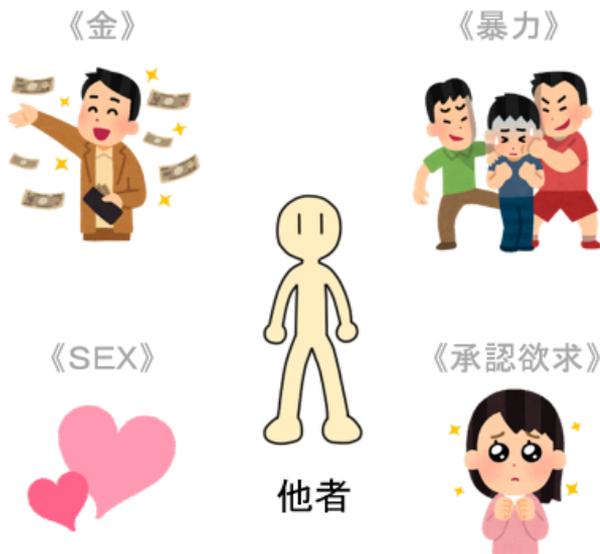
また、以下の記事でも「他者化」についてを説明していた。

[リンク：ヌーソロジーと変換人型ゲシュタルトを学ぶ意義→他者への執着が治まることについて考える - 哲学思考のなれの果て]

ここでは物質世界における4つの大きな「欲求」として、「金」「暴力」「セックス」「承認」の4つを挙げた。

これらをここでは「4大欲求」と呼ぶことにしよう。

## ～物質世界～



大体、人間はこうした欲求にシンプルに翻弄されやすいのは心当たりがあるだろう。

だから、多くの他者はこうした欲求を満たすように動いているし、社会はそれによって動いている。

これらの欲求を満たして生きていけば幸せになれるのならば、そのための努力をしていけば良いだけなのだが、人生はそんなに単純ではない。

加えて、それらの欲求に加えて、人間は常に「他者の言葉」にさらされている性質がある。

だからそれに乗せられて没頭すると、他者化してしまうのである。

例えば、親や学校に「良い人間になりなさい」と言われ続けたらそれに影響されることもあるし…

テレビメディアや広告メディアが提示する「カッコ良い人間になろう」みたいなメッセージに影響されることもある。

このように、言葉と人間の関係は切っても切ることができない。

誰もが抱えている問題であるため、人間社会は常にその問題が発生するものである。

### ■ 他者化を判断するための指標となるもの

言葉に影響されることは人間だったら誰でも起きることだが、どうなったら「他者化している」と明確に言えるのだろうか？

その境目は曖昧であるから判断が難しい。

他者化しているかの指標になるキーワードの一つは「善悪二元論」である。

善悪二元論とは、何か特定の生き方や考え方を善とし、そうでないものを悪と考えることである。

例えば、真面目に勉強して良い企業の会社員になって普通の人生を生きることを「善」とするならば、そうでない生き方が「悪い」となる。

あるいは、キリスト教が信じられているような文化の場合は、キリスト教を信じるような生き方が「善」であり、そうでない生き方は「悪い」となる。

このように「良い / 悪い」のジャッジをはっきりさせて物事を考えていくことが、善悪二元論である。こうしたことは誰でも考えることだが、それが行き過ぎてないか、強固過ぎてないかが大事である。とはいえ、何が善で何が悪なのか・・・非常に難しい問題だと思う。

世間で常識とされてることが大体正しい場合もあれば、実はそれは権威を持っている人が決めたことで万人向けではなくて、正しいとは言えないこともある。

逆に、そうした世間で言われていることに逆らうことが正しい場合もあるが、それはそれで必ず正しいとも限らない。

よくよく考えて正しい善だと思ったことを実行している分には良いが・・・

善悪観が極端だったら要注意である。

よくよく考えたらズレてるような価値観を他者に押しつけていたり、あまりにも行き過ぎてるものがあれば他者化しているかもしれない。

また、正しいと思ったことが実は誰かの「言葉」によって膨張されていたことであり、真実とズレていることもある。

善悪二元論もまた、言葉によって強固になる。

例えば宗教だと・・・特定の国の宗教の戒律や聖書に書いてあることが「正しい」としたら、それに反する者達が正しくないことが強固になる。

例えばメディアだと・・・テレビメディアにせよネットメディアにせよ、大衆はそこで言われている言葉について影響を受けてしまい、メディアに操作されるように思想が強固になることはよくあることである。

そうした言葉によって本来の自身が望むものと違うものになってしまったら他者化しているし、自身の思想を他者へ強引に押しつけることまでしていたら、それも他者化している。

また、そうした言葉で提示されていることが、真実とズレていけばズレているほど良くない方向に行っている。

4大欲求みたいなものが加速し、自身の自我にとって都合の良いものを信じるように物事を認識していて、善悪観が極端に歪み、実は真実とはズレたことをやっているかもしれない。

我々人間は誰しも4大欲求のようなものを持っているし、言葉を扱って生きている。だからこうした問題は誰しもおちいりやすい難しい問題なので・・・皆そうしたことに気をつけて社会を生きていかなければいけないわけである。

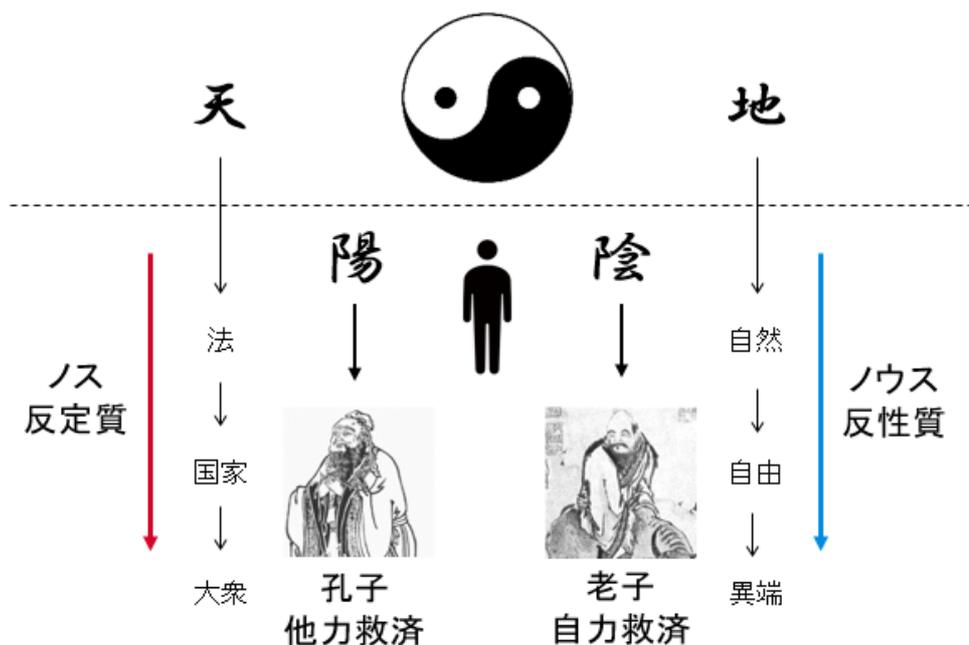
## ■ 他者化は悪いことなのか？

さて、これまで他者化をネガティブなもののように説明してきたが・・・一概にそうとは言えないものでもある。

ここで、『55. 胡蝶の夢と東洋思想』の項で書いた「孔子と老子」の話を思いだそう。

老子側の思想を「陰」と捉え、孔子側の思想を「陽」と捉えると、双方はそれぞれ『ノウス (NOOS)』と『ノス (NOS)』に該当することを以前に説明した。

自己の方向へ行く「自己化」の道が老子の思想に通じているように、他者の方向に行く「他者化」は孔子の思想に通じているわけである。



しかし、孔子の思想は悪かったと言えるのだろうか？

彼自身は「仁（思いやりの心）」を至上とし、仁を持っていて賢い者が国王やリーダーになれば世の中が良くなるという思想で頑張っていた人だった。

「孔子の言葉」は後世において強烈なものとして残り、その言葉がまた他者化を引き起こし、孔子の思想通りに世の中が動かない負の連鎖が続いていく結果になってしまっているが・・・

それでもそうした言葉を受けて、国家のために尽くそうとして他者のために動くことは決して悪いことではない。

他者化は悪い結果を起こすものでもあるが、国家のため、世の中のため、社会のため、他者のために動いていくには、そのリスクを負わないといけないものでもある。

このように、他者化を決してネガティブなものとして捉えないことも、ニューソロジーを深めていくにおいて大切なことである。

## ■ 画一化、他者化、他者の哲学

それから、「他者化」は言い換えるならば「画一化」でもある。

より合理的な他者になることは、画一的な人間になることと同義である。

「画一化」が社会にとって合理的だから行われる例はたくさんある。

まず、単純に軍隊は画一的なものを持っていると強い。画一的に「勝てる行動」を忠実にできる兵が多い軍隊は、それだけで強力な戦術を持っている。

営業マンもまずは画一的な方が良く、画一的な大衆を相手にした方が稼ぐことがやりやすい。

プログラマーも画一的な思考で画一的なスキルを一つは身につけた方が良く、独自の発想で考えるのはそれを学びながらにした方が良い。

デザイナーも画一的でグローバルに通用しやすいデザインを一つ学んだ方が世間で通用しやすい。

スマートフォンだって、iPhone のようになると完成度の高い画一的なデザインがされてて、かつ使いやすく設計されたものが普及していた方が便利だと言える。

このように、「画一化」はつきつめるだけで一つの大きな教材になる、非常に奥が深い分野で、つきつめていくと多大な時間を要するものなのだが・・・

社会を変えるためには必要なことであり、そうした社会の中で物事を学ぶのが人間のやるべきことなのではないだろうか？

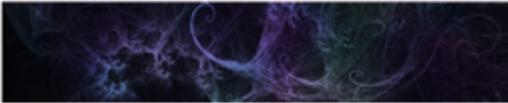
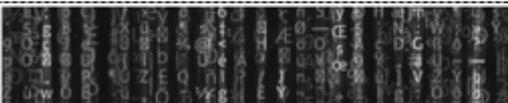
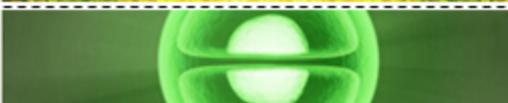
こうした類の話はヌーソロジーとは真逆の方向性のものなのであるが・・・ビジネスや社会に通じる話のため、よく考えた方が良さそう。

また、そうした「他者の哲学」を考えて理解することもまた、それより上位の次元を理解するためのカギになるかもしれない・・・

## 63. プログラム4 次元観察子 $\psi 7 \sim \psi 8$ 位置の変換と転換

いよいよ『次元観察子 $\psi 7$ 』の話をしていこう。

これは『次元観察子 $\psi 5 \sim \psi 6$ 』の『等化』をした先にある次の段階である。

	$\psi 1 \sim \psi 2$	第一層
	$\psi 3 \sim \psi 4$	第二層
	$\psi 5 \sim \psi 6$	第三層
	$\psi 7 \sim \psi 8$	第四層
	$\psi 9 \sim \psi 10$	第五層
	$\psi 11 \sim \psi 12$	第六層
	$\psi 13 \sim \psi 14$	第七層

こうしてみると4番目だが、観察子の階層の4番目までは『元止揚』と呼ばれるため、ここで一区切りとなっている。

いわば、元止揚の最高位に位置するノウス側のものが『次元観察子 $\psi 7$ 』である。

$\psi 13$ ( $\psi 14$ )	人間の観察精神(とその反映)	変換質
$\psi 11$ ー $\psi 12$	人間の定質と性質	中性質
$\psi 9$ ー $\psi 10$	人間の思形と感性	調整質
$\psi 7$ ー $\psi 8$	意識進化と時空	} 元止揚
$\psi 5$ ー $\psi 6$	自己と他者	
$\psi 3$ ー $\psi 4$	主体と客体	
$\psi 1$ ー $\psi 2$	空間と時間(またはミクロとマクロ)	

また、 $\psi 7$ ~ $\psi 8$  より先は仕組みがガラリと違ってくるため、人間視点だと $\psi 7$ が最高位のようにも見えるものである。

この『変換人型ゲシュタルト論』もまた、 $\psi 7$ ~ $\psi 8$ の説明で最後とするので・・・これでラストのつもりでやっていこう。

### ■ 「位置の変換」というワード

まず、『次元観察子 $\psi 7$ 』は『位置の変換』というワードで呼ばれている。

『位置の変換』は書籍『人類が神を見る日』では以下のように書かれている。

位置の変換とは、位置の等化（次元観察子 $\psi 5$ ）と位置の中和（ $\psi 6$ ）を行った後に生まれるシリウスの調整作用です。空間の曲率が完全に自己の質点側に反転してしまうことを意味しています。

ここに書かれているように、『次元観察子 $\psi 5$ 』と『次元観察子 $\psi 6$ 』の『等化』をすると『次元観察子 $\psi 7$ 』に行くため、 $\psi 7$ が『位置の変換』に該当するわけである。

このことをまずは覚えておこう。

また、ヌーソロジーでは「西暦 2013 年」が重要視されていた。

なぜかという、冥王星のオコットによると、2013年に起こるとされていたのが『位置の変換』だからである。

これは『ハーベスト・ビーコン』と呼ばれる意識進化を誘導する信号？のようなものが関係している。ハーベスト・ビーコンについてはこのシリーズの冒頭でも少し触れた。書籍『人類が神を見る日』によると、冥王星のオコツトは以下のように言っていたらしい。

「ハーベスト・ビーコンは1989年から発信が始まっています。この交信も冥王星を中継ターミナルとしてそのビーコンに乗せて発信させられています。わたしの役目はシリウスの調整シグナルを増幅することにあるのです」

さらに、それに加えて『ハーベスト・プログラム』のスケジュールというものが存在するらしい。これも先の書籍によると以下のように書かれている。

「ここでハーベスト・プログラムのスケジュールデータを送信しておきます。これらを今後の指標にして下さい。各項目の詳しい内容に関しては必要とあらば随時、説明していくことになるでしょう」

1930……最終構成への調整開始（冥王星の発見・昇交点通過）  
1979……最終構成の開始（海王星軌道の内側への侵入）  
1989……新しい定質の発振（冥王星の近日点通過）  
1999……位置の等化（海王星軌道の外側に再び戻る）  
2012……位置の中和  
2013……位置の変換開始  
2025……位置の転換開始  
2037……入神

一体これが何を意味しているか・・・具体的な意味が掴みかねる・・・謎のスケジュールであるが・・・ここでも『位置の変換』というワードが登場する。

このように、次元観察子における『位置の変換』と、ハーベスト・プログラムにおける『位置の変換』がある所が少しややこしいのだが・・・

次元観察子における『位置の変換』は個人で実践していくうちに具体的に分かっていくものである。

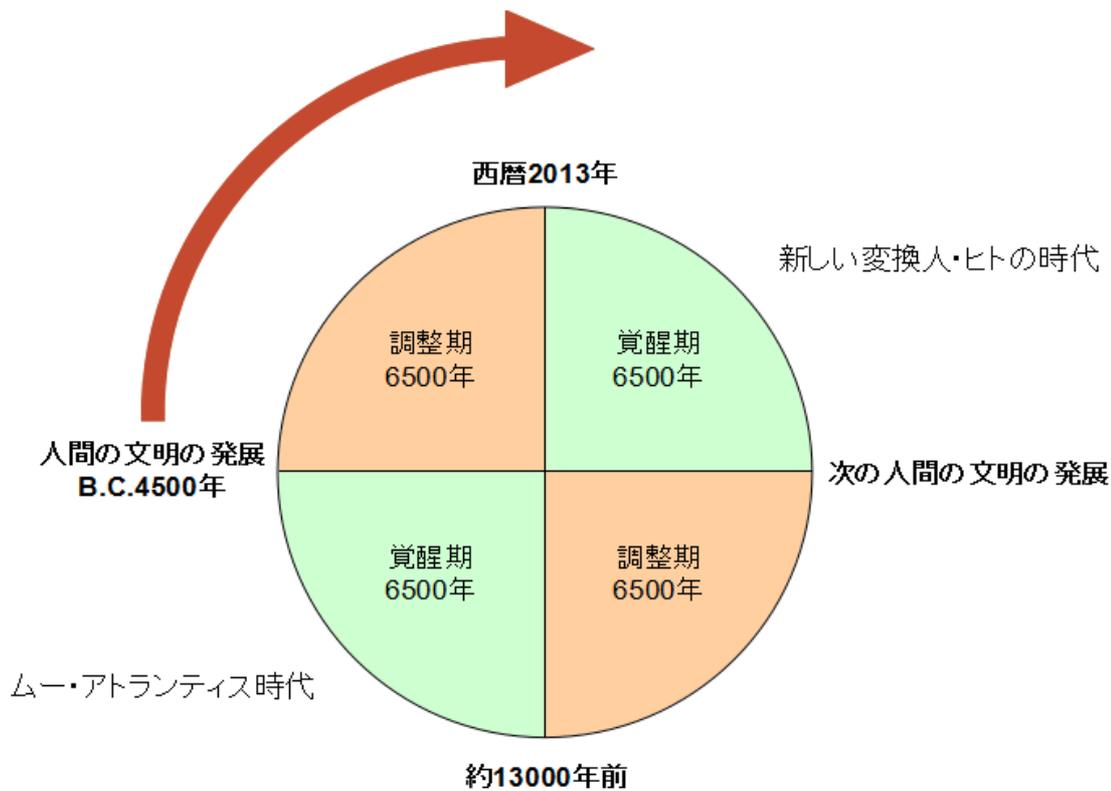
一方で、ハーベスト・プログラムにおける『位置の変換』は、人類全体で自動的に、そういう意識がうっすらと無意識下で起こっていくものである。・・・というように理解すれば良いと思う。

ハーベスト・プログラムによって、人類が皆『位置の変換』が自動的に分かるほど簡単にはいかないようだが・・・。その時期に起きたことをきっかけに『位置の変換』が分かることは起こり得るかもしれない。

## ■ 6500年周期と位置の変換

それから、もっとつきつめると、宇宙には「次元交替化のサイクル」と呼ばれる6500年の周期があり、そこには『覚醒期』⇒『調整期』⇒『覚醒期』⇒『調整期』のサイクルがある・・・らしい。

今現在の人間は『調整期』のサイクルを生きている最中であり、それより前の『覚醒期』はムーやアトランティスなどの古代文明があった時期に該当する。  
 これもまた、冥王星のオコットが言っていた、壮大な宇宙論の内容の一つである。  
 そして、2013年はちょうど『調整期』⇒『覚醒期』の変わり目の年になるらしい。



これが、冥王星のオコットが明言していた 2013 年の意味である。だからヌーソロジーの代表書籍には『2013：シリウス革命』『2013：人類が神を見る日』と、「2013」の数字が記されている。

果たしてこれから何が起きるのだろうか？

また、2013 年には何が起きていたのだろうか？

これに関しては、物理的に何かが起こるような具体的な説明は冥王星のオコットからはなく、意識の変化の話になるため、あくまで抽象的な話になる。

そのため、何かを示唆している伝説みたいなものだと思ってもらえれば良いと思う。

### ■ 陽子は愛のようなもの？

それから、ヌーソロジーで重要なのは、『次元観察子ψ7』は陽子として表れている・・・と言われていることである。

そして、ψ7は自己と他者を『等化』するものなため、「愛のようなもの」として説明できるらしい。

このことについては書籍『シリウス革命』では以下のように書かれていた。

(コ=コウセン、オ=オコット)

コ 人間が愛と呼んでいるものとは一体何なのですか。

オ ヨウシのことですね。それはプレアデスの内面に働く中心的な位置のことです。

コ ヨウシ?……………ヨウシというのは、あの原子を構成する陽子のことですか。

オ はい、そうです。

コ ちょっと待って下さい。陽子とは物質を作っているものですよ。それが愛とどのような関係を持っているとおっしゃるのですか。

オ 陽子とは同化の次元に向けられた方向性のことから、あなたがたが愛と呼んでいるものと全く同じものだと思いますが……………。

コ 同化の次元……………どういうことですか。

オ 陽子とは、あなたがたが自己と他者と呼んでいるものの意識が、同一のものとなる、最初の場合であるという意味です。

後半の方では、以下のように書かれていた。

コ 次元観察子 $\psi 5$ (自己)と $\psi 6$ (他者)が対化として認識できるようになると、今度は次の $\psi 7$ の段階に入るのですか。

オ はい、そうです。 $\psi 5$ と $\psi 6$ の顕在化が起これば、今度は位置の変換の次元に入ります。

コ 以前、言われたように、その次元が、愛の息づいている空間になるのですね。

オ そうですね、人間の対化が最初に同一化を起こす部分……………陽子が存在しているところです。

書籍『人類が神を見る日』では以下のように書かれていた。

オコットが次元観察子 $\psi 7$ の球精神＝陽子のことを「愛のようなもの」と呼んだのも、物質が創造されるそのスタート地点には、自他の眼差しを共有し合う間主観的な倫理性の存在が不可欠とされるからなのだろう。

このように、ニューソロジーには「陽子は愛のようなもの」という文言があり、その陽子は原子を構成する陽子のことを言っているわけである。

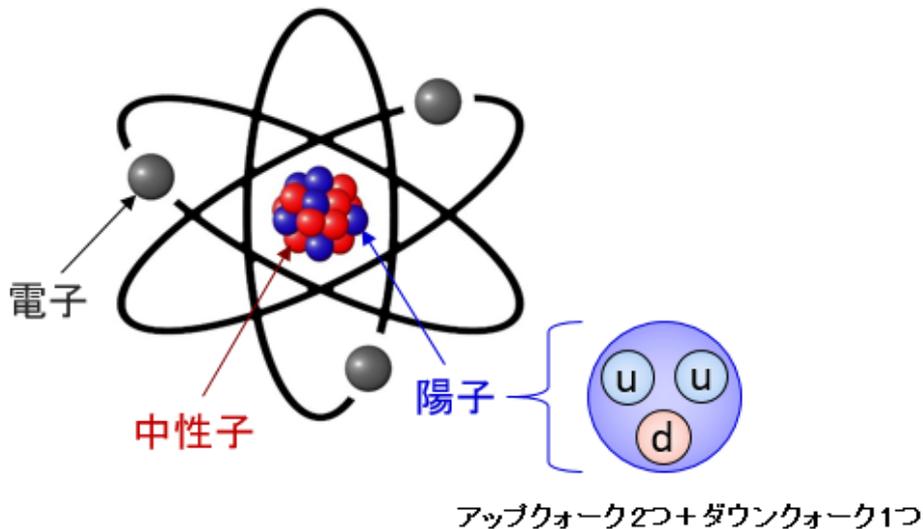
ここで、物理的な陽子の特徴をおさらいすると……………

まずは原子核にあること。電荷的にプラスなこと。中性子とセットになってること。水素原子の場合は陽子と電子のみで構成されていること。陽子の数はどの種類の原子かによって違って、陽子の数が原子の種類(原子番号)が決まること。

また、素粒子との関係だと、素粒子の一種であるクォークでできていて、アップクォーク2つとダウンクォーク1つで構成されていること。

……………などである。

## よくある原子の模型



そんな陽子は『次元観察子 $\psi$ 7』に対応していて、一方でそれに対する中性子は『次元観察子 $\psi$ 8』に対応していることを覚えておこう。

意識の話をしている中で、あの原子核の中にあるとされる陽子が出てくる・・・なんとも不思議な話になっていくわけだが・・・

そもそも、光を構成する光子や、光子が媒介する電磁気力などもまた、実はこれまで説明した『次元観察子』の話と関係してくる。

「素粒子の正体は、我々の意識だった。」というのがニューソロジーの話だったため、この辺りの構造も人間の意識のなにかしらを表しているわけである。

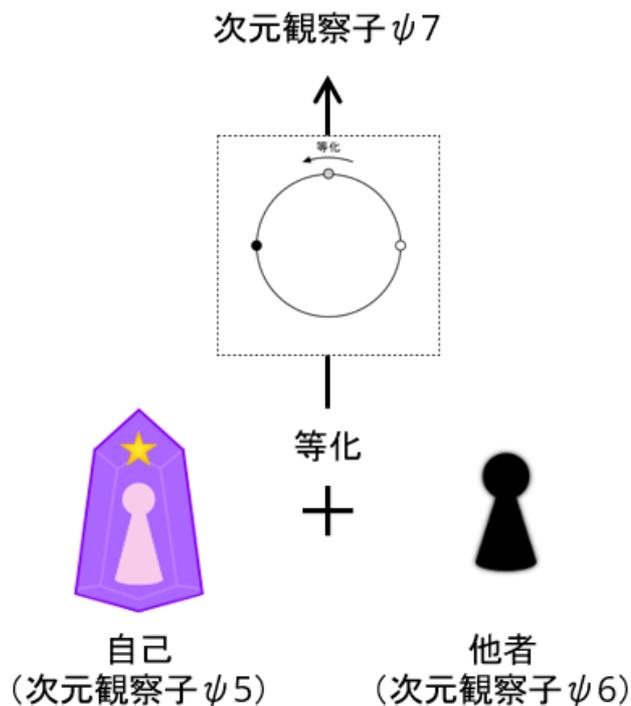
そして、陽子の創造は原子、もとい物質の創造の大元にもなるため、『次元観察子 $\psi$ 7』の顕在化によって、ニューソロジーで「モノ」と呼ばれる存在に入り込んでくることになる。

・・・この辺りがニューソロジーの掲げる「高次元」のイメージになるのだが・・・これまた一層抽象的で壮大な話になってくる。

### ■ 次元観察子 $\psi$ 7 のゴール

『次元観察子 $\psi$ 7』を理解する道におけるゴールは何になるのか？

まず、基本となるゴールは、それぞれ $\psi$ 5と $\psi$ 6に該当する自己と他者の『等化』である。



これまでの知識・感覚を総括してそれが分かるだろうか？

書籍『シリウス革命』では以下のように書かれていた。

- コ 「位置の等化」と「位置の中和」の空間はもうだいぶ見えだしたのですが、これら二つの空間を等化する空間とは、どのような空間と考えればよいのでしょうか。
- オ 「 $\psi 5$ と $\psi 6$ が等化される」という意味をよく考えて下さい。この両者が、空間構造においては、互いに表裏の関係にあるということは、もうお分かりですね。
- コ はい。

それから、前提として『52. 「不動の自分」を掴む感覚』の項で説明したように、『次元観察子 $\psi 5$ 』は「**不動の自分**」が分かる次元だった。

ここで、 $\psi 5$ が「不動の自分」である状態において、『等化』してその次の段階に行くために必要な存在はなんなのか？

**それが「モノ」なのである。**

『次元観察子 $\psi 7$ 』は、「モノ」こそが自己と他者を『等化』する存在であると理解することがゴールにある。

そうした「モノ」の存在に気づくと・・・そこからさらに「モノになる」の次元へ到達する。

そして、「モノになる」はニューソロジーの一旦の最終目標に該当するのである。

・・・もちろん、さらにその先の高次元の話もあるが・・・

「モノになる」ことからそれより高次元のシリウスの意識へ本格的に入っていくことになるため、シリウス以上の高次元をよく理解するには「モノになる」の入口を通過しないとイケない。  
そのため、人間から「モノになる」の状態まで行くことは、人間視点におけるヌーソロジーの最終目標だと言えるだろう。

そんなわけで、『次元観察子ψ7』に関しては、そうしたラスボスに挑む気持ちで挑んでも良いと思う。  
クリア後の世界があるとはいえ・・・一旦はラスボス撃破である。

## 64. $\psi 7$ を認識するために(前編)

これまで、『次元観察子 $\psi 3$ 』や『次元観察子 $\psi 5$ 』を認識する方法について詳しく説明してきたように、『次元観察子 $\psi 7$ 』を具体的に認識する方法についてもこれから説明していこう。

しかし、はじめにことわっておくと・・・

$\psi 7$ の説明はこれまでほどじっくりとはやらないことにする。

理由は2つある。

これまでのレベルで説明するとまた大変な長さになってしまうのと・・・

ここに載っているテキストは無料テキストであるので、無料テキストでそこまで詳しくやるのも大変だからである。

とはいえ、『次元観察子 $\psi 7$ 』を理解するのに十分な情報と思われる重要な点は書いておくので、要点となる所を駆け足で書いていくように説明していこうと思う。

### ■ 次元観察子 $\psi 5$ から前にある一本の線

まず、『次元観察子 $\psi 5$ 』は以下のようなイメージだった。



次元観察子 $\psi 5$   
 $\pm\infty$

これが認識できた場合、さらにその自己からの「前」があり、その奥行きは線のようにになっている。

自己



±∞



この「奥行きのある線」は球を線へと畳み込むように存在し、当人にとっては目の前にある一点として存在する。

このように、まずは「 $\psi 5$  からの前」「 $\psi 5$  から前方向にある線」があることを意識するようにしよう。

### ■ 背中合わせの自己と他者

さらに、『次元観察子 $\psi 7$ 』に関係したキーワードは「背中合わせの自己と他者」である。

このキーワードは書籍『人類が神を見る日』に書かれていた。

自己と他者とは進化の方向へ反転した空間においては背中と背中がくっつき合った同一のアダムなのである。そして、このことを発見することが「かごの中の鳥」を真の自由空間へ飛翔させるのだ。

これは、日本の有名な歌である『かごめかごめ』と、その歌詞の謎について言及している中でされた話で、その歌詞の中にある「かごの中の鳥」について言及している。

ここに書かれている「自己と他者の背中と背中がくっつき合った同一のアダムとなってる状態」が「背中合わせの自己と他者」を意味する。



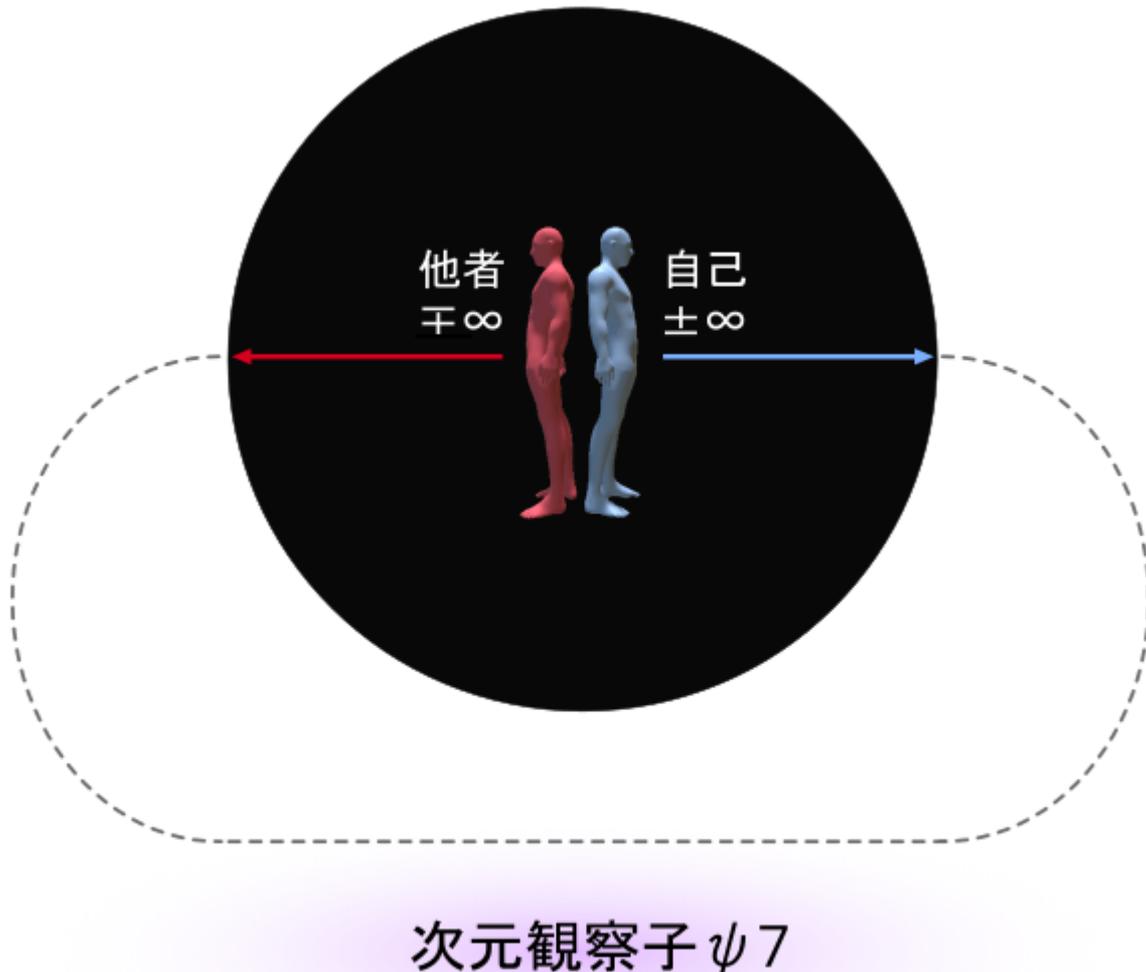
この図にあるように、自己が前方へ向いているのに対し、他者が後方に向いている関係性が $\psi 7$ において重要であり、 $\psi 5$ と $\psi 6$ を『等化』する際はこのカタチになっているのである。

言い換えるならば、普通の人には「前方向で関係性を作る」みたいな意識でいるが、 $\psi 7$ の場合はそれが逆転して「後ろ方向で関係性を作る」みたいなのが大事になるわけである。

この「背中合わせの自己と他者」は『次元観察子 $\psi 7$ 』の基本であり、ニューソロジーで肝となる所でもあるため、覚えておこう。

### ■ 繋がった所がゴール

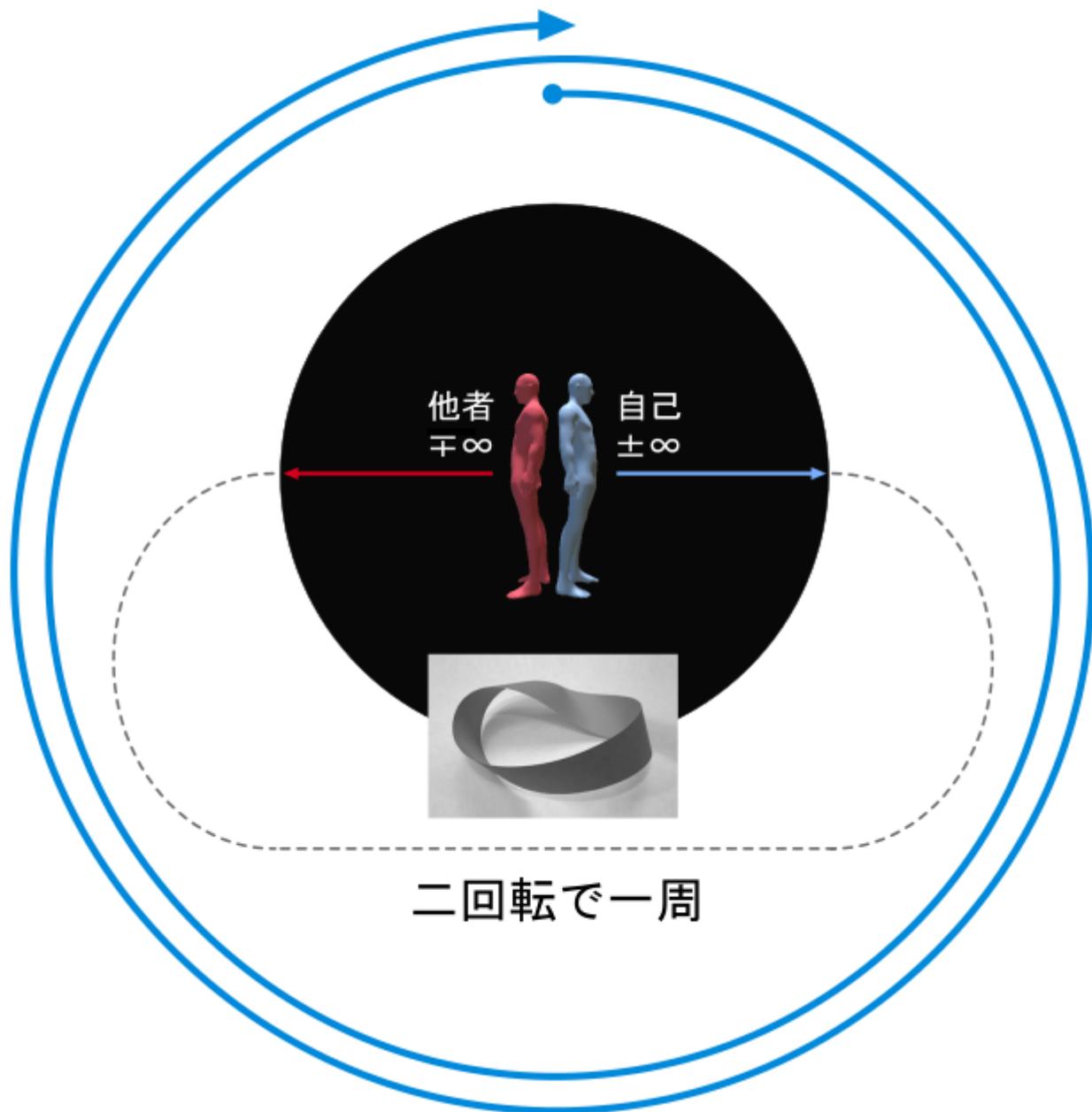
それから、『次元観察子 $\psi 7$ 』にある「背中合わせの自己と他者」では、自己から出ている線と他者から出ている線の先が繋がるようになっている。



また、『等化』の際に「回転」が存在していた『次元観察子 $\psi 5$ 』の時と同様で、ここで『等化』が起きる時にも回転が存在している。

さらに付け加えると、この時の回転は「スピノール」という、二回転(720度)で一周して元に戻る仕組みになっているらしい。

これは「メビウスの帯」の仕組みも同様である。



この意味が分かるだろうか？

スピノールは物理学で出てくる概念なため、この辺は物理学絡みになる話で難しいかもしれないが・・・  
その概念についてを覚えておこう。

以上。

一通り説明してきたが・・・

ここまでを前編として、**続きは後編**としよう。

## 65. $\psi 7$ を認識するために(後編)

「前編」だった前回に引き続き、『次元観察子 $\psi 7$ 』の具体的な認識方法についてを説明していく。

### ■ 自己の無数化

まず、『等化』の基本は「回転」と「無数化」である。

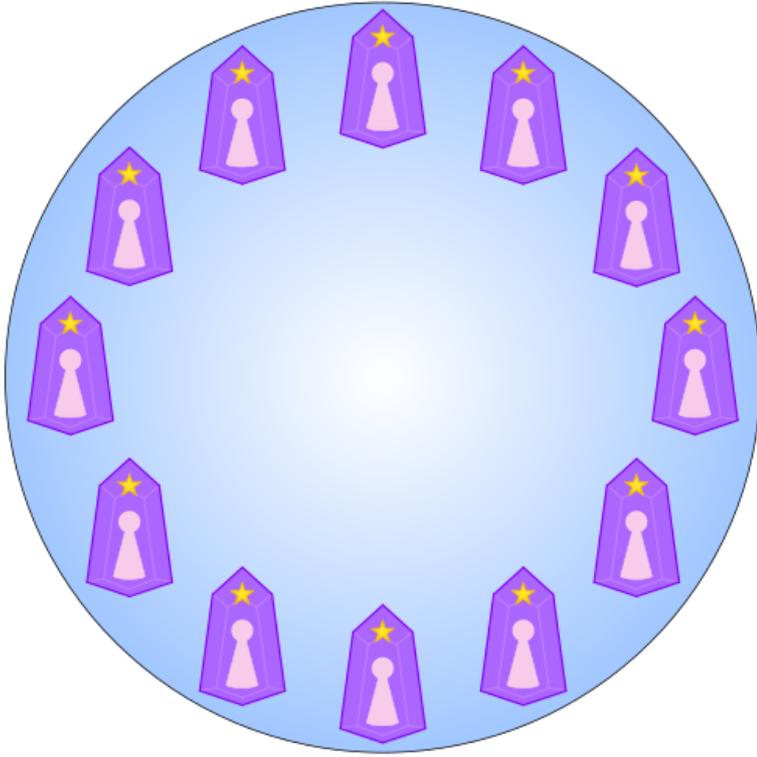
これは『次元観察子 $\psi 5$ 』の時もそうだったし、『次元観察子 $\psi 7$ 』の時もそうである。

$\psi 5$  の時は、 $\psi 3$  を構成する「主体」が無数にあった。



次元観察子 $\psi 5$   
 $\pm \infty$

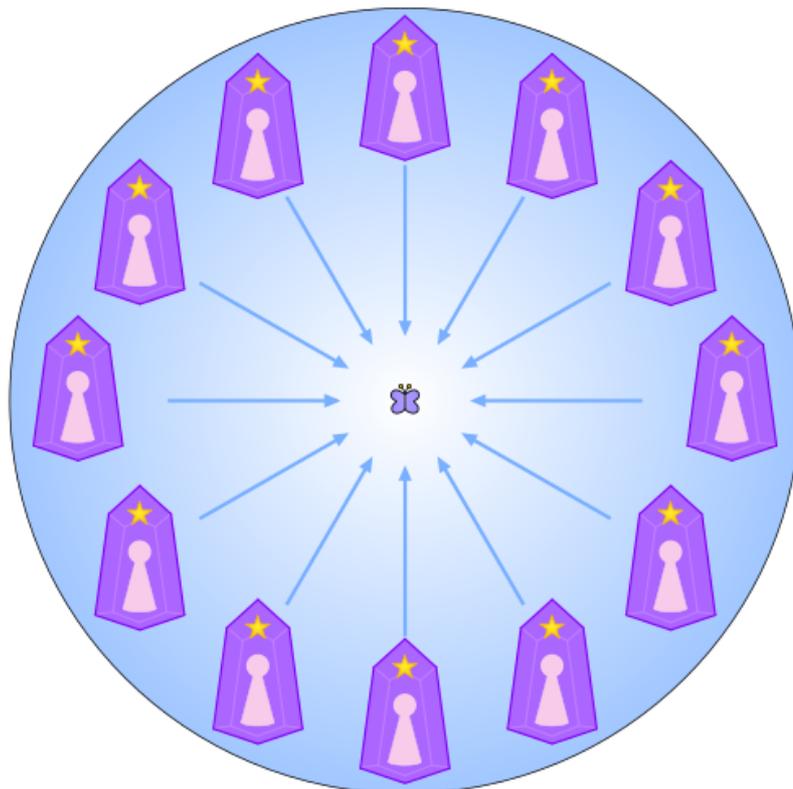
ということは・・・ $\psi 7$  は $\psi 5$  を構成する「自己」が無数にあるイメージで良いのではないだろうか？



また、それら無数の自己にはそれぞれの「前」があり、その真ん中に「モノ」がある仕組みになる。

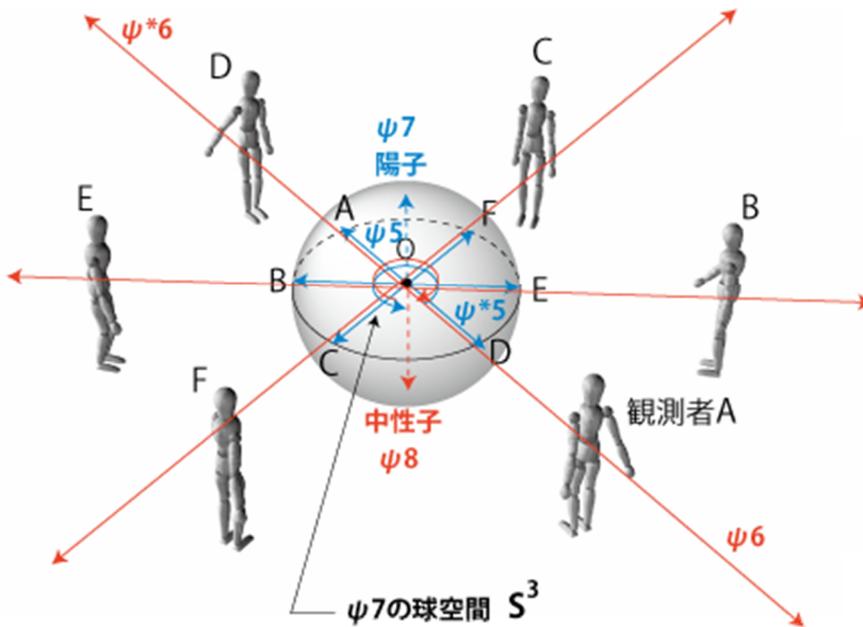
そのため、ここで「モノ」がある位置に存在するのが『次元観察子 $\psi$ 7』に該当する。

## 🦋 モノ



ヌーソロジー公式では、以下のような図で説明されている。

図1 無数の観測者における前と後が作る二重の空間



[リンク：時間と別れるための50の方法(52) - cave syndrome]

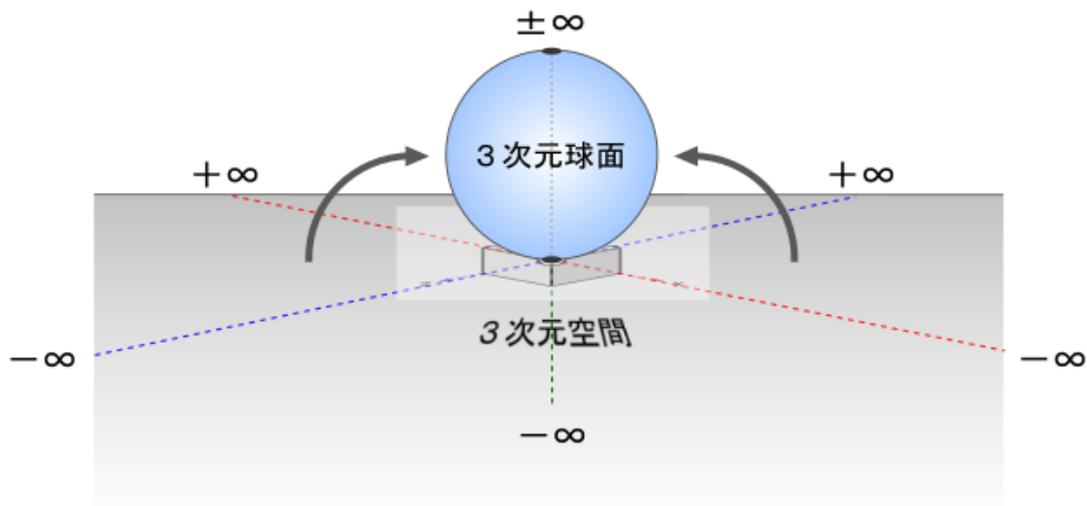
それから、この時に生じる「球」が重要であり、『次元観察子 $\psi_7$ 』のことはヌーソロジー用語で『球精神』とも呼ばれている。

おさらいすると、 $\psi_3$ は『垂子』→ $\psi_5$ は『垂質』→ $\psi_7$ は『球精神』・・・といった構造になっているため、それぞれのキーワードを覚えておこう。

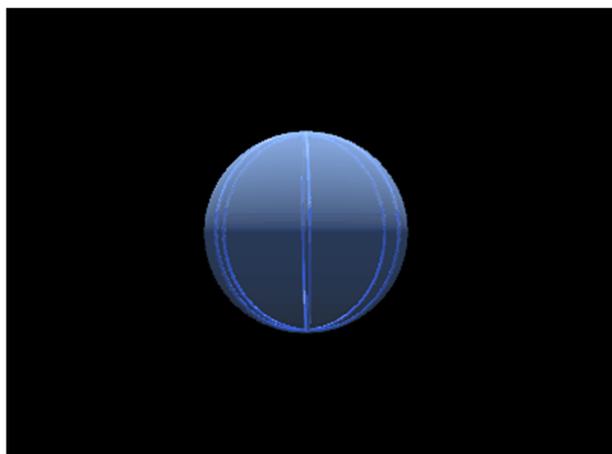
### ■ 自己球体の無数化

次に、自己が無数化する様子を試しにアニメーションで作ってみよう。

自己には以下のような3次元球面があるとする。

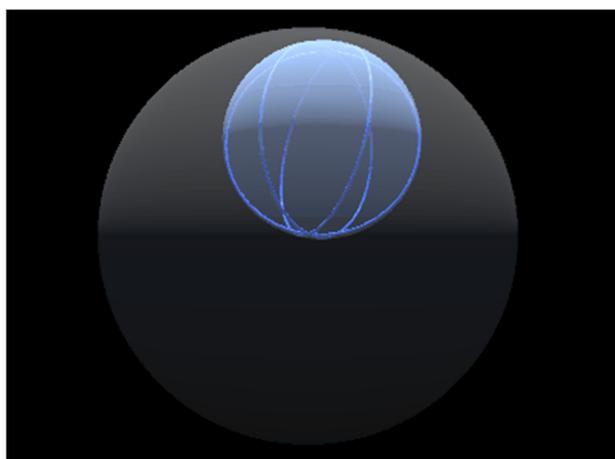


3次元球面はこうしてみるとただの球だが、3次元空間からの次元上昇のため「回転」を含んでいることを踏まえておこう。



〔アニメーション：球体がy軸を中心に回転している〕

それを無数化して、また一つの球にまとめてみる。



〔アニメーション：球体が色んな位置へランダムに移動している〕

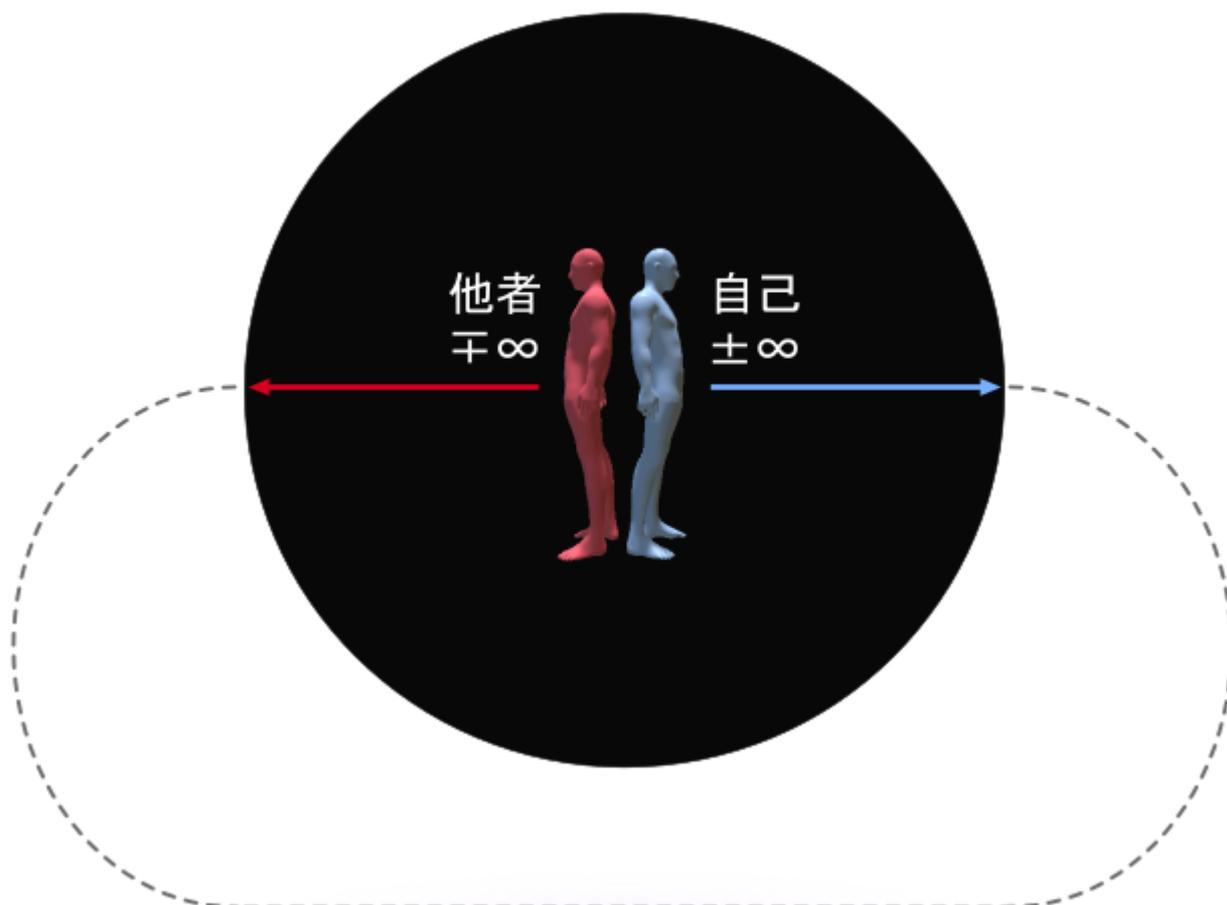
この無数化表現はあくまで**比喩**だが・・・

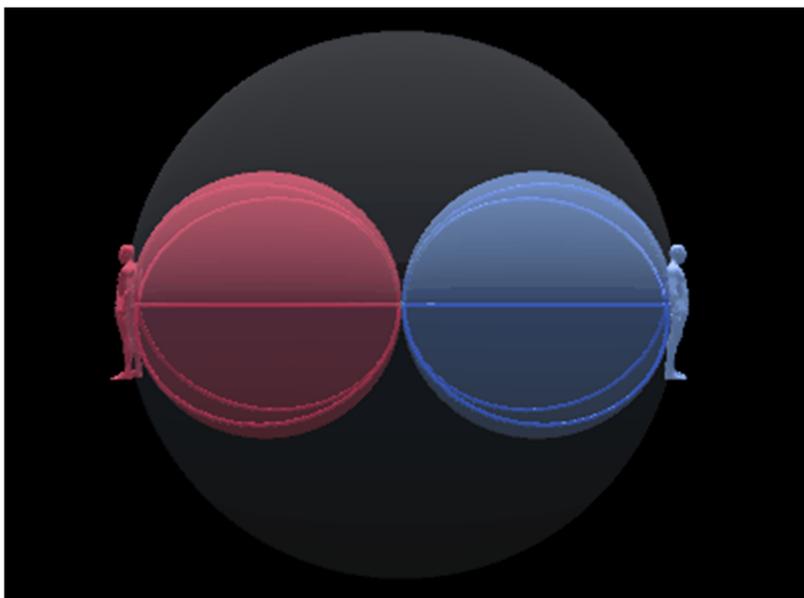
これを「**無数の状態を重ね合わせて持っている**」というように捉えることができると良い。

このように、「無数化した自己」がモノになっている時の意識が、 $\psi$ の位置になるわけである。

### ■ 背中合わせの状態からの回転

最後に、前回説明した「**背中合わせの自己と他者**」と自己球体の回転のアニメーションを組み合わせる。





〔アニメーション：赤い球体と青い球体が回転している〕

〔動画：【ノーソロジー動画】「背中合わせの自己と他者」回転アニメーション〕

このアニメーションは非常に奥が深い。

この意味が分かるだろうか？

ちなみにこれは『2009-2010年ニュースレクチャーDVD Vol. 7』で説明された表現の再現である。

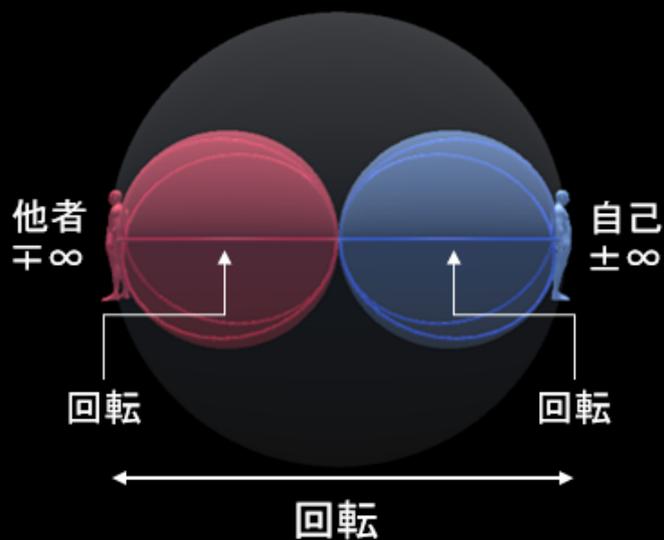


disk1: メビウスの帯と次元観察子 / disk2: 元止揚空間の幾何学

簡単に説明すると、自己と他者があって、青い球は自己側にある3次元球面であり、赤い球は他者側にある球である。

それがさらに回転していて、双方を『等化』するようになっている。

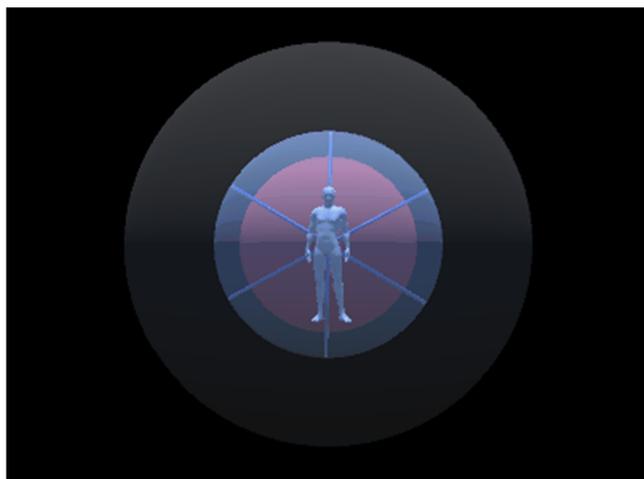
## 自己と他者の等化 ⇒ モノ



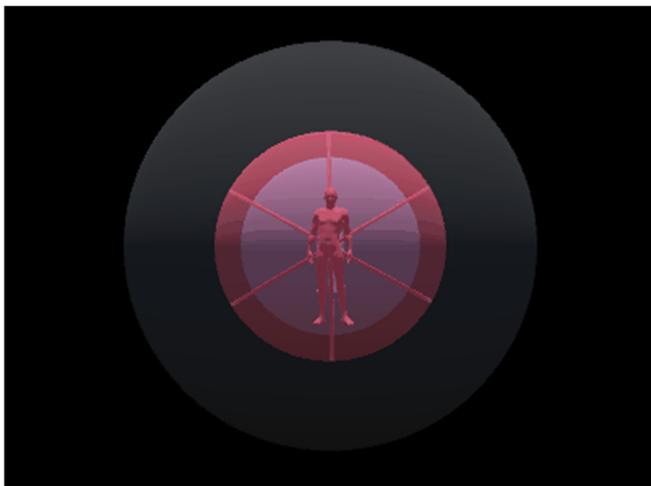
こうした構造から、ヌーソロジーで「モノ」と呼ばれる存在が生まれるわけである。

また、ここで自己側と他者側の回転方向について注目してみると・・・

自己の後ろについている球は左回転、他者の後ろについている球は右回転になっている。



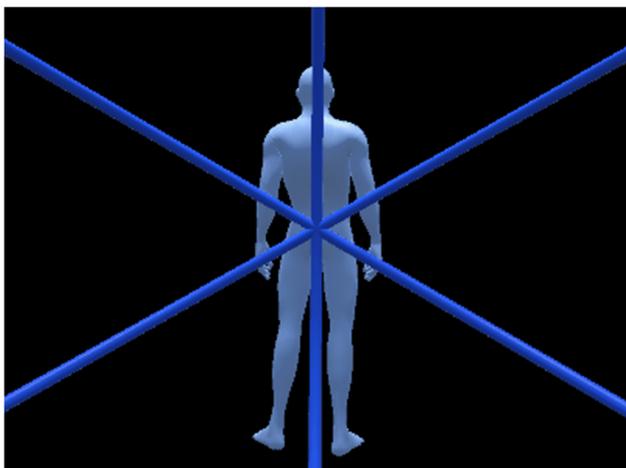
[アニメーション：青い球が左回転している]



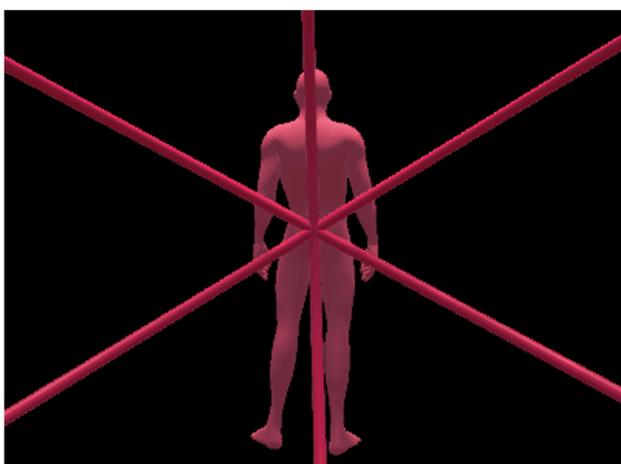
〔アニメーション：赤い球が右回転している〕

ただし、球の中心より逆を向いてる自己自身と他者自身から見た場合、自己には右回転があつて他者には左回転がある。

（ちなみにこれは、仏教で悟りや吉祥の象徴として用いられている「卍」と、ナチスが政治的プロパガンダとして使った「ハーケンクロイツ」の形ともそれぞれ一致する）



〔アニメーション：3本の線が右回転している〕



〔アニメーション：3本の線が左回転している〕

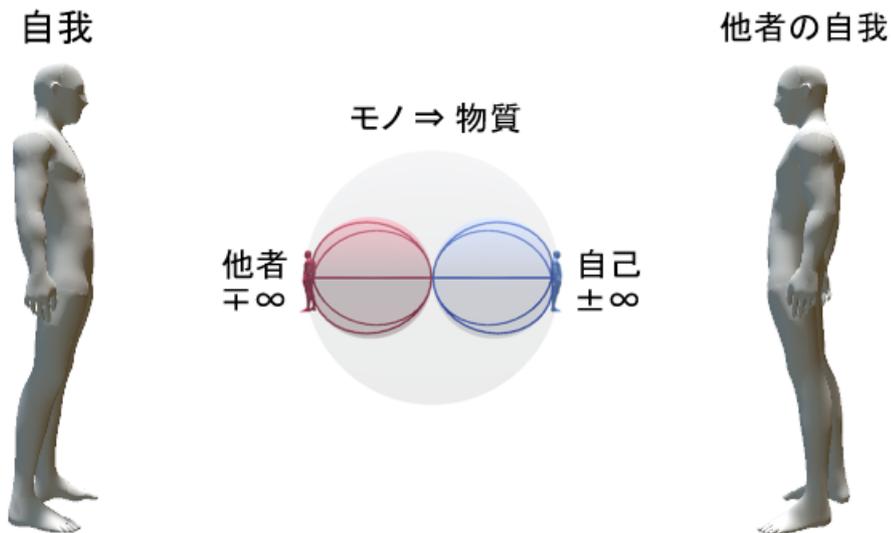
自己側には右回転があって、他者側には左回転がある！

逆方向から見るとそれらは逆の回転に見える！

この回転方向も重要なキーポイントなため、覚えておこう。

そして、この「自己×他者」の構造からニューソロジー的な「モノ」が生じるわけだが、この構造をもっと外側から見ていった場合・・・

通常の間人型ゲシュタルトを持った「自我」からそれを見ると、それはただの物質として見えるようになっている。



この意味も分かるだろうか？

この辺りの構造は『次元観察子ψ7』の核心的な所なので、これが理解できるようになると良いと思う。

・・・以上。

『次元観察子ψ7』の構造のポイントとなる所をざっくりと説明してきた。

これらはまだまだ深掘りできる話だが・・・

これだけのポイントでも大体の理解はできると思う。

$\psi 13$ ( $\psi 14$ )	人間の観察精神(とその反映)	変換質
$\psi 11$ - $\psi 12$	人間の定質と性質	中性質
$\psi 9$ - $\psi 10$	人間の思形と感性	調整質
$\psi 7$ - $\psi 8$	意識進化と時空	} 元止揚
$\psi 5$ - $\psi 6$	自己と他者	
$\psi 3$ - $\psi 4$	主体と客体	
$\psi 1$ - $\psi 2$	空間と時間(またはミクロとマクロ)	

『元止揚』における最終到達地点である『次元観察子 $\psi 7$ 』は、自己と他者の『等化』や、『位置の変換』といったワードが出てくるものだが・・・その意味はかなり深い・・・

人間の世界より大分離れた、本格的な高次元の世界への入り口となっている。

『次元観察子 $\psi 7$ 』が分かった時の意識は、『次元観察子 $\psi 3$ 』が分かった時のインパクトや、『次元観察子 $\psi 5$ 』が分かった時のインパクトよりもまた強烈かもしれない。一層違ったものになるだろう。

$\psi 7$ に絡んでくる「自己と他者の等化」は、その意識進化の中で無数の他者をも巻き込んでいくものになるかもしれないし、「モノの創造」もまた壮大な意味を含んでいることである。

それは神々をも巻き込んだ壮大な話になるかもしれないため、そんな感覚もやってくるかもしれない・・・

## 66. 木星の力と、グローバリズムを巡る人間のイデオロギー

これまで構造の話をしてきたので、今度はまたそのイメージに絡んだ話をしてみよう。

例えば、『次元観察子 $\psi 6$ 』は他者や社会に対しては影響を与えるパワーが強いものなため、分かりやすいパワーを持っているイメージになる。

対して、『次元観察子 $\psi 5$ 』は「自己」の方向性のものである。これは植物のように安らかなイメージに近いかもしれないが、他者や社会に対して影響を与えるパワーには欠ける。

そして、 $\psi 5$ と $\psi 6$ を『等化』した『次元観察子 $\psi 7$ 』は、 $\psi 5$ のように自己へと根つきながらも、 $\psi 6$ のように他者や社会に対して影響を与えるパワーを持っているのではないだろうか？

そして、それはどんなイメージのものになるのだろうか？

そのイメージを探るべく・・・まずは『凝縮化』という概念について説明する。

### ■ 凝縮化の構造と上位次元

ヌーソロジーには『凝縮化』と呼ばれる概念がある。

これは「冥王星のオコツト」が発言したヌーソロジー用語である。

以下、半田広宣さんのブログ記事『時間と別れるための50の方法』から引用する。

タカヒマラという精神構造体には、この顕在化した次元観察子群が凝縮化を起こすことによって、次の次元（他者側の次元である $\psi^*$ 側）の元止揚空間を形作る力となっていくような仕組みが存在しています。

$\psi 7 \sim \psi 8$  .....→  $\psi^*1 \sim \psi^*2$  へ凝縮化

$\psi 9 \sim \psi 10$  .....→  $\psi^*3 \sim \psi^*4$  へ凝縮化

$\psi 11 \sim \psi 12$  .....→  $\psi^*5 \sim \psi^*6$  へ凝縮化

$\psi 13 \sim \psi 14$  .....→  $\psi^*7 \sim \psi^*8$  へ凝縮化

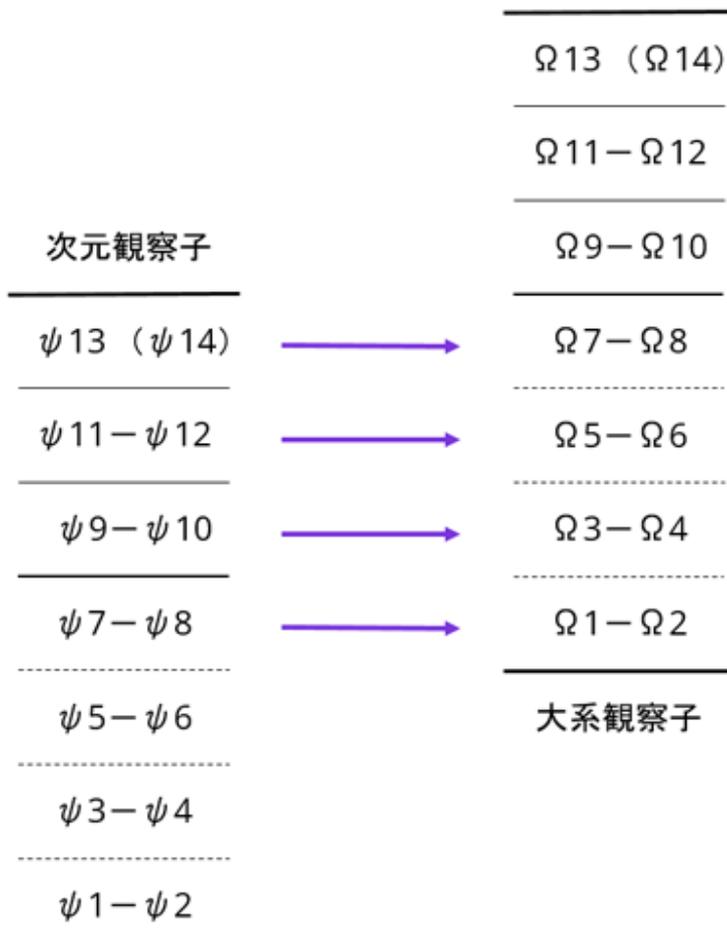
[リンク：時間と別れるための50の方法（60） - cave syndrome]

先ほどの引用にあったように、端的に説明すると $\psi 7 \rightarrow \psi^*1$ になるのが『凝縮化』である。

また、これは『次元観察子 $\psi 7$ 』から、『大系観察子』の $\Omega 1$ になることにも絡んでいる。

潜在化と顕在化の関係は、意識振動における1オクターブ上の倍音共鳴のようなものである。顕在化における $\psi 7 \sim \psi 8$ はそのまま大系観察子 $\Omega 1 \sim \Omega 2$ を構成し、 $\Omega 1 \sim \Omega 2$ は次の次元形成において $\psi^*1 \sim \psi^*2$ へと凝縮化を行なう（反対側=他者側に回り込むという意味）

要するに、以下の図のような構成になっている。



この仕組みは何を意味するのだろうか？

ヌーソロジーにおける『凝縮化』は、つきつめるとかなり複雑で難しい概念なため、その詳細について書いていくと長い話になってしまうが・・・

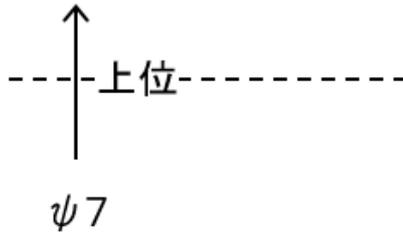
ひとまず、ここで押さえておくべきことは・・・

$\psi 7$  は  $\psi * 13$  の凝縮化であるため、その上位には  $\psi 13$  があるということである。

さらに、 $\psi 13$  は  $\Omega 7$  を構成するものでもある。

・・・ということは、 $\psi 7$  の上位には  $\psi 13$  があり、それはさらに  $\Omega 7$  と絡んでいることになる。

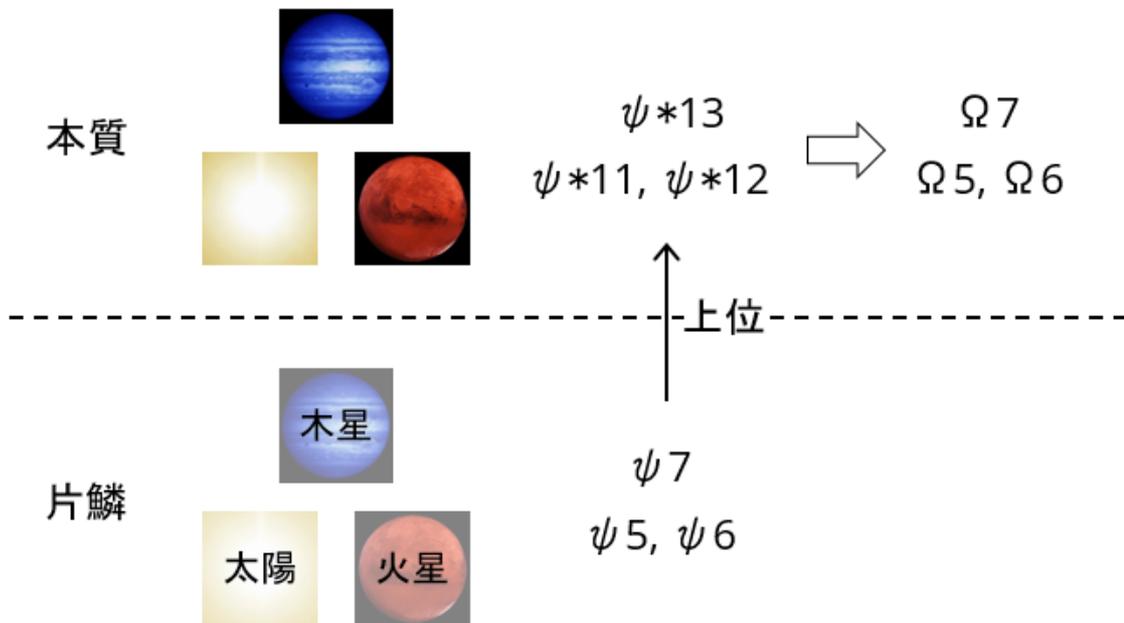
$\psi*13 \Rightarrow \Omega 7$



加えて、 $\psi 7$ が $\Omega 7$ と絡んでいるということは、 $\psi 5$ 、 $\psi 6$ もそれぞれ $\Omega 5$ 、 $\Omega 6$ に絡んでいる。

そこで出てくる『大系観察子』の $\Omega 5$ 、 $\Omega 6$ 、 $\Omega 7$ が、それぞれ「太陽」「火星」「木星」の本質的な力に該当するのである。

対して、『次元観察子』の $\psi 5$ 、 $\psi 6$ 、 $\psi 7$ はその片鱗であるため、図にすると以下のようなになる。



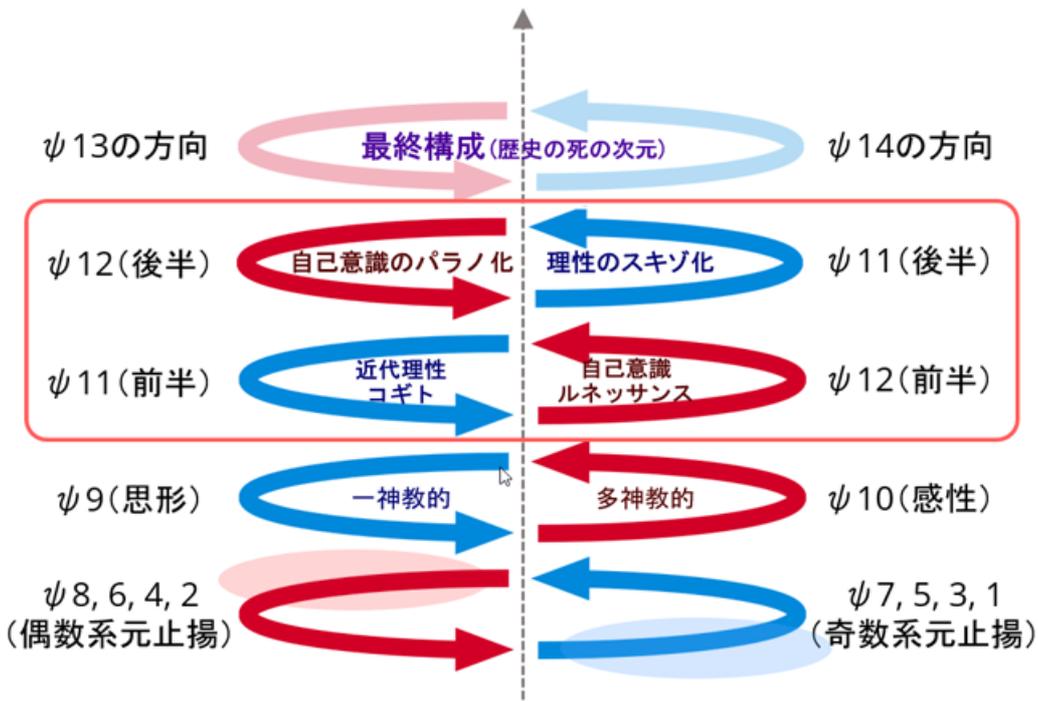
このように、『次元観察子 $\psi 5$ 』 『次元観察子 $\psi 6$ 』 『次元観察子 $\psi 7$ 』 とその上位にあるものとの関係についてをまずは覚えておこう。

### ■ グローバリズムと反グローバリズム

そして、ここで話を『次元観察子』の $\psi 11$ 、 $\psi 12$ 、 $\psi 13$ にフォーカスしていこう。

この次元は個人の話というより、人類史における人類全体の意識の話になるので、壮大な領域である。

ヌーソロジーで読み解く人類史において、『次元観察子 $\psi 11$ 』と『次元観察子 $\psi 12$ 』が出てくるのは、ケイブコンパスにおける以下の図である。

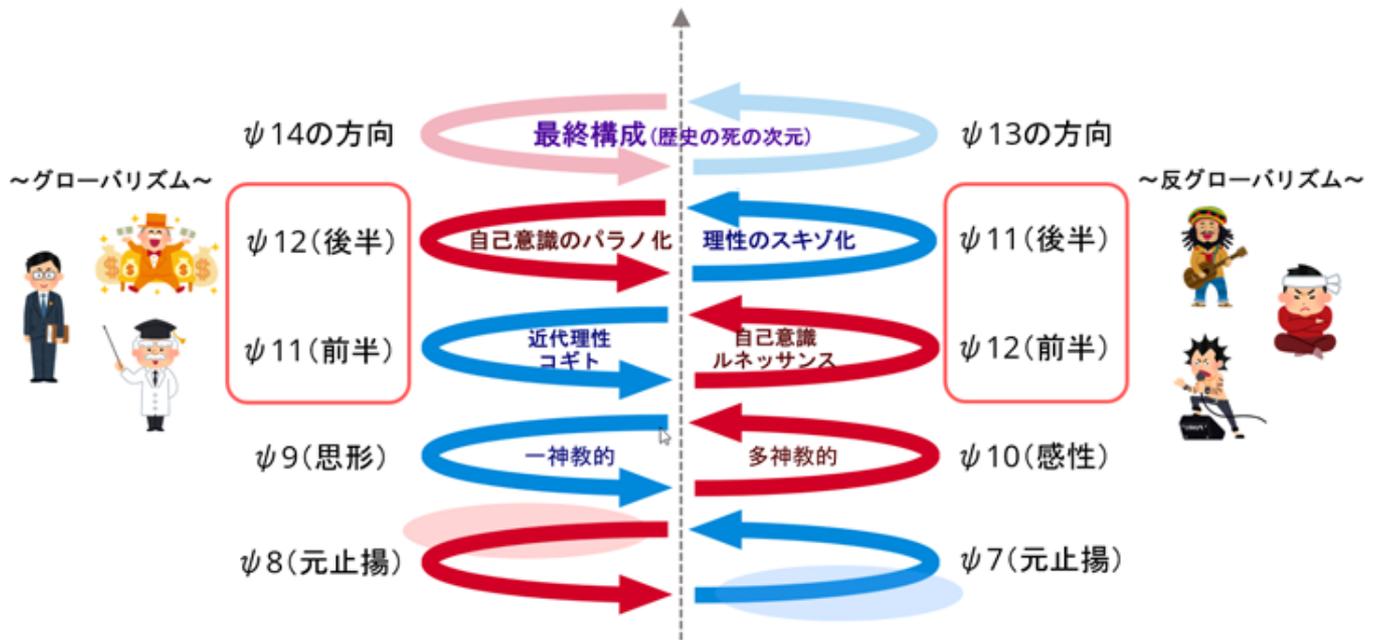


これは人類史の進化において、ヌーソロジーの「 $\psi 9 \sim \psi 10$ 」⇒「 $\psi 11 \sim \psi 12$ 」の意識の移行が表れていることを説明する図である。

この図を詳しく説明すると非常に長い話になる・・・ため、今回は結論だけ説明しよう。

結論から書くと、 $\psi 11 \sim \psi 12$ の段階ではグローバリズムと反グローバリズムの対立が起きている。そして、 $\psi 11$ と $\psi 12$ のどちらがグローバリズムで、どちらが反グローバリズムなのか？の話は少しややこしい。

以下のように、前半と後半に分かれていて、「 $\psi 11$ 前半と $\psi 12$ 後半」がグローバリズム、「 $\psi 12$ 前半と $\psi 11$ 後半」が反グローバリズムに該当する。



さて、そもそも「グローバリズム」とは何だったのか？

Wikipedia や ChatGPT で調べれば、その一般的な意味はすぐに分かると思う。

グローバリズムとは、経済の自由化や規制緩和を進め、貿易や投資を活発化させることで、世界を一体化させようとする思想・政策のことです。グローバリズムは、国境を越えたモノ、人、資本の移動を促進し、世界全体で経済的な利益を追求することを目指しますが、その推進により格差拡大や社会的な問題を引き起こすという批判もあります。

(ChatGPT による説明)

ニューソロジー的にグローバリズムを考えると、「資本主義の欲動+科学的理性」が重要である。「資本主義の欲動」と「科学的理性」・・・この2つこそ、人類の文明の終焉の時代において最も力を持つものであり、ψ11 とψ12 がそれと関係している。

人類史はこれからも続いていくだろうが、人類の文明はこれ以上発展するビジョンが描きづらくなっている。だから「資本主義」と「科学」の2つは文明の最後に出てきたものとして、大きな力を持ち続けているわけである。

だから、ニューソロジー的なグローバリズムとは、「資本主義の欲動+科学的理性」の力を持ったものが世界中に広がることである。

その内容は多様であるかもしれないが、結果的にアメリカが非常にその力を強く持っていたため、アメリカの文化が世界中に広がることになった。

マクドナルドやコカ・コーラが世界中に広がっているのは、それらが「資本主義の欲動+科学的理性」の賜物だからである。端的に説明すると、グローバリズムとはそのような文化が世界中に広がることになっている。

一方で、「反グローバリズム」とは、そのようなグローバリズムに対するアンチテーゼであり、グローバリズムに抗う思想である。

「科学」の反対は「自然」であり、「理性」の反対は「感性」みたいなものである。

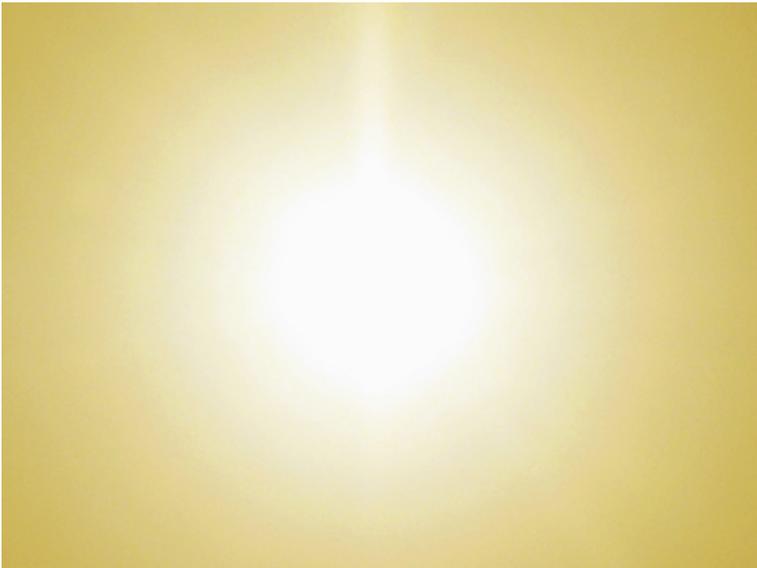
「資本主義の欲動」の反対は、お金儲け至上主義や競争主義とは違った趣向になる。

だから、反グローバリズムと言うと、大体そのようなことを重視する思想になってくる。

アメリカで1960年代に起きたヒッピームーブメントも、反グローバリズムのためのカウンターカルチャーとして非常に大きいものだった。

[リンク：ヒッピー - Wikipedia]

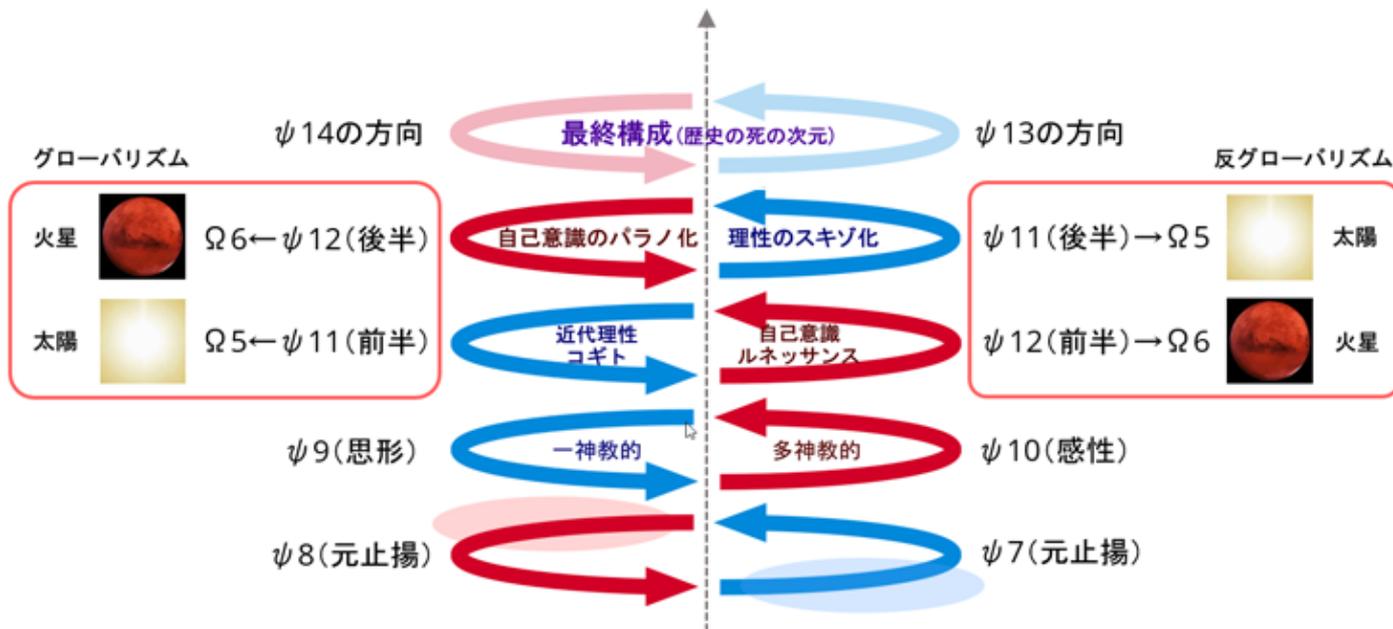
そんなグローバリズムと反グローバリズムは、惑星だと太陽と火星にも関係している。



太陽と火星はこれまで $\psi 5$ と $\psi 6$ に絡んだものとして説明してきたが、これらは本質的には $\Omega 5$ と $\Omega 6$ であるため、捉え方を変えると $\psi 11$ と $\psi 12$ もその力を持っているのである。

$\psi 11$ と $\psi 12$ のどちらがグローバリズムで、どちらが反グローバリズムなのか？の話は少しややこしいため、太陽と火星がそれぞれどっちになるのかも少しややこしい。

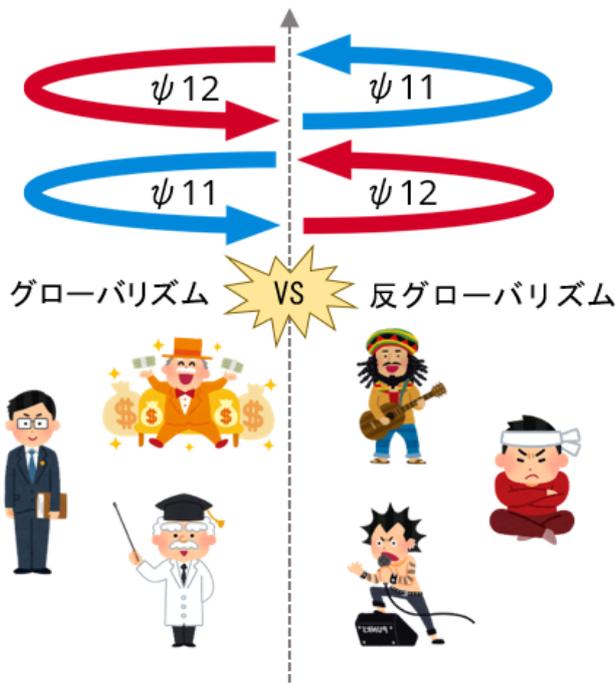
以下のように、前半と後半に分かれてることを考慮すると、前半だと「太陽」がグローバリズムで「火星」が反グローバリズム、後半だと「火星」がグローバリズムで「太陽」が反グローバリズムに該当することになる。



ヌーソロジー的には上記の図の右側は一貫して精神側であり、左側は一貫して物質側である。だから、右側はノウス (NOOS) 側であり、左側はノス (NOS) 側なため、ヌーソロジーは右側にある反グローバリズムの方が重要である。だから、反グローバリズムを良いとして、グローバリズムを悪いとすればそれが正しい。・・・とは決してならないため、注意が必要である。

### ■ グローバリズムと反グローバリズムの争い

現代は資本主義の終焉みたいな状況であり、そうした中でグローバリズムと反グローバリズムの対立が激しく行われることがよくある。



ここにおいては、グローバリズムが善で反グローバリズムを悪とするイデオロギーが争いを加速させるのはもちろんだが、反グローバリズムが善でグローバリズムを悪とするイデオロギーも同様に争いを加速させる。

そうした強力な善悪感、ニューソロジーにおける『等化』の天敵となるような「善悪二元論」であり、のめり込み過ぎると「他者化」も加速してしまう。

そのような価値観では永遠にグローバリズムと反グローバリズムが争う次元にずっといることになるだろう。

ニューソロジー的に『等化』を目的とするならば、それを脱しないといけないわけである。

もちろん、争うのが好きな人は、グローバリズムと反グローバリズムのどちらかを巨悪とする価値観でいても構わないと思う。

争うのが好きじゃない人を巻き込まない程度に好きなようにすれば良いと思う。

ただ、何度も強調するが、『等化』を目的とする思想の場合はそれでは無理である。

巷でアセンションとか言っている人もそれでは無理である。人間らしい思考を手放すことがアセンションならば、それはニューソロジーにも通じている。恐らく、反グローバリズムが善でグローバリズムが悪とすればそれでアセンションできるから良いと勘違いしているスピリチュアル系の人は多い。

・・・だから、その点は注意しないとイケない。

グローバリズムの中にも反グローバリズムの中にも悪い者はいるし、良い者もいると普通に考えれば良いのではないだろうか？

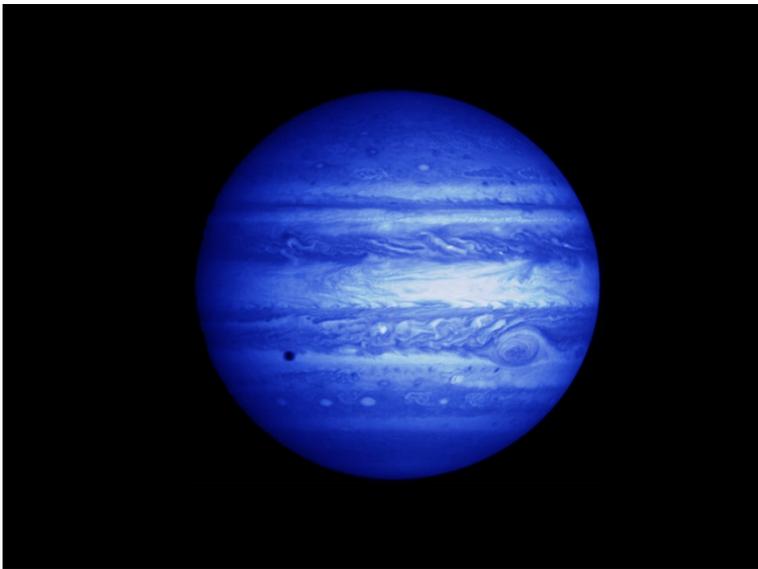
あるいは、それらは双方が「回転」しているように、それぞれがそれぞれの機能を果たしているように捉えれば良いのではないだろうか？

ニューソロジーが示す構造に表れているものも、そうした物事の捉え方に近いと思う。

## ■ グローバリズムと反グローバリズムを等化するもの

グローバリズムと反グローバリズムの争いがある一方で、さらにそれを超越した存在が『次元観察子 $\psi$ 13』である。

これを『大系観察子 $\Omega$ 7』の力とすると、木星の力の本質ということになる。



木星は西洋占星術では「成功、膨張、拡大、幸運、哲学」などの意味を持つ。

ヌーソロジー的には、これは $\psi$ 11 と  $\psi$ 12 にある両者を『等化』する力を持つものに該当する。

そのため、結果的に下位の次元にある争いを止めたり、治めたりする力を持っているだろう。

また、ヌーソロジーでは「日本精神」が重要視されている。

「冥王星のオコツト」がそもそも日本から発した存在であるからか、オコツトの存在自体から日本の文化や日本の神話と親和性が感じられるし、オコツト自身も日本についてを重視している。

ヌーソロジー的な日本精神とは、日本語を扱う者の精神である。そもそも「日本語」は他の言語と違った特別な力を持っているとオコツトが言っていた。

日本語は「表音文字」の一種で、オノマトペが豊富な言語である。それは言葉に対して記号的に意味が割り当てられているだけでなく、文字の響きそのものに意味が含まれていることがある。

そうした文字には「言霊」が宿るとされるため、日本の和歌などは、言霊を意識して作られたかのようなものが多い。

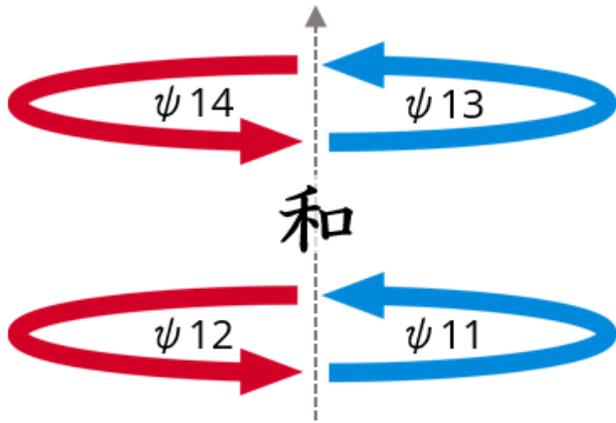
だから、日本語を扱うことで、文字のように記号的・機械的なものに対して、精神的・霊的な力を感じることができる。

そこから想起されて発展するものが、日本精神である。

そして、こうした日本精神もまた、木星の力に近いのではないだろうか？

端的に言うと、木星は $\psi$ 11 と  $\psi$ 12 の次の段階にあるものであり、その次の $\psi$ 13 の力と  $\psi$ 14 の力は、合わせて「和」の力を持っているようなものである。

日本精神とは、そうした「和」の力のようなものなのかもしれない・・・



資本主義の終焉の時代で、グローバリズムと反グローバリズムの対立が激しく行われ、その等化と中和がある中で、重要な役割を持っているのが日本精神なのではないだろうか？

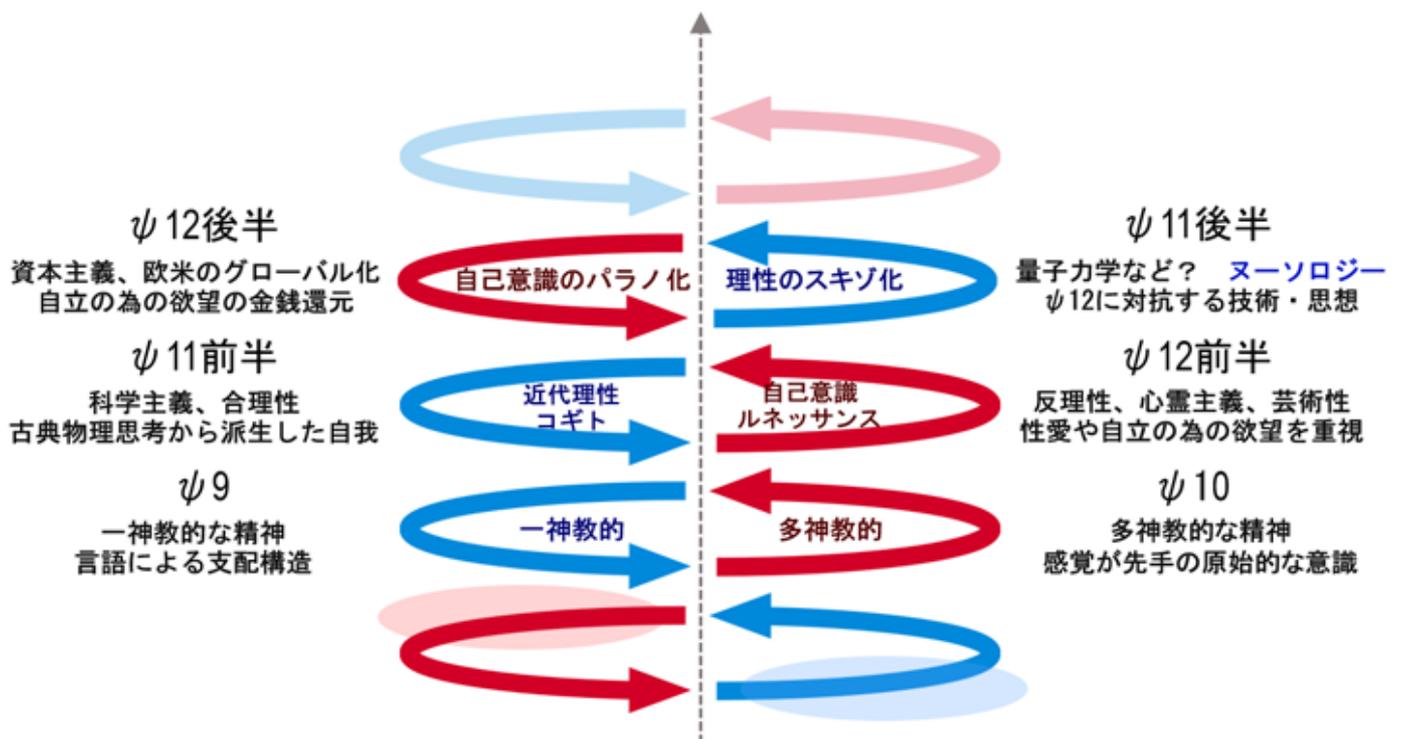
今現在、実際にそういうことが起きているのではないだろうか？

このように、「ψ5・ψ6・ψ7」の関係を拡張して、「ψ11・ψ12・ψ13」の関係について考えると、『次元観察子ψ7』と繋がる木星の力と日本精神についてが分かってくると思う。

### ■ 資本主義の終焉の時代と、人間と神の関係

人類史における『次元観察子ψ11～ψ12』についてと、その次の段階の話は、漫画カルチャーとの関係を絡めて以下でも説明したため、先ほどの図をもう少し詳しく知りたい人はそれを読むと良いと思う。

[リンク：ロックカルチャーからオタクカルチャーへの遷移と、ニューソロジーのψ11～ψ12 とψ13～ψ14 について（前編） - 哲学思考のなれの果て]



そして、『次元観察子ψ7』とそれとの関係を考えていくと・・・非常にスケールの大きい話になってくる。

『次元観察子ψ5』の時も「神とは何か？」がうっすらと分かる次元であったが、『次元観察子ψ7』になるとそれが一層深まる。

ニューロジ的な人間の最終目標である「モノになる」は、それを理解することと自然と繋がるのである。

このことを、知識と認識が一体となったグノーシス (gnosis) で理解することが、そもそものニューロジの目的であった。

さらに、個人としての自己がそれを達成し、自己と他者の『等化』の次元まで行くことは、人類全体にとっても重要な意味がある。

もし、人間がそうした知性を獲得すれば、グローバリズムと反グローバリズムが争う人間の次元から脱却し、戦争のような争いごとはしなくて済むようになるだろう。

それから、物質主義に対抗するスピリチュアル性を持ちつつ、科学を使いこなすことができるようになるため、自然に対する向き合い方も大きく変わることになるかもしれない。

神と人間の理想の関係を考えると、人類はそうした方向へ行くべきなのではないだろうか？

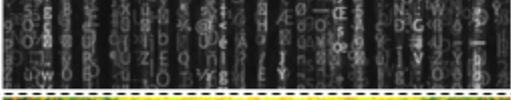
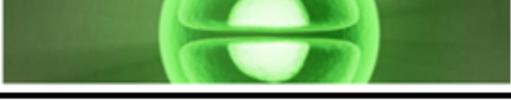
ニューロジをつきつめていくと、そんな壮大な話にも繋がっていくわけである。

## 67. 「次元観察子 $\psi 8$ 」について

『次元観察子  $\psi 7$ 』についての説明は前回で終了である。

$\psi 7$ の次は何をやるのか？

もちろん、『次元観察子  $\psi 8$ 』についてである。

	$\psi 1 \sim \psi 2$	第一層	
	$\psi 3 \sim \psi 4$	第二層	
	$\psi 5 \sim \psi 6$	第三層	
	$\psi 7 \sim \psi 8$	第四層	←
	$\psi 9 \sim \psi 10$	第五層	
	$\psi 11 \sim \psi 12$	第六層	
	$\psi 13 \sim \psi 14$	第七層	

これまでも  $\psi 3$  に対して  $\psi 4$  があり、 $\psi 5$  に対して  $\psi 6$  があった。

毎度のことながら、 $\psi 7$  が『負荷』であることに対して、『反映』に該当するものが  $\psi 8$  である。

また、 $\psi 7$  を『等化』とした場合、それに対して『中和』に該当するものが  $\psi 8$  でもある。

自己 ( $\psi 5$ ) と他者 ( $\psi 6$ ) を繋ぐ次元にある点に関しては  $\psi 7$  と  $\psi 8$  は同様であるが、 $\psi 7$  は自己と他者に対して『等化』という繋ぎ方をするのにに対して、 $\psi 8$  は『中和』という繋ぎ方をする。

「自己と他者を『中和』で繋ぐもの」とは、端的に言うと「自己と他者が共有する意識」みたいなものである。

それを分かりやすく説明するために・・・

まずは「自己と他者が共有している意識は何なのか？」について考えてみよう。

### ■ 自己と他者が共有している意識は何なのか？

まずシンプルに、自己と他者がいるとしよう。

この両者が共有する意識は、何が考えられるだろうか？

自己



他者

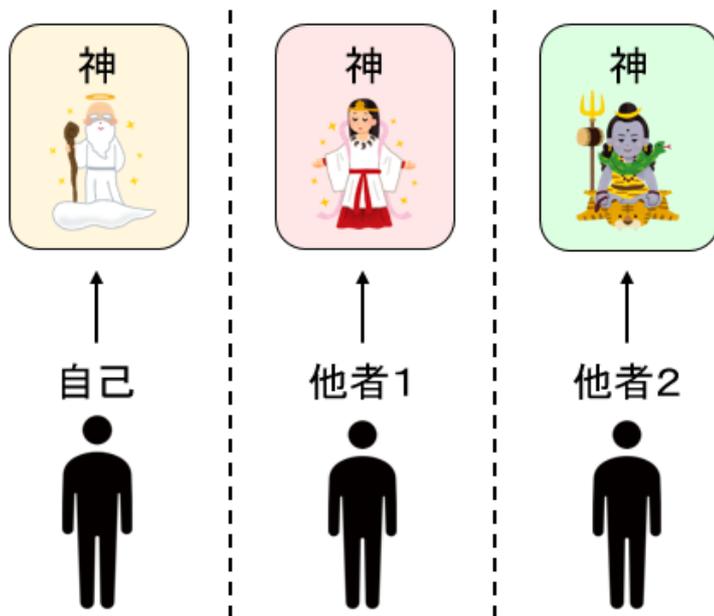


例えば、「神」とかはどうだろうか？

自己と他者で「神」という概念を共有すれば、それは共有意識となり得るのではないだろうか？

しかし、「神」は普遍的な共有意識にはなりえない。

それは文化によって違いが発生するし、個人の価値観によっても違いが発生するからである。



言語を扱う人間は、はじめは「神」のような概念で普遍的な世界を作ることを目指したが、次第にそれは不可能であることが分かってくるように進化していった・・・それが人類の歴史である。

では、文化が違ってても普遍的な共有意識になっているものは何なのか？

ヒントは、近代（17世紀）に入ってから現れたものである。

しばらく考えてみよう。

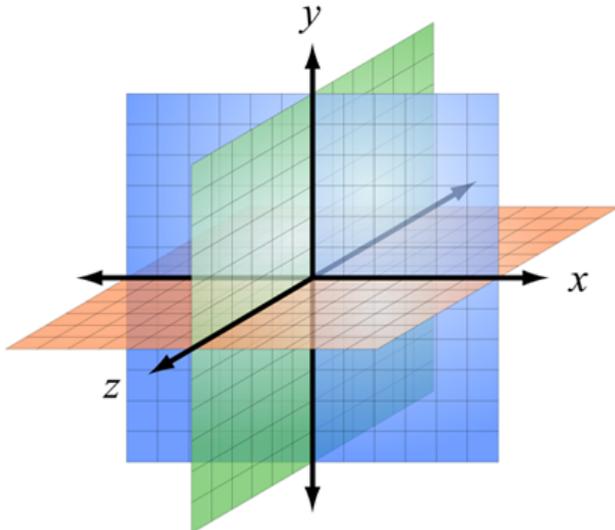


それは・・・ニュートン物理学なのである。

あるいは、ニュートン物理学のような物理法則であり、それらが作り出す**時空の意識**である。



また、**デカルト座標**もそうである。

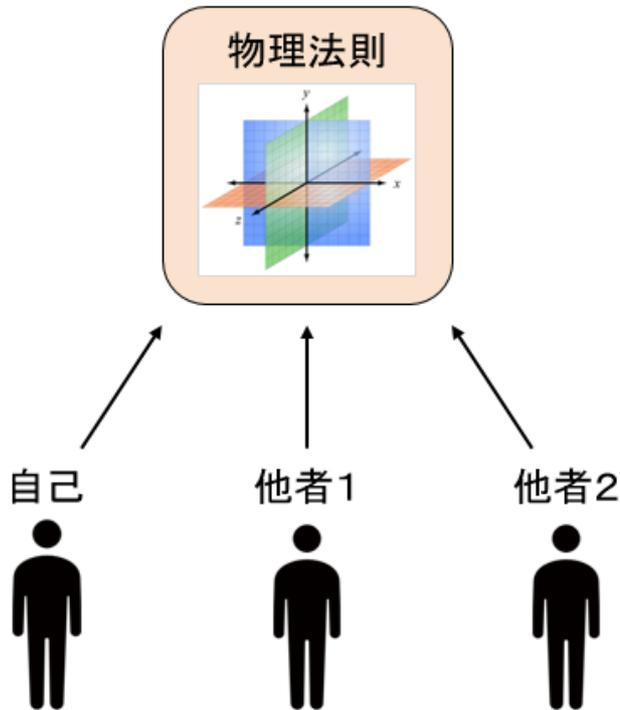


空間を  $x$ ,  $y$ ,  $z$  の座標を持つ三次元空間として捉えることができることに関しては、どんな文化、どんな宗教においても、人間の世界では共通して言えることである。

17世紀の西洋でそんな物の見方が現れたことは革命だった。

これまでの人類はそういう発想を持つ者がいなかったのである。

日本ではそれから19世紀の黒船来航の時にその知恵が伝えられ、その他も西洋の文化が伝わっていくごとに、この物の見方は人類全体が普遍的に共有する意識として広がっていった。



これは国境・文化は関係なく、人類に共通した普遍的な意識となり得るものであったため、グローバリズムの発端となり得るものでもあった。

また、普遍的な「人間」という存在を確立させるものでもあった。

だから、ニューソロジー的には近代の始まりは「人間の始まり」とされていて、人類はそこから新たに加速的な進化をすることになる。

### ■ 時空の意識と「中和」の力

そして、そうした「物理法則」・・・もとい「時空」の意識を作っているものが『次元観察子ψ8』である。

ニューソロジーにおいて自己と他者を『中和』するものは・・・この世界をニュートンが示したような物理法則でできていると絶対的に認識する、唯物論的な意識のことを言う。

そして、唯物論的な意識が強すぎてその価値観に幽閉されると人間は進化できない。そんな科学の力を冥王星のオコットは『プレアデスの統制』と呼び、それが進化を妨げていると言った。

書籍『2013:人類が神を見る日』の中で、オコツトが言っていた以下の箇所は、ニューソロジーの核心にも近い重要な箇所である。

「しかし、ここで誤解のないように注意してください。もう一度言っておきますが、プレアデスの統制が決して邪悪なものだといっているのではありません。この統制の力があるからこそ、タカヒマラは進化していくことができるのです。プレアデス領域はタカヒマラ全体の射影の場のようなものなのですが、その閉じられた領域で自己を完結させようと思事なまでの統制を作り上げていこうとします。これはいわば、シリウスからの関与を排除するために、スマルが作り出す防御シールドのようなものと言ってもよいでしょう。しかし、その一方で、シリウスがプレアデスに関与を行うためには、このシールドの完成を待たなくてはならないという仕組みがあります。結果的には、プレアデスの統制の世界を維持するための防御シールドである物質的な知識体系……それ自体がプレアデスの世界を変容させていく唯一の力となるのです。あなたがたの科学は今まさにその時期を迎えようとしています」

『プレアデスの統制』の力は中和側の力であり、中和側はニューソロジーでは先手にしてはいけない方向性のものであるため、それが強過ぎるとニューソロジー的な意識進化ができない。

しかしながら、そんな『中和』の力がないと、それより次に人間は進化しないものでもある。

そもそも、科学がないと人間はニューソロジー的に覚醒しないと、冥王星のオコツトは明言していた。そんな思想がニューソロジーである。

そのため、科学をちゃんと理解しないとニューソロジーは理解できない。それでいて、『次元観察子ψ8』は科学や物質主義側の意識の中にある概念である。

・・・というわけで、そうしたことを踏まえてψ8についてを理解していこう。

## 68. オンライン 3D ゲームの構造

これまで、『次元観察子』の $\psi_3$ 、 $\psi_4$ 、 $\psi_5$ 、 $\psi_6$ 、 $\psi_7$ ・・・を詳しく説明していった。

そうした中で、偶数系の『次元観察子 $\psi_6$ 』の説明がそこまで難しくなかったように、『次元観察子 $\psi_8$ 』の説明もそこまで難しくない。

これはすごく抽象的な話になるというよりか、現実で使われているものを例にしてイメージすればやりやすい。

特に、オンラインゲームの構造を例にして説明すると分かりやすいので、それを例にして説明しよう。

### ■ ゲームと偶数系の元止揚

結論から書くと、偶数系の元止揚（ $\psi_4$ 、 $\psi_6$ 、 $\psi_8$ ）はすべてコンピューターゲームに対応させることができ、それぞれ以下のようなになる。

- |                                                                                                                                                                                                |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・次元観察子<math>\psi_4</math><br/>⇒2D ゲーム、3D 静止画</li><li>・次元観察子<math>\psi_6</math><br/>⇒3D ゲーム</li><li>・次元観察子<math>\psi_8</math><br/>⇒オンライン 3D ゲーム</li></ul> |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

そのそれぞれについて説明していく。

#### ・ 2D ゲーム、3D 静止画と $\psi_4$

「2D ゲーム」は2Dの画面が動いているわけだが、それは3Dよりは次元が一つ下のものである。



だから、この段階だと「画面の中に世界がある」と認識できてはいるが、「その中に自身の身体がある」という意識までは確立していない。

また、「3D 静止画」も同様である。これは 2D ゲームと近い情報量を持つが、同じく「画面の中に世界がある」と認識できているが、「その中に自身の身体がある」という意識までは確立していない。

それから、これと $\psi 4$ の話と繋げると、一枚の 3D 静止画は一枚の「鏡面」と同義となるため、「 $\psi 3 \rightarrow$ 知覚正面、 $\psi 4 \rightarrow$ 鏡面」である話と絡めて覚えておこう。



[リンク：■変換人型ゲシュタルト論(35)～「鏡像段階論」について～ - 哲学思考のなれの果て]

- 3D ゲームと $\psi 6$

「3D ゲーム」については以前に『61. 3D ゲーム内の身体』の項で説明した。

「3D ゲームの中に身体がある」という意識が確立しているのが『次元観察子 $\psi 6$ 』である。

ただ、この段階では「他のプレイヤー」は存在してない。

単一の「3D ゲームの身体」だけで遊んでいるオフライン状態である。

だから、 $\psi 6$ は「自分を中心に身体を動かしてるだけ」な次元になる。

- オンライン 3D ゲームと $\psi 8$

そして、単一の 3D ゲームの次に来るのが「オンライン 3D ゲーム」である。

これはコンピューターゲームにおける最終形態でもある。

これまでは単一の身体を動かしていただけだったが、この形態になると他の人も表れてくる。



その結果何が起きるのか？

自己と他者同士での「ルール」のようなものが表れ、双方に共通する「物理法則」が重要となる。

また、そこから「交流」が発生する。自分以外の他者が自分と同様の意思を持って動いていることが分かるし、共通のルールに基づきながら共同作業へ取り組んでいくこともある。

それから、必然的に「競争」も発生する。

オンライン対戦ゲームをやったことがある人なら分かるだろうが、競争をやると1位が発生し、上手い人と下手な人との間のランクも発生するので、皆が上の方を目指すために、各々のスキルを研磨したり、勝つための知識を身につけるようになる。人気のゲームで最上位になると、プロゲーマーのようなアスリートでないと勝てないぐらいのレベルになる。

それから、オンラインゲームをやったことがある人なら分かるだろうが、仮想アバターにあたるキャラクターを育てていくためには、多大な時間を労することになる。他者よりも優位に立つには、多大な時間を労してキャラクターを強くしたり、仮想的な物資を増やしたりしていく必要がある。そんな中、ゲーム内で仮想通貨のようなものが発生したり、仮想的なキャラクターが現実のお金で売られたりすることもあり得る。

そんなオンラインゲームの中にあるのは、人間によって作られた「システム」であり、その中で上位に行くのに必要なのは「システムを理解することに従事し、その中での競争で他者より優位に立つこと」である。

そのような「システム」は、ニューソロジーにおける『次元観察子ψ8』のイメージにも近いので、それか理解できるとψ8についても分かってくると思う。

#### • 人間の自我とオンライン3Dゲームの構造

こうしたオンライン3Dゲームの構造は、実は人間の自我の発達とも関係している。

人間の自我は、ニューソロジーで言う偶数系の観察子を先手にして、以下のように発達する。

- ・この世界に三次元空間のような空間があると分かってくる  
( $\psi$ 4、2D ゲーム、3D 静止画に対応)
- ・この世界が三次元空間であることを理解し、その中で自身の肉体を動かす  
( $\psi$ 6、3D ゲームに対応)
- ・他者も自身と同様の肉体を持っていることを理解し、同様のルールを共有して生活する  
( $\psi$ 8、オンライン 3D ゲームに対応)

赤子の頃の感覚を覚えている人はいるだろうか？

いや、それはほとんど忘れられているものだろうが・・・

白紙のような赤子の状態の時は、成長した人間のように空間認識すらまったく定まっていない所からスタートする。目の前に積み木があっても、実際にどういう形をしているのか、そもそも手の届く所にあるのかは、実際に触ってみないと分からない感覚で生きている。

そうした中で、空間を物質とみなして生活していくと、上記のようなオンライン 3D ゲームの感覚を経て意識を形成させていくことが分かるだろうか？

さらに、人間が持つ「自我」もまたそうした意識をベースに作られるものであり、ニューソロジーで『人間型ゲシュタルト』と呼ばれるものも、それと同義なわけである。

### ■ 人間関係・ビジネスと $\psi$ 8

オンライン 3D ゲームのような『次元観察子  $\psi$ 8』における人間関係をイメージできるだろうか？

加えて、それに対する『次元観察子  $\psi$ 7』についてとを合わせて考えていくと…

$\psi$ 7は「後ろ方向での繋がり」が要であったのと逆で、 $\psi$ 8は「前方向での繋がり」が要である。

～ $\psi$ 7の場合～



～ $\psi$ 8 の場合～



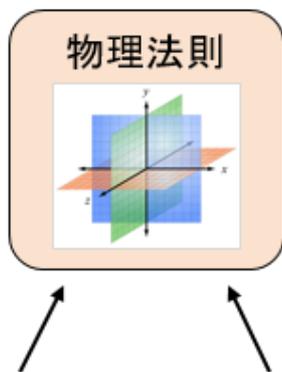
これはなんてことなく、普通の付き合いみたいなイメージである。

お互いの本質的な所には触れてないかもしれないが、一緒に目標を達成する分には十分な関係である。

さらに、 $\psi$ 8 は自己と他者が共有する時空の意識や物理法則である。

・・・ということは、時空の仕組みの様々も $\psi$ 8 であり、科学的な知見も $\psi$ 8 になる。

普通の人間関係において意識を共有しているものとしても、 $\psi$ 8 のような物理法則や時空の仕組みが要になる。



加えて、時空の仕組みや科学的な知見といったものは、たくさんの他者がいる中で必要なものなため、それをつきつめると必然的に $\psi 8$ についてをつきつめていることになる。

そのため、 $\psi 6$ もビジネスの役に立つものだったように、その上位にある $\psi 8$ はそれ以上にビジネスの役に立つかもしれない。

$\psi 6$ は個人を発展させるようなものだったが、 $\psi 8$ は無数の人を発展させるようなものになる。



そんなイメージのものが分かってきたら、『次元観察子 $\psi 8$ 』についても分かってくると思う。

## 69. 木星の「法」と土星の「法」

これまでは『次元観察子ψ8』の構造にまつわる話をしてきたので、今回はそれに付随したイメージや、概念の話をしよう。

「法」という言葉の二面性について考えると、ψ7とψ8についてイメージがしやすいため、それについて考えていく。

# 法

### ■ 意識進化側の「法」

「法」とは何か？

文化的、国語的な意味でそれをつきつめると、日本が中国から輸入した漢字に「法」という文字があり、それが意味を持っていることになる。だからその原義は中国にある。

また、日本で「法」という言葉がどういう意味で使われてるかによって、その意味が異なることもある。

まず、霊的・宗教的な意味での「法」についてつきつめていくと、**仏教における「法」**がそれに該当する。

仏教における「法」はサンスクリット語の「**ダルマ**」を漢訳したもので、宇宙の秩序や道理・真理・正義・道徳など・・・「理」を意味するものを中心にした多様な意味を持つ概念となっている。

仏教では仏が悟った真理や、仏の教えのことを「法」と呼ぶ。

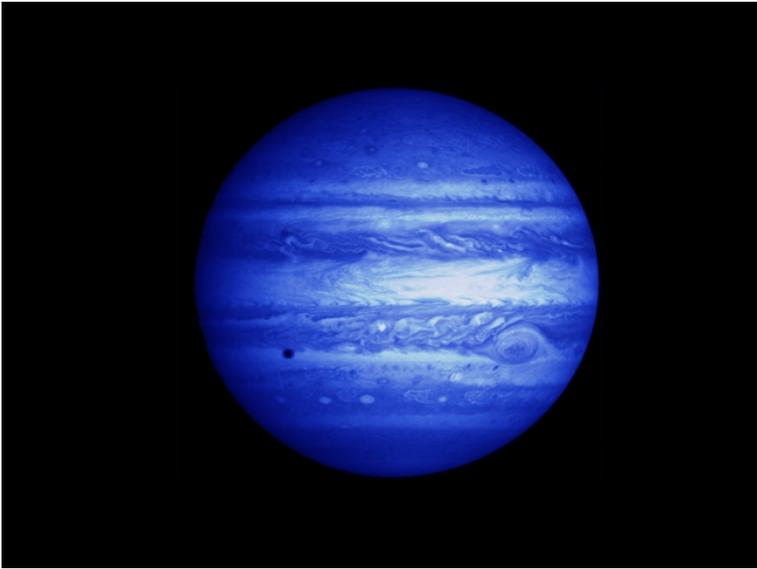
このように「宇宙の秩序や道理」を意味するものとして「法」が使われることがあり、それは仏教における「悟り」とも絡んだ概念である。

仏教書の『法華経』にある「法」もそうした意味のものに該当する。

また、日本ではカトリックの最高指導者のことは「ローマ法王」と呼ばれているが、ここにある「法」も、宗教的なものとして「ダルマ」に近い意味として捉えるのが正しいだろう。

こうした霊的な意味での「法」は、誰かが言った言葉というよりかは、自然に存在する「宇宙の秩序や道理」の意味であることに注目したい。

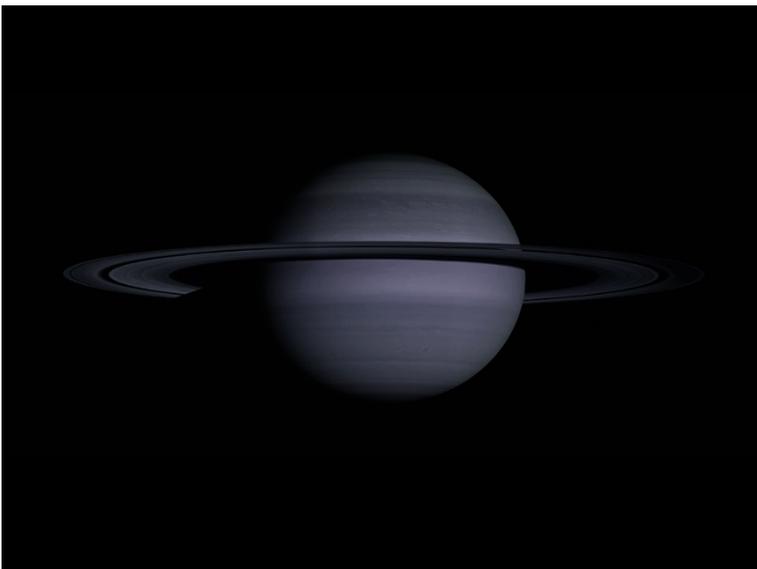
ヌーソロジー的には、このような「法」は、『次元観察子ψ7』にある「法」であり、惑星で言うと**木星の「法」**だと言うことができる。



まずは、このようなものとしての「法」のイメージを深めていこう。

### ■ 時空側の「法」

対して、『次元観察子 $\psi$ 8』にある「法」は、惑星で言うと**土星の「法」**である。



土星は占星術的に「**試練、収縮、制限、忍耐、責任**」などを意味する。

こちらの「法」は割と一般的なものなので分かりやすい。

人間が決めたルールとしての「法」であり、国家において厳守しなければならない「法」である。

「法律」「憲法」「司法」・・・それらの言葉が意味するものでもある。

ごく普通に日本で暮らしていたら守らないと行けない「法律」はまさしく「法」であるし、会社などに所属していた場合、会社が設定している守るべきルールも「法」である。

それから、中国の思想には「法学」というものがある。

これは孔子が始めた「儒学」と並んで、中国政治で重要な思想であり、始皇帝が中国全土を秦で統一する

あたりの時期で確立されていったものである。

「法学」の考え方はシンプルである。人間は「性悪説」で言われているように放っておくと悪いことをしてしまう可能性があるため、厳格な「法」を設定してその行動を統率しないとイケない。それは悪いことをした人は処罰を与え、逆に良いことをした人には報酬を与えるようなものである。

特により強大な国家を運営するためには、より強力な「法」が必要になる。

以上で説明したようなものが、『次元観察子ψ8』にある「法」である。

中国では上記のような意味の「法」が元々あったものに該当するらしいが、次第にインドから仏教が伝わるにあたってサンスクリット語の「ダルマ」の意味をした「法」や、仏教の教えのことを「法」と呼ぶように意味が加わってくる。

そのため、「法学」のようなものにも「法」という言葉が使われるし、仏の教えや宇宙の秩序や道理のようなものも「法」という言葉で表される。

こうした原義における「法」には二面性があることを理解しておこう。

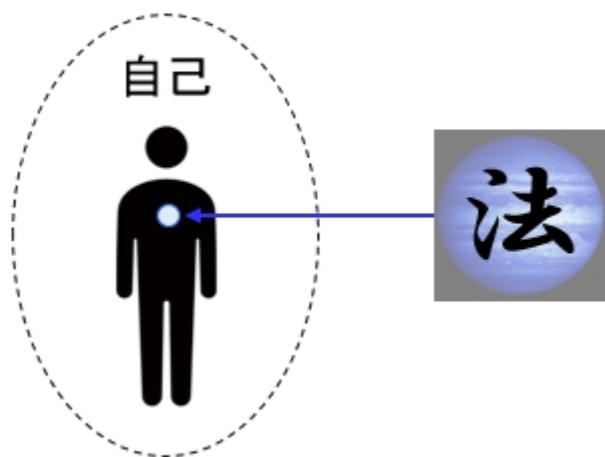
### ■ 内にあるか？ 外にあるか？

「木星の法」と「土星の法」として、二種類の「法」について説明した。

前者の「法」は自然にあるものである。

自然にあるということは、自身の内側にもある。

そのため、これは「内側にある法」とも言えるだろう。



ただ、これを認識することは割と難しい。

西洋で一部の神秘主義は「グノーシス」という言葉を用いて、人が自らの神性を認識することを特別なこととした。

また、仏教には「悟り」という言葉があり、これは仏の教えやその真理を理解することでもあるが、そう簡単に分かるものではないし、簡単に説明できるものでもない。

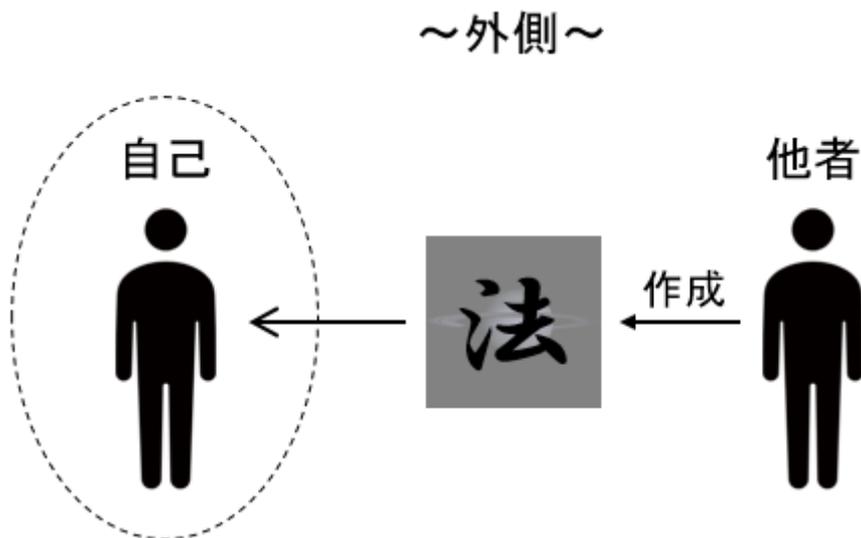
それらは普通の人気づきにくい概念を表した特別な言葉であるため、特別な言葉で表さないといけな  
いぐらい理解することが難しい。

内側から来る「法」はそういう性質を持っている。

一方で、後者の「法」は分かりやすい。

それは外側から設定されているため、いわば「外側にある法」である。

外側から設定されているということは、他者が作ったものということにもなる。



後者の「法」において言えることは、それは絶対に人間が作っていることである。

中国で「法学」が成立した時も、漢文を扱える知識人が一生懸命「法」を書いて、それを皇帝が利用する  
ように普及した。

日本では聖徳太子が国を治めるために、「十七条憲法」や「冠位十二階」などの制度を作った。

その他にもハンムラビ法典、西洋諸国の法律・・・人間が国家を形成していくにあたって様々な法律が作  
られていったが、今日に至るまでの法律はすべて人間が作っている。

神から預言を受けて作られたとされる宗教的な律法もあるが、それも結局は人間が作ったものである。

このように、「外側にある法」は他者が作った法であり、必然的に人間が人間のために作った人間主体の  
ものであることを念頭に置いておこう。

以上。

このように、「内側にある法」と「外側にある法」の二つを区別して理解すると、「法」の二面性がさら  
にはっきりしてくると思うし、ψ7とψ8の双方のイメージも深まってくると思う。

## 70. 人間の元止揚最終まとめ

これまで、『次元観察子』の $\psi 1 \sim \psi 2$ から $\psi 7 \sim \psi 8$ までを説明していった。

$\psi 1 \sim \psi 8$ はニューソロジー用語で『元止揚』と呼ばれている箇所である。

いや、もっと正確に言うなら、次元観察子は人間の領域ということで、 $\psi 1 \sim \psi 8$ は『人間の元止揚』と呼ばれる。

これとは別に、大系観察子の $\Omega 1 \sim \Omega 8$ は『ヒトの元止揚』と呼ばれる。

それから、人間の元止揚 $\psi 1 \sim \psi 8$ が形成する空間のことを『元止揚空間』という。

これまで『変換人型ゲシュタルト論』というタイトルでニューソロジーを説明していったが、『元止揚空間』を理解することは『変換人型ゲシュタルト論』を理解することと同義である。

そして、それらを理解することはニューソロジーの基本をちゃんとマスターすることと同義である。

こうした概念の理解をナシにして、ニューソロジーっぽい情報からニューソロジーを理解しているだけだと、ニューソロジーっぽいことを分かっているだけの人になってしまう。ニューソロジーは理解していない。

『変換人型ゲシュタルト』と『元止揚空間』は、それぐらい重要なニューソロジーの基本であることを念頭に置いておこう。

### ■ 元止揚についてのおさらい

ここであらためて『元止揚』についてのおさらいをすると・・・

そのそれぞれの階層は、ニューソロジー用語で以下の概念が絡んでくる。

ノウス側ーノス側

$\psi 13$ ( $\psi 14$ )	<u>人間の観察精神(とその反映)</u>	<u>変換質</u>
$\psi 11 - \psi 12$	<u>人間の定質と性質</u>	<u>中性質</u>
$\psi 9 - \psi 10$	<u>人間の思形と感性</u>	<u>調整質</u>
$\psi 7 - \psi 8$	<u>球精神次元</u>	} <u>元止揚</u>
$\psi 5 - \psi 6$	<u>垂質次元</u>	
$\psi 3 - \psi 4$	<u>垂子次元</u>	
$\psi 1 - \psi 2$	<u>表相次元</u>	

これらのニューソロジー用語は、『次元観察子』と対応関係を持つものとしてニューソロジー学習においてたまに出てくることがあるので覚えておくと良い。

また、『元止揚』に関してはざっくりと以下の要素が絡む。

ノース側—ノス側

$\psi 13$ ( $\psi 14$ )	人間の観察精神(とその反映)	変換質
$\psi 11$ — $\psi 12$	人間の定質と性質	中性質
$\psi 9$ — $\psi 10$	人間の思形と感性	調整質
$\psi 7$ — $\psi 8$	<u>意識進化と時空</u>	} 元止揚
$\psi 5$ — $\psi 6$	<u>自己と他者</u>	
$\psi 3$ — $\psi 4$	<u>主体と客体</u>	
$\psi 1$ — $\psi 2$	<u>空間と時間(またはマイクロとマクロ)</u>	

「マイクロとマクロ」「主体と客体」「自己と他者」「意識進化と時空」はそれぞれ元止揚の次元観察子と絡んでくる概念なので、その構造と紐付けてそれぞれのワードについてを考えていこう。

$\psi 7$ と $\psi 8$ に関しては対応させる言葉が少し難しいが、これは「意識進化」と「時空」とした。その意味は「自己と他者の等化」と「自己と他者の中和」である。ニューソロジー的な『等化』と『中和』を必ず絡めて考えよう。

このように、ニューソロジーの構造と「マイクロとマクロ」「主体と客体」「自己と他者」「意識進化と時空」といった概念について考えていくと、その思考が独特なフレームワークになってくる。こうしたフレームワークが強い力を持っているのもニューソロジーの特徴である。

## ■ 位置と元止揚

さて、これまでの総括もかねて、 $\psi 1$ ～ $\psi 8$ までの『人間の元止揚』と絡んだニューソロジーの概念についてをまとめていこう。

元止揚にある各概念を「位置」に対応させると以下のようになる。

$\psi 7 - \psi 8$	$\pm\infty$ と $\mp\infty$ の等化と中和
$\psi 5 - \psi 6$	$\pm\infty$ と $\mp\infty$
$\psi 3 - \psi 4$	$-\infty$ と $+\infty$
$\psi 1 - \psi 2$	$\frac{1}{\infty}$ と $\infty$

まず、 $\psi 1$ と $\psi 2$ はごく普通の空間で、そこにはマイクロ ( $1/\infty$ ) とマクロ ( $\infty$ ) がある。  
 次に、それを反転させて進む道は前側にある無限遠点 ( $-\infty$ ) から始まる。そこに $\psi 3$ がある。(  $\psi 3$  は電荷的にマイナスを当てるのが正解らしい)  
 無限遠点の次はその逆側にある無限遠点 ( $+\infty$ ) である。これは後ろ方向にある無限遠点であり、ごく普通の「 $\infty$ 」のイメージに近い。そこに $\psi 4$ がある。  
 さらにその次は $\psi 3$ と $\psi 4$ の『等化』で $\psi 5$ になる。これは前側の無限遠点と後ろ側の無限遠点を繋げるイメージになり、「 $\pm\infty$ 」と表記される。  
 そうしたら次はその「 $\pm\infty$ 」の逆側に $\psi 6$ がある。  
 最後に、その両者の『等化』と『中和』であり、これが $\psi 7$ と $\psi 8$ に対応する。  
 そこが『人間の元止揚』における最終到達地点であり、そこで一旦完結している。

・・・以上。ざっくりと説明してきたが、これらの「位置」を「自身の中にもある意識の構造」として実感できるだろうか？

これらをすべて感覚的に掴むとなると、簡単にはいかないだろうが・・・

このように、無限遠点から始まる「位置」を頼りにして、ヌーソロジーにある意識の階層構造を理解することが重要である。

そうすると、ヌーソロジーで言われている『シリウス』の具体的な位置も分かってくるようになる。

普通、精神世界やスピリチュアル(精神上のもの)をつきつめていると、常に抽象的になってしまい、掴みどころが曖昧になってしまうが・・・

ヌーソロジーの場合は「位置」と紐付けてそれを認識することができるわけである。

### ■ モノとの関係と元止揚

それから、「モノ」との関係だと以下のようなになる。

ψ7ーψ8	無数の身体、「モノになる」状態
ψ5ーψ6	無数のモノ、一つの身体
ψ3ーψ4	一つのモノ
ψ1ーψ2	モノを普通に物質と見る

---

まずはψ1とψ2はごく普通の次元のため、モノを普通に無機質な物質として見る状態に該当する。

そこから「反転」を行い、一つの対象から無限遠点を発見するところで、一つのモノを発見する。

次に、モノを無数化して一つの身体で統合する。

最後に、身体を無数化して「モノになる」状態で統合する。これがψ7のフェーズであり、元止揚として一旦完了する。

これまでの『変換人型ゲシュタルト論』で説明してきた内容でこれらの構造が分かるだろうか？

これもまた感覚的にすべてを掴むとなると簡単にはいかないだろうが・・・

重要な階層構造を表しているなので、覚えておこう。

### ■ 惑星と元止揚

次に、「惑星」と『元止揚』の関係についてである。

これまで、惑星(水星・金星・太陽・火星・木星・土星など。便宜上、月と太陽も惑星に含める)と『次元観察子』とを絡めて説明してきた。

これらの惑星は西洋占星術だと特別な意味を持つものとされており、人間の意識にも関係するものとして扱われている。

**太陽**：受動性から能動性に切り替わった時に発揮する大いなる力

**月**：感情の快・不快などの基礎的反応パターン

**水星**：知性の在り方や言語コミュニケーションの在り方

**金星**：嗜好性の在り方や美的感覚の在り方

**火星**：他者に対して発揮する闘争的な力

**木星**：拡大・発展・成功などをもたらす力

**土星**：制限・管理・試練などをもたらす力

**天王星**：個人を開放する理性的な力

**海王星**：無意識へと誘う夢見の力

**冥王星**：限界における切り替え点

これらの惑星とヌーソロジーの元止揚との関係は以下のようになる。

ノース側ーノース側

---

$\psi 7 - \psi 8$	木星と土星
-----	
$\psi 5 - \psi 6$	太陽と火星
-----	
$\psi 3 - \psi 4$	水星と金星
-----	
$\psi 1 - \psi 2$	地球と月

---

正確には、 $\psi 3$  の上位に水星がある、 $\psi 5$  の上位に太陽がある・・・といったイメージのが近いのだが、そのそれぞれを紐づけて考えていくと分かりやすいのでここではその方針で行く。

『次元観察子』は惑星の力の片鱗を持つものであり、惑星の力の本質は『大系観察子 ( $\Omega 1 \sim \Omega 12$ )』に該当する。

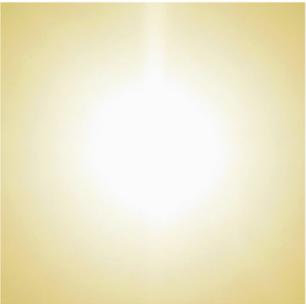
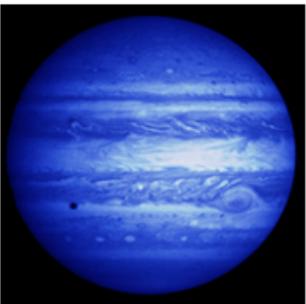
だから『大系観察子』の方が本質的ではあるのだが・・・それをつきつめると空間の話よりも抽象的で精神的な話になってしまう。

対して、『次元観察子』は位置や空間の話なので具体的である。そのため、惑星と『次元観察子』とを絡めて考えていった方がやりやすいと思う。

惑星のヌーソロジー的な解釈については、アネモネ WEB で公式の見解がまとめられていたことがあるので、気になる人はそれも見てみると良いと思う。

[リンク：高次の地球になったときに霊太陽は姿を現す (2023年5月号)]

また、これまで説明していった『次元観察子』との関係を踏まえると、以下のようにまとめることができる。

奇数系 (NOOS) 自己先手の流れ		偶数系 (NOS) 他者先手の流れ	
	<水星> 哲学 (モノに従事)		<金星> 栄華 (モノに従事)
	<太陽> 自己認識 (身体化)		<火星> 他者化 (身体化)
	<木星> 意識進化 (概念化)		<土星> 機械化 (概念化)

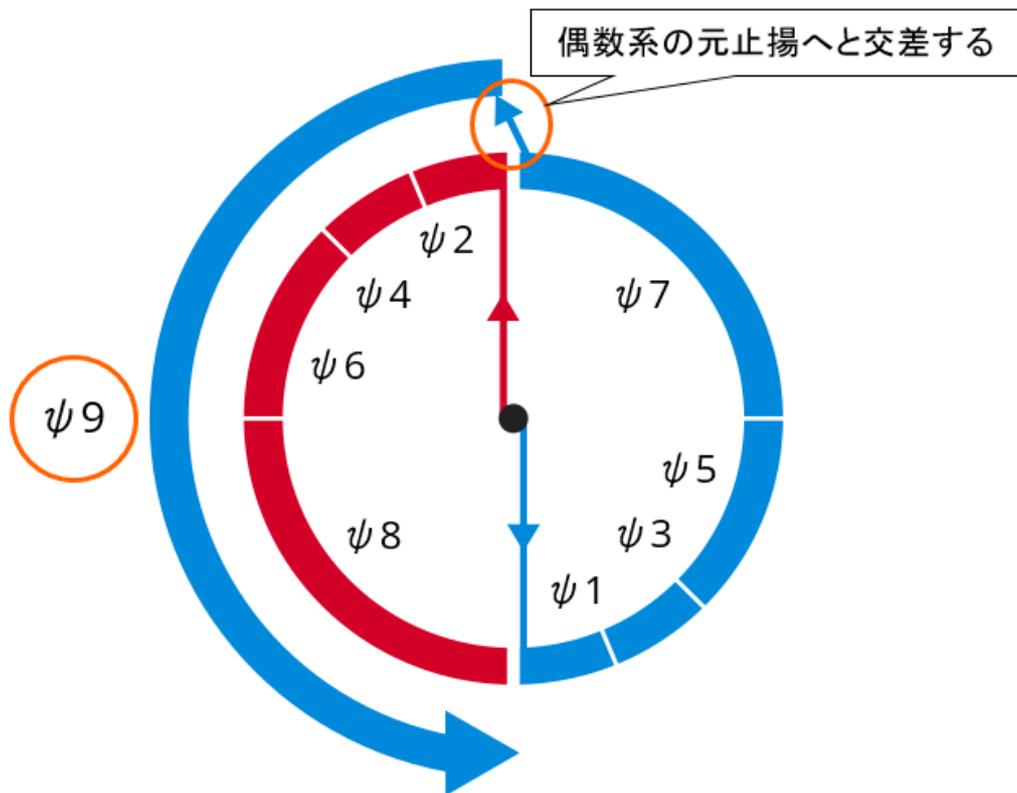
この中で、太陽と火星に対応する『次元観察子ψ5』と『次元観察子ψ6』の所は合わせて「身体化の次元」であるため、それをベースに元止揚が形成するニューソロジーの世界を理解していても良いと思う。

これらが分かるようになってくると、ニューソロジーや精神世界の道を行くにおいて心強いだらうと思う。

### ■ 元止揚の次にあるもの

『次元観察子』のψ1～ψ8と『元止揚』より次の話もざっくりとしておこう。

ケイブコンパスの図で説明すると、ψ1～ψ8の次を進むと、今度は奇数系の元止揚が偶数系の元止揚へと交差するようになる。

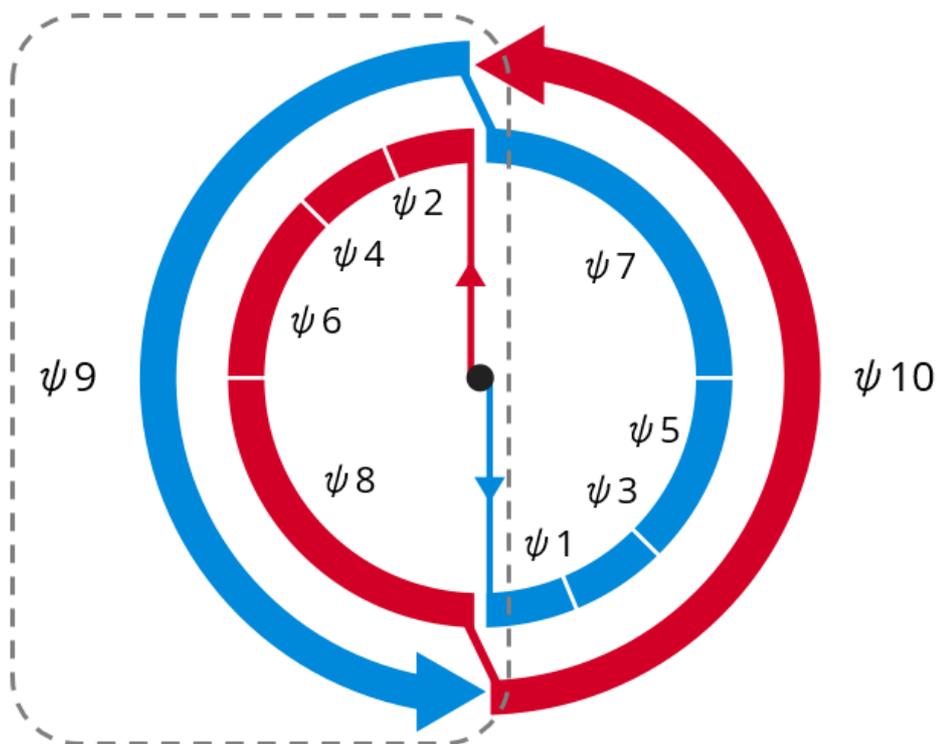


偶数系の元止揚へと交差する？

ということだろうか？

この辺りはイマイチ分かりにくいかもしれないが・・・

さらに、そうすると下記の図のように、『次元観察子 $\psi_9$ 』の位置と偶数系の元止揚（ $\psi_2 \sim \psi_8$ ）の位置が重なるようになり、他者へ行く構造によって「ねじれ」が生じることも重要である。



$\psi_9$  は偶数系の元止揚に被さる所に位置し、 $\psi_{10}$  は奇数系の元止揚に被さる所に位置するようになるため、本来、 $\psi_9$  は $\psi_7$  と $\psi_8$  を『等化』するためノウス (NOOS) 側だが、人間にとってはノス (NOS) として機能するようになったりと、色々ややこしくなってくる。

それから、 $\psi_9$  である『人間の思形』は、端的に説明すると「言語」が該当する。

そのため、「モノ」がテーマだった『次元観察子 $\psi_7$ 』までの次は、「言語」がテーマになってくるわけである。

ここまで来ると、個人の進化とは別に、より一層人類全体の意識発達に関係する概念となってくる。

ここから先はこのシリーズでは詳しく説明はしないが・・・

ひとまず、「 $\psi_9$  からは全然違う構造になってくるため、 $\psi_8$  までで一区切り」ということを覚えておこう。

### ■ 色々膨大なヌーソロジー

さて、この『変換人型ゲシュタルト論』シリーズは(1)～(70)と長く続き、たくさんのことを書いていった。

その話題はあっちこちに飛び、あらゆる事象を包括していて膨大なものであった。

#### ノウス側ーノス側

$\psi_{13}$ ( $\psi_{14}$ )	人間の観察精神(とその反映)	変換質
$\psi_{11}$ ー $\psi_{12}$	人間の定質と性質	中性質
$\psi_9$ ー $\psi_{10}$	人間の思形と感性	調整質
$\psi_7$ ー $\psi_8$	意識進化と時空	} 元止揚
$\psi_5$ ー $\psi_6$	自己と他者	
$\psi_3$ ー $\psi_4$	主体と客体	
$\psi_1$ ー $\psi_2$	空間と時間(またはミクロとマクロ)	

ヌーソロジーは階層構造が明確なため、どこをフォーカスするかによって、割と身近な話になったり、人間離れした抽象的な話になったり、壮大な話になったりする。

だからどんなジャンルと絡んだ話になるかは、どの辺りをフォーカスするかによって異なってくる。

そのため、「ヌーソロジーはどのようなものか？」については一言では非常に説明しづらいものであったが・・・

長きに渡る説明で大体どんなものか分かっただろうか？

長々とした話の中で、本質的にヌーソロジーの中核となっている所はなんなのかというところ・・・それは**グノーシス思想**であることだと思う。

グノーシス思想は古代から西洋の神秘主義者や秘儀参入者や追求していたものであり、仏教など東洋の思想にもそれに近いものがある。

古代ギリシャにあったものだと、「ヘルメス文書」に書かれた「ヘルメス主義」のようなものに、ヌーソロジーは趣旨に近い。

[リンク：ヘルメス文書 - Wikipedia]

グノーシス思想は「知識」と「認識」が一体となった知性を追求するものなため、ヌーソロジーも「知識」だけでなく、「認識」と「体験」ありきなものであることが重要である。

ヌーソロジーに限らずグノーシスを目指す神秘思想やスピリチュアリズムは数多く存在する中で、ヌーソロジーは**理系的な知識を持って挑むグノーシス思想**であり、そのアプローチにおいてかつてないほどに完成度の高いもの・・・みたいな位置づけになると思う。

それが、「**冥王星のオコット**」というチャネリングソースと、60年代生まれの日本のロックンローラー半田広宣のペアによってでき上がったわけである。

そして、冥王星のオコットが「この送信の目的は、わたし自身、つまり**変換人型ゲシュタルト**をあなたに**プログラムすることにあります**」と言ったように、『**変換人型ゲシュタルト**』を一つ一つ解き明かしていくことがヌーソロジーの本筋にある。

だから、ヌーソロジーではそのゲシュタルトの一つ一つをグノーシス（認識）していくのである。

まずは「通常空間の反転」。

次に「反転した空間と通常空間の等化」から「自己」の発見。

最終的に「背中合わせの自己と他者」をグノーシスしていく・・・

それらが上手くいくと・・・各々は果たしてどんな感覚がやってくるだろうか？

なんだかかつてないようなパワーが自身の意識から湧き上がって来るかもしれない？

さて、(1)～(70)の長きに渡る『変換人型ゲシュタルト論』は、**今回で最後**であるため、これにておしまいである。

これまでの膨大な話はすぐには理解できないかもしれない。

しかし、ヌーソロジー理解の道はいつ行っても良いものだと思うし、道はいつでも開けている。

ヌーソロジーは理解のために必要な情報を揃えて、じっくりと考え続ければ必ず分かるものだと思うので、すぐには分からない人も気長に学んでいき、いつか『変換人型ゲシュタルト論』に書いてあることが理解できるようになれば良いと思う。

**おわり**

## Youtube 動画リンク集(QRコード)

- Willow - Sweater (Official Video)



<https://www.youtube.com/watch?v=1GDjfA-Z4H4>

(チャンネル : thisiswillow)

- 【ヌーソロジー動画】「背中合わせの自己と他者」回転アニメーション



<https://www.youtube.com/watch?v=LqGWZtb7P4Q>

(チャンネル : Raimu)